熊本県文化財調査報告　第12集

尾窪

——熊本県下益城郡城南町尾窪中世墳墓群の調査——

1973

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第12集

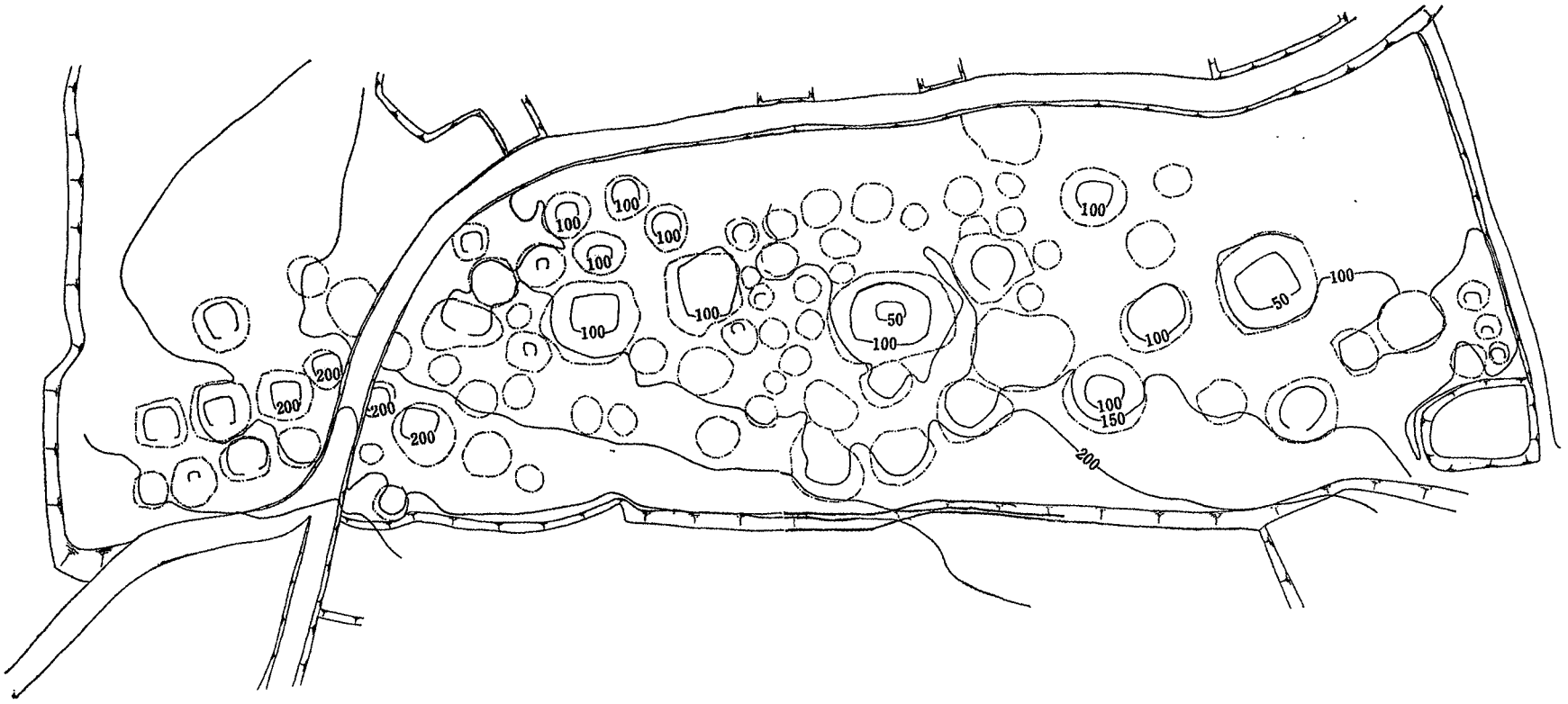
尾窪

——熊本県下益城郡城南町尾窪中世墳墓群の調査——

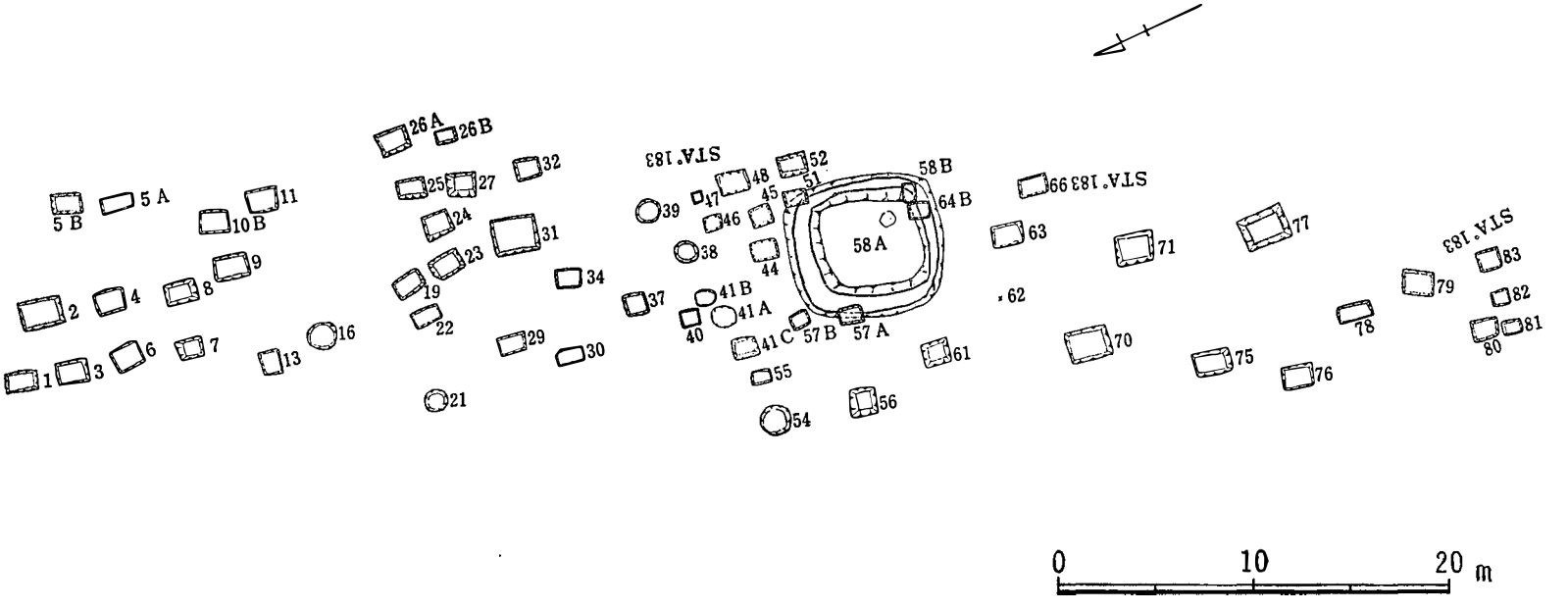
1973

熊本県教育委員会

尾窪墳墓群全景



第1図Ⅰ　尾窪墳墓群配置図（封土群）



第1図Ⅱ　尾窪墳墓群配置図（土壙群）

例　言

本稿は、日本道路公団の九州縦貫自動車道建設事業に伴う事前緊急調査として、熊本県教育委員会が昭和47年3月1日から同年10月31日にわたって発掘調査を実施した熊本県下益城郡城南町尾窪中世墳墓群の調査報告書である。

本稿の執筆は発掘および整理にあたった調査員が行ない、報文の末尾にそれぞれの文責を記した。とくに人骨発見と同時に、人類学部門での調査を長崎大学医学部内藤芳篤教授・坂田邦洋助手に依頼し、玉稿をいただいた。また文献史学部門では熊本大学法文学部松本雅明教授に玉稿をいただいた。記して謝意を表する。

本稿の完成にあたっては、調査終了後まもなく、熊本を去った石田彰紀（現広島市教育委員会）の力に帰するところが大きい。掲載の実測図は各執筆担当者の手によるが、製図にあたっては、高木正文、江本直、野田拓治が担当した。また原稿の整理には、田中君代、西町圭子、山本幸子各女史の手を煩わした。

航空写真の撮影にあたっては、陸上自衛隊西部方面総監部の協力を得た。記して謝意を表する。

本報告書作成にあたって、松本雅明教授・乙益重隆教授（国学院大学教授）・大場磐雄博士（国学院大学客員教授）にいろいろと指導助言をいただいた。記して謝意を表する。

報告書の編集には、隈昭志・野田拓治がこれにあたった。また、題字は村田一美文化課主幹におねがいした。

序

近年開発事業の活発化にともない「国土開発と文化財の保存」が社会的問題となっています。熊本県下においても、道路建設・宅地造成・工事建設等によって埋蔵文化財の破壊が年々増加の一途をたどっております。貴重な文化財が無計画に破壊されることは、学術的にはもちろん文化財行政上もまことに憂慮にたえません。しかしこれらの中で破壊もやむを得ない遺跡については、発掘調査を行ない記録保存することに鋭意努めておりますが、またそうすることは、現在の私たちにとってもっとも大切な使命と考えております。本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解のために少しでも役立つならば幸です。

発掘調査の実施にあたっては道路公団当局のご理解とご協力をはじめとして、調査にあたられた関係各位、ならびに城南町教育委員会をはじめ、地元の方々からのご協力とご鞭撻を賜りました。ここに心からお礼申しあげます。

昭和48年 3 月

熊本県教育長　河　野　正　夫

本　文　目　次

序　章……1

Ⅰ　遺跡発見の契機と調査の経緯……1
Ⅱ　遺跡の地理的概況　付・城南町周辺の五輪塔……6
Ⅲ　尾窪中世墳墓群成立の背景……11

第一章　調査の概要……16

Ⅰ　主要な墳墓……16
Ⅱ　グルーピングについて……28

第二章　遺　構……32

Ⅰ　土　葬　墓……32
Ⅱ　火　葬　墓……36
Ⅲ　特殊な遺構……37

第三章　遺　物……41

Ⅰ　五　輪　塔……41
Ⅱ　銭　貨……42
Ⅲ　灰釉陶器……43
Ⅳ　土師質土器……43
Ⅴ　瓦　器……45
Ⅵ　玉　類……46
Ⅶ　鉄　釘……47
Ⅷ　その他の遺物……49

第四章　埋　葬……52

第五章　人　骨……62

結　語……79

おわりに……82

挿　図　目　次

第１図　尾窪墳墓群配置図　Ⅰ（封土群）Ⅱ（土壙群）……口絵
第２図　遺跡位置図（付・五輪塔分布図）……7
第３図　五輪塔実測図……10
第４図　第13・61・77号墓実測図……18
第５図　尾窪遺跡地形図……折り込み
第６図　第４号墓実測図……19
第７図　第58Ａ号遺構……38
第８図　銭貨実測図……42
第９図　第54号墓出土の灰釉陶器実測図……43
第10図　土師坏実測図……44
第11図　瓦器実測図……46
第12図　玉類実測図……47
第13図　鉄釘実測図……48
第14図　その他の遺物実測図……50

表　目　次

第１表　尾窪中世墳墓一覧表・Ⅰ……23
第２表　尾窪中世墳墓一覧表・Ⅱ……24
第３表　尾窪中世墳墓一覧表・Ⅲ……25
第４表　尾窪中世墳墓一覧表・Ⅳ……26
第５表　尾窪中世墳墓一覧表・Ⅴ……27
第６表　土壙と出土遺物……30
第７表　空風輪部計測表……41
第８表　火輪部計測表……42
第９表　水輪計測表……42
第10表　地輪計測表……42
第11表　土師質土器の形態分類表……45

調 査 団 の 編 成

第 一 次 調 査

調査責任者	広 重	等	熊本県教育庁社会教育課長
調 査 主 任	桑 原 憲 彰	〃 〃 〃	主事
調 査 員	高 木 正 文	〃 〃 〃	嘱託
調査補助員	安 達 武 敏	元大矢野中学校教諭	

第 二 次 調 査

考 古 学 班

調査責任者	田 辺 哲 夫	熊本県教育庁文化課長	
調 査 主 任	桑 原 憲 彰	〃 〃	主事
調 査 員	石 田 彰 紀	〃 〃	嘱託
調 査 員	隈 昭 志	〃 〃	参事
調査補助員	安 達 武 敏	元大矢野中学校教諭	

人 類 学 班

調 査 主 任	内 藤 芳 篤	長崎大学医学部教授	
調 査 員	坂 田 邦 洋	〃 〃	助手
調 査 員	吉 村 淳	〃 〃	文部技官
調 査 員	本 田 圭 吾	〃 〃	文部技官
調 査 員	長 崎 洋	〃 〃	文部技官

その他断続的に緒方勉（肥後考古学会員） 野田拓治（文化課嘱託）が調査にあたった。

地 元 協 力 者　清水 遜

地元調査作業員　原スエモ、原夏代、岩永国雄、梅田さつみ、福丸義人、福丸あや子、原二枝、米村トメ子、原口マサエ

序　　章

Ⅰ　遺跡発見の契機と調査の経緯

(1)　調査発見の契機

道路公団から、九州自動車道託麻～松橋23.3㎞についての予備調査を依頼され、第１回の打合わせ会を県庁地下視聴覚ライブラリーで開いたのは、昭和45年２月７日のことであった。この打合わせ会で、社会教育課文化係と県内考古学関係者が集まり、託麻から松橋に到る道路敷地予定地を７区間に分け各々に各調査員を配置し、今後調査を進めていくことが決定された。

そのとき、尾窪遺跡の発見された城南区間の調査員として、地元の出身で10数年前城南町史編纂等で当地区を熟知されているという松本雅明・佐藤伸二の両氏があたることとなった。

調査は３月中旬までに完了の予定で開始した。当地区の調査は２月28日に実施されたが、当時の「文化財分布調査報告書のなかの尾窪墳墓群」の調査表を繰ってみると、下記のような記載がなされている。

「約10基の小さいマウンドを発見した。大きいもので径５ｍ、高さ１ｍ位である。古墳時代のものか中世の墓なのか不明である。」とし、遺跡の価値としては「普通」、処置としては「調査を要する」とある。

この予備調査によって尾窪墳墓群の存在が確認され、昭和47年からの７か月に亘る発掘調査実施となるわけである。

その後昭和46年10月14日から九州自動車道文化財調査の担当者であった上野辰男をはじめとし、桑原憲彰・平岡勝昭が数回に亘って現地を踏査した結果、これらの封土は50～60基にのぼり、分布も相当の範囲に広がることが確認された。

調査の結果を基に昭和46年12月13日日本道路公団と県との間に、埋蔵文化財発掘調査（熊本～松橋間）に関して「発掘調査委託契約書」が取りかわされ、昭和47年から正式に発掘調査を開始することになった。

調査は、第１次調査（３月３日～３月31日）と第２次調査（５月～10月）にわけて実施した。第１次調査は桑原・高木正文が主となり、新年度の第２次調査は桑原・石田彰紀が主としてあたった。人骨調査の段階には、長崎大学の医学部人類学教室（内藤芳篤・坂田邦洋氏）の人骨調査班が断続的に調査に加わった。以下期日を追って調査の経過を記載することとする。

(2)　第１次調査

２月28日～３月３日　小雪の散らつく厳寒のなかで足の踏み場もない鬱蒼たる雑木林の伐採を進める。とくに笹藪の繁茂が著しく伐採は困難をきわめた。大小の封土が姿を現わし、ほぼ遺跡の全貌がつかめるようになったのは、作業開始後４日目。これらの封土は当初より更に増加し約88基にも及ぶことが判明した。

３月４日～３月13日　この間に、各種フィルムによる遺跡の現況の写真撮影を行った。併行

して地形測量も進め、600分の1地形図と、封土の形状と高低を中心とする100分の1地形図の2種の図面を作製した。88基にものぼる封土には便宜上北側より順次番号を付した。

3月14日　午後、尾窪地区の旦那寺である隈庄の光徳寺より住職を迎えて、墓前で供養を行った。何百年ぶりの供養であろうかと考え一同感慨無量。

3月15日～3月27日　この間に、第61・62・70・75・76の各号について発掘をほぼ完了した。調査個所が雑木林であったため、竹や木株が多く、チエーンブロック等使用したが発掘は困難を極めた。

以上、第一次調査の結果、封土の下に土壙があり、なかに人骨が埋葬された土葬墓と第62号墓に見られるような土壙を持たない火葬墳墓の二種があり、しかも火葬は現場で行なわれたことなどが判明した。また第75号墓に墓壙内より人骨に伴って鉄釘が出土したことなどから、土葬墓の場合遺体を納めた何らかの棺の存在が推定された。封土は大型のものは方形、小型のものは円形をなしており、封土中からは土師質燈明皿等が発見された。また第62号墓等の封土頂上に追葬された江戸初期の陶器甕などから推察して、中世期における庶民の墳墓である可能性が強くなってきた。一応遺跡の性格を概略つかんだ段階で第1次調査を終了した。

(3)　第2次調査

4月初めより調査開始の予定であったが、文化課が新設され、部屋の移転、担当者の配置替等課内整備で調査予定が大幅に遅れ、実際に調査に着手したのは5月7日であった。調査担当者も高木の替りに石田が入り、桑原・石田で調査を進めていくことになった。

5月6日　応援のため約一週間調査に野田が加わり、当遺跡中央部に位置する第58号の調査を手始に第2次調査を開始した。

5月16日　当遺跡の重要性に鑑がみ、関係者の意見聴取のため別府大賀川光夫教授一行の現場視察があった。古保山、尾窪両遺跡について概略を桑原が説明した。この現場視察の結果、尾窪遺跡には人骨の出土が考えられるので考古学班とは別に人類学班を設け人骨の処理にあたるべきであるとの提唱がなされた。このため今後調査の進行に従い、随時長崎大学医学部の人類学教室へ調査を要請することになった。

5月22日　第58号東右四半分を掘り下げた結果、周溝部と推定される部分より空風輪2個、水輪2個、地輪3個、北西部周溝底部より瓦器、燈明皿片等が出土した。墳墓の成立年代に関する資料として貴重である。

5月24日　第31号墓の土壙を掘り下げ人骨の完全露出を行った。埋葬状態は坐臥屈葬で西向、腰骨周囲から水晶製の数珠の親玉2個小玉2個管状の玉1個計5個が出土、数珠を手にかけ合掌の状態で埋葬されていたことが判明した。

5月25日　第39号墓の人骨露出、坐臥屈葬西向で、土壙は円形、白色数珠玉が出土した。24日調査の第31号墓、25の第39号墓で本遺跡の埋葬状態がほぼ把握できた。

6月13日～6月18日　13日長崎大学より坂田助手、翌日内藤教授も来訪。第一回目の人骨調査およびその取上げ作業が始まった。

6月30日　松本雅明県文化財専門委員をはじめとして、教育長、文化課長、浜田勝主幹その他関係者が現場を視察、調査の進行状態をみる。

7月3日　第20号墓の封土中より北宋銭の景徳元宝が出土した。遺跡の上限をある程度推定できるものとして貴重である。

7月19日　第44号墓の土壙内より径11㎝の燈明皿も発見、埋葬時に結びつく遺物としては初めての出土である。第61号墓の土壙掘り下げ中、土壙内に空洞が残っているのを発見した。遺体を納めた棺のかたちが判明するのではと調査員一同緊張。

7月20日　第61号墓の空洞について精査したところ、空洞上部の内側に縄の結び目および筵状の縄目がついているのを確認、棺桶の上に紐をかけ上でしぼったものであろうか。

7月23日　第58号の未発掘部の表土除去の際に熙寧元宝1枚が出土、また同時に五輪の空風輪部も出土した。さきに景徳元宝、今度熙寧元宝が封土内より発見されたが、年代は共に西暦1000年代で貨幣の渡来・流通時期を計算に入れてもこれが相当古い時期の墳墓地ではないかという確信をもつに到る。第80・81・82・83号墓の4基の土拡は、大小の長方形をなし同方向に並ぶので、この一群は時期をへだてず埋葬されたものであろうか。今日の第58号の調査により、封土下に土拡が存在しないことが確認された。その結果、方形の封土を持つこの遺構は、近畿地方の中世等の墓地にみられる墓地全体に対する詣り墓的な供養施設ではないかと推定した。

7月25日　封土の原型および墳裾部の遺構の有無を確認するため、第71号墓の封土の周囲にトレンチを設定した。また、第58号、第71号墓封土を調査中、なかから当地域の先行文化を裏付けるものとして弥生後期の土器口縁部が数片出土した。

8月22日　長崎大学の第2回目の人骨調査始まる。内藤教授外5名、九州大学の北条暉幸先生からもご援助をいただいた。鹿本高校ＯＢ、倉原・坂本・春田・福永の各君が現場にはいり、発掘作業が著しく進展した。先日陶器皿の出土をみた第54号墓から更に、完型燈明皿2個が出土した。

8月25日　第44号墓土壙内の人骨露出作業中、頭骨横より宋の銭貨15枚が一括して出土した。中央の孔に紐を通して纏めていたらしく、15枚がぴったりはりついた状態で検出された。15枚のうち文字を判読できたものは、至道元宝（955～997）、熙寧元宝（1068～1077）、皇宋通宝（1049～1054）、元豊通宝（1078～1085）等で、判読可能の銭貨についてその鋳造年代を調べてみると、上限と下限の差が約90年間と短期間であり、しかも現在まで後世の銭貨の出土をみないところから、この墳墓群が比較的古い時期の成立であるという確信を強めるに到った。第4・6号墓については土壙排土中、第61号墓と同様空洞の存在を確認した。埋葬姿勢が坐臥屈葬の場合の遺体の容器は、円形もしくは楕円形の桶状のものであったことが考えられる。

8月29日　牛深市の中世久玉城が国道266号の拡張工事により破壊の運命にあるため桑原が緊急調査に出向し、以後暫らく石田が主として調査を担当することになる。

9月上旬　9月にはいり、長崎大学医学部人類学班とタイアップして、未調査分の墳墓の発掘調査を進めた。その後調査も順調に進み、9月中には全体の約90％の調査と人骨の取りあげを終えた。

10月1日～10月15日　牛深市久玉城調査が緊急を要するため、桑原・石田が鑑査員として牛深へ出張した。このため尾窪遺跡の調査は約半月間に亘って中止のやむなきに到った。

10月下旬　久玉城調査終了後、尾窪遺跡の調査を再開し、未調査の墳墓約5基の人骨取りあげ、実測等も考古学班の手によって行ない、遺跡現場での発掘調査は10月末をもって一応終了した。

以上3月から実施してきた発掘調査も10月末で終了した。途中の調査中断期間約2ヶ月を除いても調査は6ヶ月の長きに亘り、その間調査した墳墓数は83基、取りあげた人骨も約40体の多きを数えるに到った。

出土遺物は予想していたよりずっと少なく、銭貨・鉄釘・数珠玉・土師質燈明皿・陶器・瓦質蔵骨器片等がその主なるものであった。とくに、第54号墓の土壙内より出土した完形の白色陶器・瓦質蔵骨器片等がその主なるものであった。とくに、第54号墓の土壙内より出土した完形の白い陶器（小皿）については、この地方でみかけない焼物であるので、課長が会議で上京の際、国学院大学の乙益教授を通して大場磐雄先生に鑑定を依頼した。11月1日、乙益教授より文化課長あて書簡でその報告があった。それによると、この陶器は「灰釉陶器」と呼ばれ、生産地は美濃、近江などにあり、中国、四国、九州では出土例のない珍しいもので、年代は鎌倉初期にもっていけるものであることが判った。乙益教授は、この「灰釉陶器」の伝来を、本補地頭が関東、東海方面から肥後に着任する際か、在地地頭が鎌倉へ出任した際求め肥後へもたらしたものであろうと推定された。時代の決め手となる遺物の乏しい当遺跡において、この「灰釉陶器」の発見は貴重であった。

なお、後日塚原遺跡の墳墓群のひとつからも、これに似た白色の小皿が出土した。さきと同様に鑑定をお願いしたところ、これは白磁であることが判明した。

11月にはいると、石田が中心となって断続的に現場に出向き、不足部分の写真撮影や、第58号周溝内から出土した五輪塔実測等本調査で欠落した部分の補充調査を実施した。

12月になり寒気が厳しくなった頃、尾窪遺跡の遺物整理と図面整理に本格的に取りくむことになった。同時に文献資料の収集も進め、報告書作製の準備とした。

12月中旬、桑原は福岡県教委が調査中の築紫野市針摺の方形の封土をもつ中世墳墓13基を、同教委の松岡史技師の案内で見学、調査担当の前川、宮小路両調査員より詳細な説明を聞き示唆されるところが大であった。

12月下旬、県庁地下ライブラリーにおいて、第1回の調査報告書作製準備会議を開催した。出席は文化財係および尾窪調査関係者で、人類学班の代表者としては長崎大学より坂田氏が参加した。この会議においては、あらかじめ石田によって章立てされていた目次をもとに検討し、考古学班と人類学班の執筆範囲をきめ、それに従って各々の節、項目の執筆分担を決定した。なお、1月末日をもって、原稿の最終締切り期日とした。

12月31日、当遺跡の調査を担当してきた石田が31日付で県を退職、1月1日付で広島市教委社教課へ転勤となった。以後、広島の石田と書簡、電話で連絡をとりながら、報告書作製の準備を進めることになった。

3月5日～3月6日、2月下旬に、城南町史の著者である松本熊大教授から、尾窪遺跡出土

五輪塔と類似した形をもつ塔の所在についてご教示をいただいた。すぐに、野田、高木が現地におもむき、各々の五輪塔について写真撮影と実測を行った。調査結果については、報告書に掲載することとした。また、先頃、尾窪部落内に古井戸と、土塁とおもわれる土盛が存在するということを塚原遺跡の江本直調査員から連絡をうけた。未調査であるので確実なことはいえないが、もし事実であれば中世豪族の屋敷跡とも考えられるし、尾窪墳墓群と関連してとらえることが可能かもしれない。

3月9日、石田（（広島市教委勤務）を迎え、第2回目の報告書作製会議を開催した。出席は尾窪調査関係者約10名で、課長を中心に、現在までに集った原稿をもとに語句の統一、内容、考察等の文章にまで立入って吟味を行ない、意見の統一を計った。また、原稿が揃いしだいすぐにも印刷に回す予定であったが、とくに当遺跡の重要性とも考えあわせ慎重を期すため入札期日を3月20日まで延長し万全をきすこととなった。

以上、尾窪遺跡の発見の契機と調査の経緯について、そのあらましを野帳から拾い出しながら列記してきたが、この尾窪遺跡の北側の迫地ひとつへだてた隣接地に塚原遺跡がある。この遺跡も、九貫道の敷地にかかるため尾窪遺跡と併行してこの一年間発掘調査を実施してきた。ところが昨年8月21日より一週間、県下考古学関係者、各高校考古学部の援助を得て発掘調査を実施した際、尾窪遺跡と同様の土壙および人骨が発見された。以後、調査が進むにつれ多数の墳墓が相次いで発見され、年度末現在約36基にものぼり、今後も調査の進展にしたがいこの数は増加する可能性がある。塚原遺跡はかならずしも中世墳墓の調査を主体とすべきものではないが、尾窪遺跡と同様の性格をもつものであるので、ここに塚原遺跡における中世墳墓の発見状況を順をおって記載することとする。

8月下旬、塚原遺跡の丸山6号（円墳）の北側周溝より人骨の埋葬されている土壙が発見され、これが当遺跡における中世墳墓発見の嚆矢となり第1号墓と命名された。その塚原遺跡の発掘調査が進むにつれて、丸山8号（方形周溝墓）の主体部北側からも火葬墳墓などが発見された。

2月上旬に至って、丸山8号の周溝内より人骨の埋葬されている土壙が続々と発見され、昭和48年3月末現在で塚原における中世墳墓の発見例は上述の分も含めて36基の多くにのぼっている。これら墳墓は、封土をもっていない以外は、尾窪と同様の遺物、遺構をもっており、築造年代もほぼ尾窪墳墓と同時期にもってきてよいのではないかと考えられる。とくに、封土は近世における塚原台地の開発の際失われたものとも考えられるし、地形的に考えても今後尾窪・塚原（墳墓）とも同一遺構としてとらえ考察していくべきものであろう。

なお、昭和47年度末現在までに出土した塚原遺跡埋葬人骨は、尾窪と同様長崎大学医学部で調査を実施しているので、できれば当報告書のなかに塚原遺跡中世墳墓群の一項目を設け併せ報告したいと考えていたが、整理・考察が間にあいそうもないので省くことにした。

冗長で取りとめもない調査の経過と経緯となってしまったが、塚原遺跡（墳墓群）の経過も付記して筆を置くこととする。　　（桑原憲彰）

Ⅱ　遺跡の地理的概況

1、位　　置

熊本県下益城郡城南町大字尾窪2738番地（元所有者藤山字西原2738本田通司穂氏外４名）、当遺跡は「１：50,000地形図熊本８号」図幅において図幅東端より2.2㎝南端より3.5㎝の所に位置している。

2、地形と環境

当尾窪遺跡は熊本元標の南約15㎞の城南町にある。酒造で知られるこの町は、浜戸川が熊本平野へ流れ出す谷の部分に位置しており北は緑川、南西に為朝伝説で知られる雁回山・北東にみかんの産地として知られる吉野山、南東に西山、町の中央を浜戸川が貫流する盆地状の町である。

このような内陸盆地的地形のため梅雨前線が停帯しやすく豪雨をもたらし度々記録に残る洪水を引き起しているが、緑川とその支流である浜戸川によって形成された沃野は古代から現在に到るまでの人々の生活を支えつづけてきた。縄文時代の阿高、御領両貝塚をはじめとする各種の遺跡の存在からも推察されるようにこの地方は早くから人々の生活の舞台として開発されてきた所である。

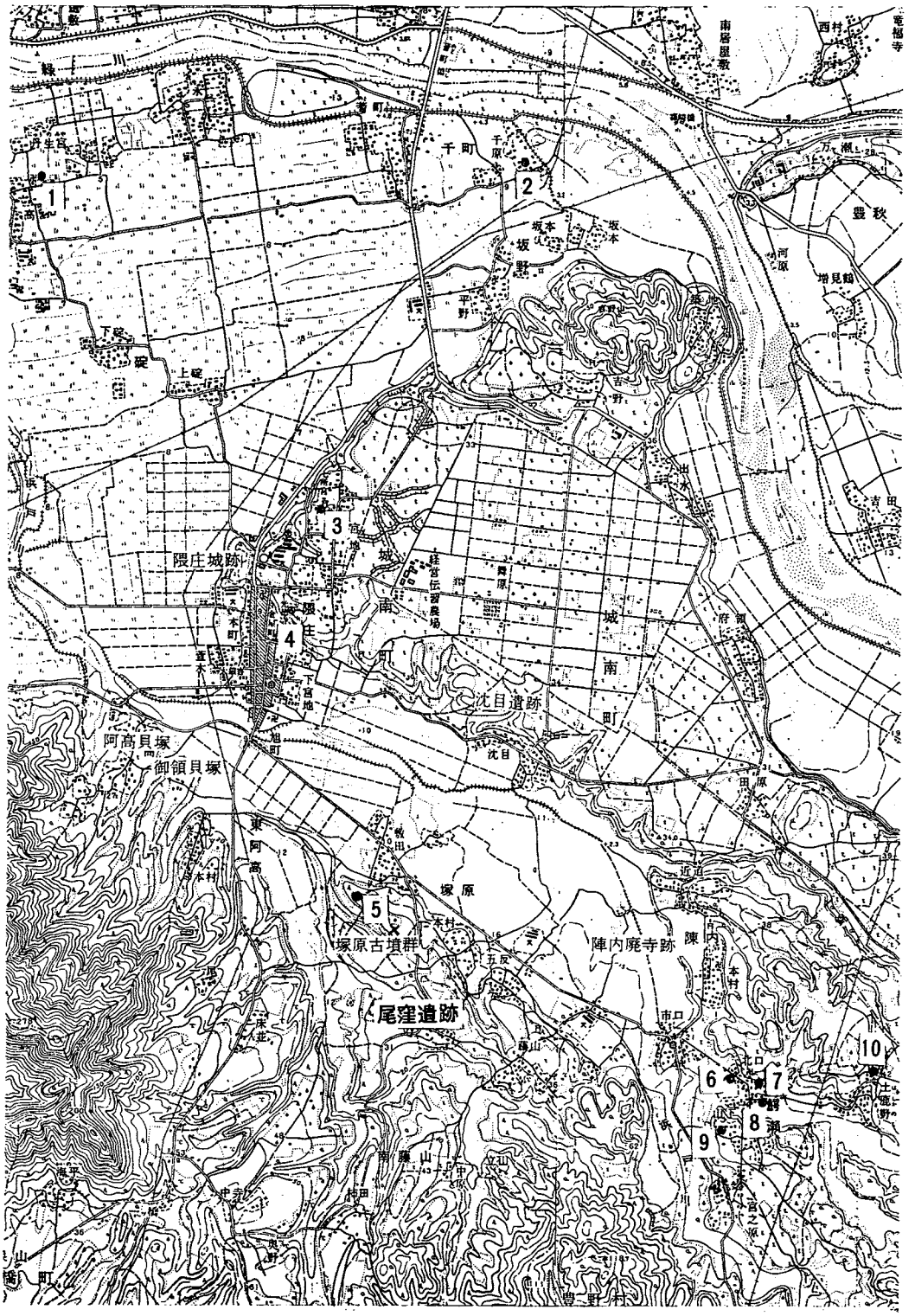
(1)　塚原台地

この城南町の南東部に雁回山と浜戸川に挟まれた塚原台地がある。海抜約30ｍのこの台地は、阿蘇火山灰が上部を覆って形成されたもので土壌の分類からするといわゆる託麻１と呼称される地質を呈する洪積台地である。託麻１という名称は熊本市の託麻原によって名づけられたもので、城南町では塚原台地の外に舞の原から陳内・土鹿野・鰐瀬の北に続く台地、東阿高、尾窪、南藤山の各台地がこれに属する。地表は平坦または緩かな小起状をなしその基層は円礫層となるが、表面は一般に２～４ｍのほとんど礫を含まないローム の厚い土層からなっている。

酸性度が強く、乾燥度が高いので桑園等の畑地として利用されている。近年灌漑施設等の普及により一部水田に変更されたところもある。

現在この台地は（つかわら）と呼ばれ、その名の如く13基余の墳丘が残存し、湮滅した古墳および現在調査中の方形周溝墓群を加えると数十基をゆうに越す一大古墳墓地帯である。また従来古代の蔵骨器がこの塚原、尾窪より数個出土しているし、調査の経緯のなかでもふれておいたが、現在調査中の方形周溝墓の周溝部から約36基にものぼる尾窪遺跡の土壙と同様の人骨を伴う土壙が発見されている。このように城南台地一帯が古代より中世を経て近世初頭に至るまでの一大墓所であり霊域を形成していたことは多くの墳墓が残っているところから見ても明白である。肥後国誌等に「九十九塚。塚原ノ地名依之。九十九塚諸所ニアリ…云々」とあるがこの状態をいったものであろう。

一般に原（わら）と呼称される地名は広い台地の面を意味し、よく保存された火山灰台地が谷等によって分離された部分部分をいうが、この古墳等の墳丘の群集する様を見て古の人が「塚原」と呼んだのはこの台地の状況を言い表し得て妙である。



1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
千町
坂本
坂野
平野
下碇
上碇
隈庄城跡
城南町
沈目遺跡
阿高貝塚
御領貝塚
塚原
塚原古墳群
尾窪遺跡
陣内廃寺跡
陳内
豊秋
増見鶴
吉田

第2図 遺 跡 の 位 置 図

現在墳丘の残存するのは13基であるが、江戸時代中期から後期にかけて塚原・尾窪地区は山間の畑地の開発がさかんに行なわれ、村全体の石高も江戸初期と後期とを「郷帳」等により比較すると相当上昇しているので、この時期に相当数の墳丘が破壊されたと考えるべきであろう。勿論その時点においては、塚原、尾窪区の墓所としての霊域といった観念も忘れ去られていたのであろう。

(2) **尾窪遺跡**

尾窪墳墓群はこれら塚原台地の西傾斜の末端に位置する。西と北にやや傾斜し、西日を真正面に受ける墓域は南北に細長く、約1000平方米内に大小さまざまの封土が散在している。周囲はほとんど畑地として開墾しつくされているが、当墓域は台地の斜面にかかるためか竹・雑木がおい繁る雑木林として残されており、発掘調査以前は足を踏み入れるのも困難な状態であった。そのためか、付近の尾窪地区の古老もこの雑木林の部分が墓地であるという記憶を持つ者はなく、完全に人々に忘れ去られた状態であった。しかも、ここにまつわる伝説も皆無であり、これら封土をもつ墳墓が相当古い時期に成立したものであることは容易に推察できる。

この尾窪墳墓群の北側には、南から北へ走る農道をはさんで尾窪部落5軒分の墓所がある。この墓所のうちもっとも古い記銘年号は元禄で、後は宝永・宝暦・寛政・文化・天保・弘化と続き現代に到っている。この墓地にもっとも近い距離にある墳墓群の間から発掘調査の際、延宝6年（1678）の年号をもつ板碑が出土した。この板碑は、縦76㎝・横35㎝の凝灰岩を素材とするもので、碑面には中心に「南无阿弥陀仏釈了雪信士霊」右に「延宝六戊午年」左に「十一月二十四日」と三行に亘って25文字が彫り込んである。基礎部もなくすぐ横の北東側近世墓地からのまぎれこみと考えられるが、これが当墓地石塔中もっとも古いものである。その他、近世の墓地は遺跡の南部・南西部にも存在している。このように、近世の墓地が墳墓群を取り囲むように立地しその周囲に営なまれていることは、板碑にしるされている延宝6年の時代まではこの地区が中世の墳墓の地であるという観念が人々の記憶に残っていたためであろう。

以上、尾窪墳墓群の立地する塚原台地と墳墓群周辺の地形についてまとめてきたが、さきにも述べたように尾窪墳墓群と塚原遺跡とは共に丘陵の畑作の多い地帯に立地し地理的にも接近しているところから、今後これらの遺跡の調査を進めていく場合、古代から近世初頭に到るまでの霊域として同一範疇のなかでとらえていくべきであると思われる。従来、尾窪は中世後期頃に成立した小村落と考えられてきたが、尾窪墳墓群が尾窪の本村近くにあり、しかも80数基にものぼる中世墳墓の存在を考えるとき、その村落形成時期を少し引きあげることが可能かもしれない。

塚原・尾窪周辺の地質構造は、軽石質凝灰岩の上部に砂礫層が乗った状態になっている。これらの軽石質凝灰岩層は水を含み、不透水層のないところではこれらの水が岩の割れ目などから顔を出し小形の湧泉を形成している。尾窪にもこれらの湧泉がみられるが、尾窪の村落の発生もこの湧泉を中心に形成されていったものであろうか。

尾窪の村落の歴史を示すものとしては、天文10歳（1541）の墨書のある本村阿弥陀堂の阿弥陀如来像等がみられる。（桑原憲彰）

付・城南町の五輪石塔について

発掘調査終了後、墳墓群中の第58A号特殊遺構の周溝内に出土した五輪石塔に関連して、遺跡周辺での五輪石塔の分布調査を行なった。城南町の五輪石塔については、すでに『城南町史』にその概要がまとめられている。したがって、それとの重複も生じたが、これまで不備であった実測図の作成に重点をおき、同時に写真撮影による現状の把握につとめた。しかし、日数の制約もあって、充分な調査とはなりえなかった。以下、第3図に示した実測図をもとに、順を追って説明を加える。

今回調査を行なった五輪石塔遺跡は、地名表に記した10ヵ所である。まず町の北部では、緑川南岸の丹生宮、千原でそれぞれ1ヵ所、中部では宮地の2ヵ所、南部では塚原、鰐瀬、土鹿野の三部落に6ヵ所のあわせて10ヵ所である。第8図には、そのうち、完形および完形に近いもので実測が可能なものを選んだ。

①④　丹生宮公民館敷地内の薬師堂に2基の五輪塔が建てられている。北側の①は、高さ69㎝、④は76㎝。地輪部では、④が非常に厚みを持つ。火輪部では両者とも薄手の場合に軒の厚みが比較的大きい。特に③では軒の反りが大きい。石材は阿蘇凝灰岩で、全体に整形が荒く、梵字、銘名とも認められなかった。

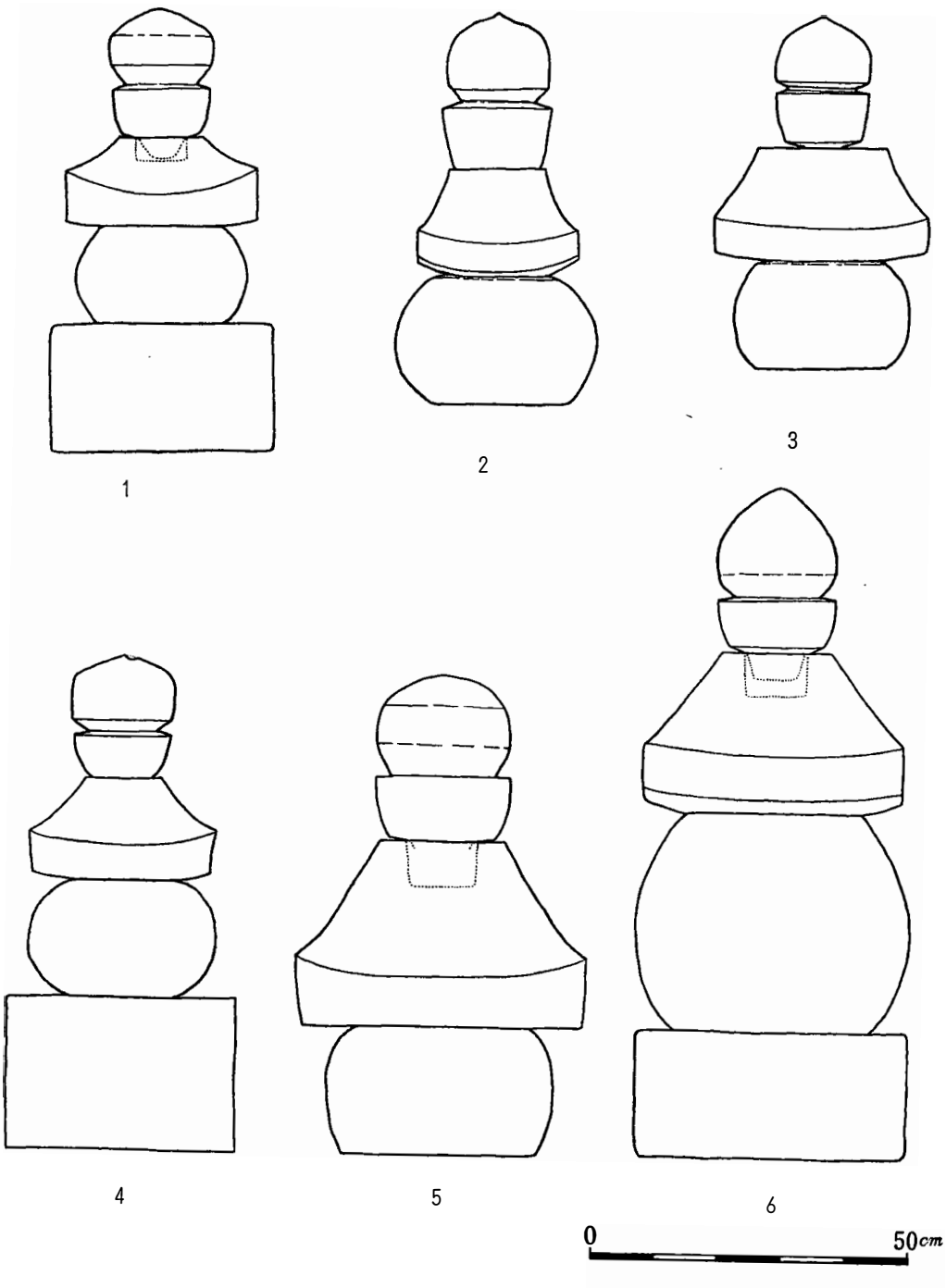
②③　鰐瀬北口の栃原健男氏庭に3基が建てられている。そのうちの1基は空風輪・火輪を欠き、他の部分についても風化が著しいため、そのうちの2基を選んだ。②・③とも地輪を欠き、各々別個体のものをよせあつめて積み上げている。②の火輪部は巾に対して厚みが大きく、巾を1とした場合に厚みは0.65という比率で、①～⑥までの最高値を示した。さらに、他のもの比率を示すと、①③④が、0.50～0.55、⑤⑥が0.60～0.64までの数値を示した。両者とも阿蘇凝灰岩を用い整形も荒く、梵字、銘文とも認められなかった。

⑤　鰐瀬山下寺境内に合わせて三基の五輪塔が建てられている。このうちの1基を図示したが、地輪部を欠いている。水輪は四面に梵字を配している。火輪は厚みに対して軒の部分が薄い。空風輪部は一石調成となっている。

⑥　鰐瀬北口永吉氏宅に2基建てられている。高さ105㎝で比較的大型の部類に属する。以上、簡単に述べたが、全体的に保存状態が悪く、石輪塔石材に亀裂が生じていたり、すでに旧状さえ察し得ぬものも少なくなかった。調査は時間的な制約で充分なものではなかったが、他にもおびただしい量の五輪石塔群を確認した。今後この方面に対して本格的な調査と保護策を早急に施す必要があるだろう。　（野田拓治）

五輪塔地名表

第2図番号	所在地	実測図番号	
1	下益城郡城南町丹生宮公民館内	①	④
2	〃　〃　千原薬師堂付近		
3	〃　〃　上宮地七所宮境内		
4	〃　〃　下宮地金屋町光徳寺境内		
5	〃　〃　塚原敷田アジヤラサン		
6	〃　〃　鰐瀬北口永吉カナリ氏宅	⑥	
7	〃　〃　鰐瀬北口照山寺境内	②	③
8	〃　〃　鰐瀬北口栃原健男氏宅		
9	〃　〃　鰐瀬北口山下寺境内	⑤	
10	〃　〃　土鹿野天神社境内		



第3図　城南町周辺の五輪塔実測図

Ⅲ　尾窪中世墳墓成立の背景

松　本　雅　明

1．古　墳　群

古代の益城郡一帯が肥君（公）の勢力圏であったことは、尾窪から６・５㎞東南の、下益城郡豊野村下郷の浄水寺の延暦20年の燈楼台の刻銘に、

弊善和上	※七月十四日
御願造奉	真上日乙
燈楼一基	肥公馬長
延暦廿年※	化僧薬蘭

と４字ずつ８行に大字で記されていることによって知られる。浄水寺には四碑があるが、最古の延暦９年の碑によって、奈良朝末期に弊善によって創建され、その寂後、第２代の薬蘭によって燈楼と、天長３年の寺領を記した長文の碑が建てられている。天長３年（826）は創建の延暦９年を去る36年で、寺領はすでに388町に及び、益城のほか宇土、八代郡に散在していた。２年後の天長５年には、ここは国家公認の定額寺（じょうがくじ）に昇格している。

古代の碑文は身分の高い者ほど後にしるすので、肥公は益城の郡司（大領）、真上氏は浄水寺の付近、すなわち益城の当麻（とうま）郷の郷長で郡司の１人（少領か）であったろう。現在も付近に田馬（とうま）の地名がある。この火君（肥公）、真上氏の勢力がいかにつよくこの付近に存在したかということは、後述の中世文書によっても明らかである。(1)

私はさきに、肥後最古の白鳳時代の陳内廃寺（下益城郡城南町陳内）が浄水寺より４・５㎞北、尾窪墳墓より２㎞東北にたてられたこと、また『和名抄』にしるす益城国府が、従来云われたように誤記ではなく、陳内付近にあり、ことに陳内廃寺より600ｍ北の舞ノ原台地の南縁におかれた可能性が多いこと、さらに陳内廃寺は益城国府の守護寺院として建てられたと思われることを論じた。(2) しかも肥後の最初の国府がこの付近におかれたのは、ここが火君の中心支配圏の北辺にあたり、その勢力に牽引されてのことであることを推定した。

火君の勢力の中心は、八代平野の氷（火）川の流域で、中ノ城・姫ノ城・端ノ城・物見櫓の四大前方後円墳（野津古墳群）、大野窟の大石室墳などに代表される地域にあるとみられた。しかし６、７年前から宇土半島の基部に10基の、初期・前期の古墳群が発見され、そのうち発掘された弁天山、迫ノ上の２古墳は４世紀前期であるとみられ、最大のスリバチ山古墳もそれを降らないものとみられる。この古墳群のうち装飾文（直弧文）をもつ横口式家形石棺を包蔵する国越古墳が、５世紀後半で、前方後円墳の最下限を示し、以後小形の円墳に移っている。そこから火君の最初の発生地はこの付近で、それが５世紀中頃、磐井の乱後、大和朝廷の勢力に圧されて、氷川流域に移ったと思われるようになった。火君がはじめ宇土半島の基部に起ったのは、そこが熊本平野と八代平野とを制する要衝にあたるからであるとみられる。

しかし昨年より縦貫道路の調査が行われ、この地方最大の古墳群である塚原古墳群の中央が調査されたところ、すでに喪失した古墳が20基ちかく発見された。この丘陵は東西に長く、南北に狭くなっているが、縦貫道路は南北に東寄りに走ることになっている。まだ３分の１の調

査であるが、失われた古墳がぎっしり発見されたのである。『肥後国誌』によると、西南の木原山（雁回山）上から数えると100基の古墳があるが、下りて数えると99基しかみつからない、という伝説をのせている。今まで破壊されたのも合わせて24基しか確認されていなかったが、おそらく台地上には、今後それに近い古墳の跡が発見されるであろう。しかもこの丘陵の南、或いは西南の谷間には、御領、阿弥陀尾、飛尾（とびのお）、ウシクビ、一位田、一尾、櫨野（はぜの）、梯子ん段、メリ穴、鶴、長原などの300基にちかい横穴群がある。

縦貫道で注目されるのは、現在までに、その北のはしに14基の、木棺を包蔵する方形周溝墓が発見されていることである。それは一辺10ｍから26ｍに及び日本で発見されたもののうち最大級の群であり、一辺26ｍに及ぶものはまた最も大規模なものである。この数はさらにふえるものと思われる。この、弥生から高塚古墳にいたる過渡の古墳群は、今後、古墳発生の問題を解明する重要な鍵をもつものと思われる。またこの古墳群は、北から南にいたるに従ってしだいに新しく、南端の石ノ室（いしむろ）古墳は組合式家形石棺で、斜め格子の装飾刻文をもっている。

このようにみるとこの方形周溝墓群は、宇土地方の大前方後円墳群に先だつものと思われる。周溝墓の年代の決定は、溝内に落ちている土師器片のみから決められるのではなく、――土師器はのちに溝内に転落したとも考えられるので――やはりC14の放射能測定によることが大切であると思われるが、宇土半島基部の弁天山、迫ノ上古墳より古いということは云える。そうすると、火君の最初の出現をこの付近におくことも可能ではなかろうか。それは木原山、浜戸川周辺でもっとも大きな弥生の墳墓や住居地帯が、塚原より1.9㎞東北の城南町宮地の台地上にあり、また塚原の丘陵の北端（大正時代の耕地整理以前には小川を挟んで両丘陵は連続していた）で、古墳より1.2㎞の地点には九州最大の縄文後期の御領貝塚があり、それは縄文中期の阿高、黒橋両貝塚に連繋している。こういうことから早期古墳発生の地盤は充分存在し、のちの火君（肥公）の活動から、ここを火君の最初の発生基盤として見ることも不可能ではない。

2. 火　　君

このように火君はこの付近に発生し、前期古墳時代に宇土半島の基部、中期から後期にかけて氷川平野に本拠を移したけれども、白鳳奈良朝から鎌倉初期まで益城地方を支配していた。益城の郡家址は陳内廃寺の1.7㎞南の鰐瀬字宮ノ前の大明神遺跡に、益城郡寺はその西500ｍ付近の志道寺に発見されている。(8)

中世の肥公の子孫については、『阿蘇家文書』７・８（大日本古文書、家わけ13ノ１）の「肥後国司庁宣」「甲佐社領文書案」にうかがわれる。これは阿蘇・健軍・甲佐社領の不輸租が決定した時の文書で、肥後国の雑任国司９名が連署している。ことに建久６年（1195）２月８日の「甲佐社領文書案」は江戸後期の火災で一部焼失したところがあるが、それ以前の写しで復原することができる。それは、

権介中原朝臣（花押）	※権介佐伯朝臣　（花押）
権介肥宿弥　（花押）	権介肥宿弥　　（花押）
権介紀朝臣　（花押）※	権介真上真人（花押）

権介肥宿称　（花押）　　※権介佐伯朝臣（花押）

権介清原真人（花押）※

の９名の連署で、このうち肥宿弥が３人、佐伯朝臣が二人ある。真上真人は先の浄水寺の建立者で当麻郷の郷長の真上日乙の子孫であろう。佐伯朝臣は元応２年（1320）の「後家慈妙田畠屋敷中分状」（相良文書四四）にみえる慈妙の先祖で、浜戸川下流（木原山北麓）の佐恵木（のち西木・才木）を中心に碇・島田などを支配していたので、暦応２年（1339）ごろ南朝に属した隈牟田荘の有安名（ありやすみょう）の名主で、相良氏に亡ぼされた佐伯六郎左衛門尉は、その子孫であると思われる。(4)

紀朝臣は後述のように宇土郡司である。清原真人はおそらく清原元輔の一族が土着したもので、清原氏の勢力の中心が西国の小野荘にあり、肥後はその重要な根拠であったのを思うと、植木町小野はそれに関係あるのではなかろうか。（ほかに小川町小野辺田などがある。）中原氏はわからない。合志の中原師員は、建久年中に関東から下向して郡内の一地域の地頭となっているから、在庁官人ではありえない。

上述の文書の「立券」には、建久６年３月に社領に関係のある郡司が署名しているが、それは、

郡司

八代北郷

宇土権介紀朝臣（花押）　　※国使　兵庫頭源（花押）

益城上郷　源氏（花押）　　府使　貫首源　（花押）

益東権介肥宿弥（花押）　　官使　藤井　（花押）

書生権介肥宿弥（花押）※

「国使」以下は中央の承認のための署名である。ここにも肥宿弥が２人みえるが、益東の郡司は花押が異るので、先の雑任国司の１人ではない。書生もそうである。八代郡司の名がわからないのは残念であるが、このころも肥公の子孫の一本拠が益城にあり、国府（熊本市二本木町）に勢力を有したことがわかる。この地方には平安末に八条院領の豊田荘、隈牟田荘（岳牟田荘）が成立し、それらは郡司である雑任国司によって、国衛領を背景として成立したものであろう。また一方では開発領主で木原氏による守富荘が形成されつつあった。

しかし各地に新しい武士団がおこり、荘園の構造も複雑化し、名主、地頭の勢力が増大化すると、情勢がかなり変ってくる。それは仁治２年（1241）の「留守所下文」（寿福文寺書一）によると、郡司紀、書生、大使の三人の署名があるのみで、肥宿弥をはじめ、多くの雑任国司の名はみえないことから知られる。紀氏は先の宇土郡司の子孫であろう。ここには急速な律令制の解体がみられる。しかし隈牟田荘、豊田荘（塚原、尾窪、陳内、鰐瀬は豊田荘のうち）の荘官は、依然としてあらわれることもなく、八条院領となっているのをみると、その荘官は引きつづき肥宿弥、佐伯朝臣、真上真人らがうけついでいたのではなかろうか。

この地方が急速に変化するのは、南北朝の動乱で、南北両朝の争奪の渦にまきこまれる。それは西の河尻氏、木原氏が北朝に属するのに対し、東の甲佐は阿蘇氏の南の拠点として、南朝

に属したからである。豊田荘の荘司には一時、菊池武光が任命されている。南朝に属した隈田荘有安の名主佐伯氏は、ある時期に北朝に属した相良氏に亡ぼされている。ここがいかに当時の戦場となったかということは阿蘇の南朝方大宮司江良（阿蘇）惟澄の申状に詳しくみえるところである。しかし古代的なものがすべて亡んでしまったと考えるのは早計で、あれほど古代的な勢力をひろく張っていた肥公の系統は、何らかのかたちで土着し残存したと思われる。

さらにその後、木原氏、川尻氏があいついで没落すると、八代より宇土に進出した名和氏（宇土氏）がそれに代わり、他方、阿蘇氏の一族である甲斐氏が御船城、隈庄城にそれぞれ拠り、南では村山氏が豊田城（中央村糸石字古閑山）に拠っている。そのあいだに戦国のさまざまな土着の勢力が介在し、戦国の動乱時代を迎える。(5)

3．蔵　骨　器

それなら古墳から中世の墳墓を結ぶ、浜戸川中流域はどのようになっていたか。塚原のほか、古墳地帯は北西の吉野山周辺に、舟形石棺、装飾古墳を含む小古墳群があり、その付近にも出水、平野、今村、隈庄城などの数十の横穴群があり、また東の陳内、沈目の台地にも甚九郎山（装飾）、狐塚の前方後円墳のほか、天（てん）ノ平の横穴群がある。他にも小古墳は隈庄、鰐瀬付近に点在する。

それにつぐ奈良～平安時代の墳墓は、蔵骨器によってとらえるほかない。現在まで判明している蔵骨器は、西から記すと次のようである。

1．富合村木原字宮山＝須恵の丸底壺、蓋は土師器杯。平安前期。

2．城南町阿高字東原＝須恵の鉢形壺、蓋は土師器盤。平安前期。

3．城南町阿高一ノ字山頂＝須恵の球形壺、蓋欠失。平安前期。

4．同前＝須恵の球形壺、蓋は土師器杯。平安前期。

5．城南町塚原日焼塚封土裾＝須恵の短頸長胴壺、耳つき。蓋は土師器杯。平安中期。

6．同前の封土上＝須恵の瓶子形壺、蓋は須恵器片。平安中期。

7．同塚原火葬場古墳付近＝須恵の扁球形壺、蓋欠失。平安前期。

8．城南町尾窪（小字不明）＝瓦器の広口壺、蓋欠失。平安後期。

9．同前＝瓦器の広口壺、蓋欠失。平安後期。

10．鰐瀬山ノ神A＝須恵の球形壺？、須恵の蓋片三（以下のいずれに属するか不明）。平安中期。

11．同前＝須恵の長胴壺。平安前期。

12．同前＝須恵の長胴壺。平安中期。

13．同前＝瓦器質の鉢形壺、耳つき。平安後期。

14．同前＝須恵の球形壺。平安前期。

15．同前＝須恵の長胴壺。平安前期。

16．同山ノ神B＝須恵の球形壺。平安前期。

17．同前＝須恵の球形壺。平安前期。

18．同前＝須恵の扁球形壺。平安前期。

同前＝須恵の長胴壺。平安前期。

20．同前＝瓦器質の球形壺。平安中期。

21．同前＝須恵の球形壺。平安前期。

22．同前＝土師の壺（器形不明）。平安朝。

23．城南町吉野山南斜面＝須恵の球形壺、蓋不明。平安前期。

24．同前＝瓦器の球形壺。平安後期。

以上器形の判別できるのは24個であるが[6]、山ノ神（権現山）では昭和36年12月から翌年２月にかけて、果樹園（栗）造成のためにブルドーザがいれられ、その後、気がついて私が破片を拾い集めたもので、復原できないものがかなりの数に及んでいる。Ａ地点は標高55ｍの山頂付近で、山ノ神森の東と南側であり、Ｂ地点はその東の尾根の端で、40ｍはなれ、標高約48ｍである。破片を合わせると全体で20数基に及ぶかと思われる。墓壙に木炭を布き埋められており、火葬骨片が残っていた。

この山ノ神遺跡はＡ・Ｂとも中心部は残され保存されていたので、安心していたところ、昭和45年２月に転売され、桑畑に転用され、全体が掘りくずされ、気がついた時には、山頂は５ｍ余も削られ、Ｂ地点は全くなくなっていた。中心から外れる地点で蔵骨器２個を得たが、他は破片のみで、凡て破砕され土中に埋められてしまっていた。Ａ、Ｂとも中心地点であり、ことにＡ遺跡が神森とされていたのは、蔵骨器が出土するからにちがいないので、この両遺跡で20～30の蔵骨器が破壊されていることはたしかである。そうするとここには少くとも40～50基の蔵骨器が密集していたことになる。器形の明らかなものを追加すると、次の２個である。

25．山ノ上Ａ＝須恵の球形壺。平安前期。

26．同前＝瓦器質の球形壺。平安後期。

この付近は古代の郷をあてると、木原は加西（かせ）郷、吉野山は坂本郷で、他はすべて肥公の本拠である益城郷にあたると思われる。ことに山ノ神に集中的に発見されているのは、ここが益城の郡家から1.1㎞、益城郡寺の志道寺から600ｍの地点にあたるためであろう。

中世になって塚原付近の尾窪、また塚原古墳中、ことに丸山六号墳第８号方形周溝墓の濠を利用して36体埋葬されているのは、ここが山ノ神に次ぐ世代の、同勢力圏に属する墳墓であることを思わせるものである。

註 (1) 松本雅明「浄水寺の四碑」（熊本県文化財報告第３集、昭和36年）。同編『城南町史』（昭和40年）第２章第２節２。

(2) 前掲『城南町史』第２章第１節３、４。

(3) 『城南町史』第２章第１節４。

(4) 『城南町史』第３章第１節、319～20頁。

(5) 『城南町史』第３章第３節２、３。

(6) 『城南町史』192頁、表６参照。

第1章　調査の概要

Ⅰ　主要な墳墓

本調査を始めた段階において、遺跡の地形測量の際に墳墓と推定され登録されたものは83基であった。これらは遺跡の北から南へ、西から東へという順序で第1号墓から第83号墓までを確認した。つまり、遺跡の北西端にあるものが第1号墓、南東端に位置するものが第83号墓となるわけである。しかし、調査終了時点では墳墓の数に増減を生じたが、これは考古学がもつ性格上当然のことといえよう。当初、墳墓として登録された83基のうち、12基が墳墓ではないと確認されたし、その一方、9基が新たに発見された。この9基については、先に登録を受けた墳墓の中でもっとも近接する墳墓の呼称に準ずることとした。たとえば、第5号墓に近接する新発見の墳墓は第5B墓と命名され、従来の第5号墓が第5A号墓と改称されるといった具合である。

後にあげる墳墓一覧表は、調査当初に登録された墳墓および新発見の墳墓についての概要をまとめたものである。本表の中では、未調査のものはもちろんのこと、墳墓ではないと確認されたものも、便宜上抹消することなく掲げておいた。

以下、封土・土壙・葬位（人骨）・遺物など墳墓の全貌を知ることが可能なものについて、号を追って調査の概要を述べる。

第1号墓

第1号墓は遺跡の北西端に位置しており、東側は第2号墓、南側は第3号墓に隣接している。封土は崩壊の度が著しく、その旧状を知ることは困難であり、現状では径2m・高さ0.4mを測る。また、地山は礫を多く含んでおり、封土中にも礫が多数混入している。土壙のプランは1.6×1mの長方形で、深さは0.96m、長軸の方向はN12°Eとやや西に寄っている。土壙内には若干の空洞がみられたが、これは棺のなごりであろう。葬位は、北頭位の右側臥屈葬で、人骨は特に大腿骨の保存が良好であった。被葬者は壮年男子と推定される。遺物は、土壙内より鉄釘1本が出土している。

第2号墓

第2号墓は第1号墓の東側に隣接するもので、封土はかなり崩れてはいるものの、旧状をわずかに窮い知ることができた。現状では封土の径2.9m、高さ0.62mほどの円墳状の形態をとるが、封土の頂部にたって裾部を観察するとき、封土がもとは方形を呈していたものであろうことを容易に推測できる。封土の構成は第1号墓と同様に礫の多い地山質の土を盛り上げたたけのもので、封土の崩壊防止のための技術はとくに加えられていないように見受けられる。土壙のプランは長方形で、2.15×1.55m、深さ1.18mの規模は遺構全体の中でも大型の部類に属する。長軸の方位はかなり東に寄っており、N.22°Eを指している。葬位については第1号墓と

は異った印象を受ける。しかし、椎骨の状態は第2号墓の場合もまた北頭位右側臥屈葬であることを示している。被葬者は熟年男子と推定され、人骨の保存も比較的良好である。遺物は土壙内の頭骸骨付近より鉄釘1本が出土している。

第4号墓

第4号墓は第2号墓の南側に隣接している。封土は一辺3.66m、高さ1.03mの方形を呈し、これは第77号墓とともに旧状を比較的保っている好例である。土壙は1.58×1.23mの長方形でその深さは1.18m、長軸の方向はN 13° Eで第1号墓に近い、土壙内には明瞭な空洞が認められ、その大きさは推定で0.45× 0.9 m、高さ0.75mほどである。葬位は、北頭位右側臥屈葬で頭骸の保存が比較的良好である。被葬者は熟年女子と推定される。遺物は土壙内頭骸骨付近より鉄釘1本が出土している。

第6号墓

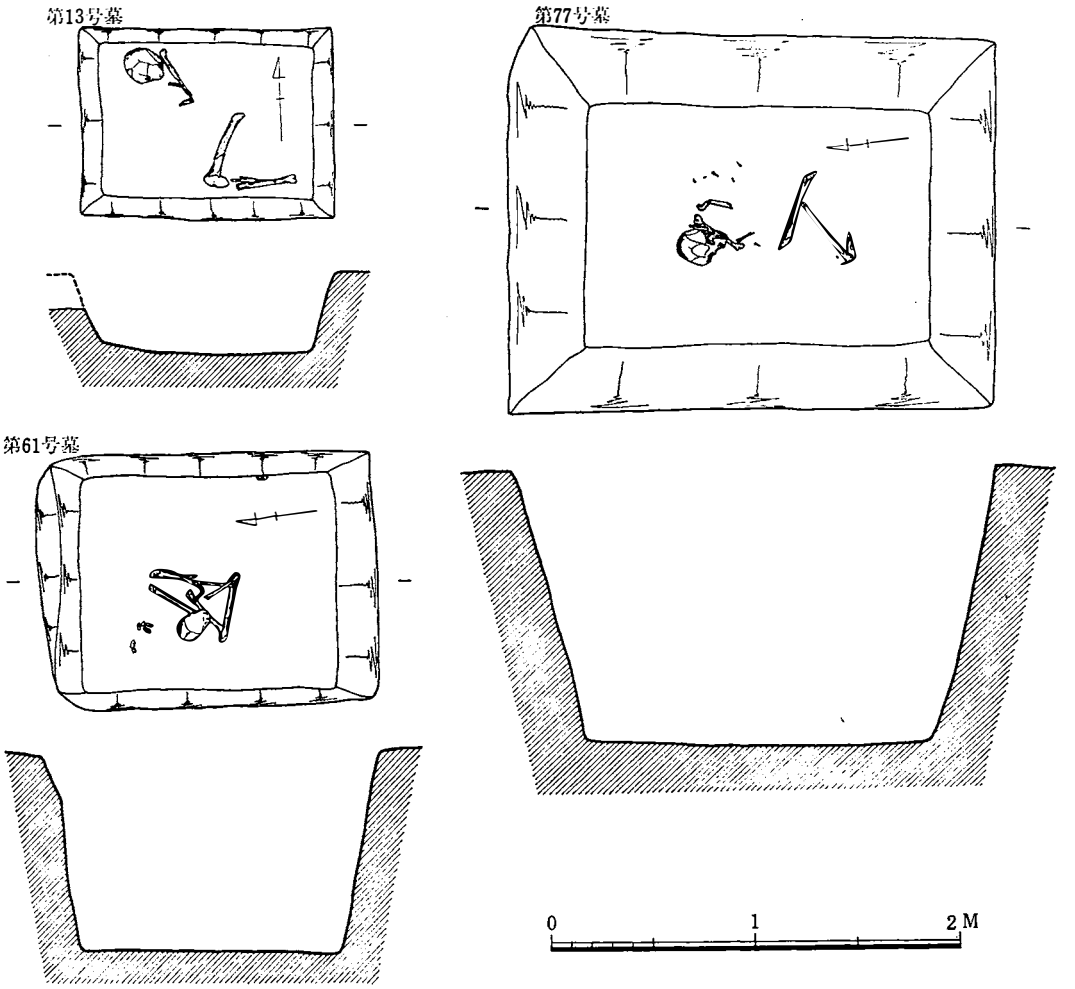
第6号墓は第3号墓をはさんで第1号墓の南側に位置する。径2.9m、高さ 0.85 mほどの封土は南半の崩壊がとくにひどく、旧状を知るのは難かしい。土壙のプランは1.55×1.26mの長方形、深さは0.99mである。長軸の方向はN3°Wとかなり南北に近く、土壙内には若干の空洞がみられた。葬位は北頭位右側臥屈葬であり、胸骨・椎骨が残存するなど保存が良好で現状から推して、手挟な棺に遺体を無理やり押し込んだ印象を強く受ける。被葬者は熟年男子と推定される。遺物は土壙内より鉄釘1本が出土している。

第13号墓

第13号墓は遺跡を横断する農道の西寄り南側に接し、封土はいわゆる土饅頭 形で、 径1.2m、高さ0.2mほどでほとんど旧状をとどめていない。土壙のプランは1.27× 1.05 mの長方形であり、深さは0.42mときわめて浅いものであった。また、長軸の方向はN89°E（S89°W）を示す。尾窪遺跡において、長軸を東西の方向にもつ例は、第13号墓の他には第58B号墓が存在するのみである。葬位は西頭位右側臥屈葬と考えられるが、これは土壙のプランの制約によるものであろう。被葬者は熟年男子と推定され、人骨の保存は、土壙自体が浅いこともあって、あまり良好ではなかった遺物は封土中にも土壙内にもまったく確認できなかった。

第19号墓

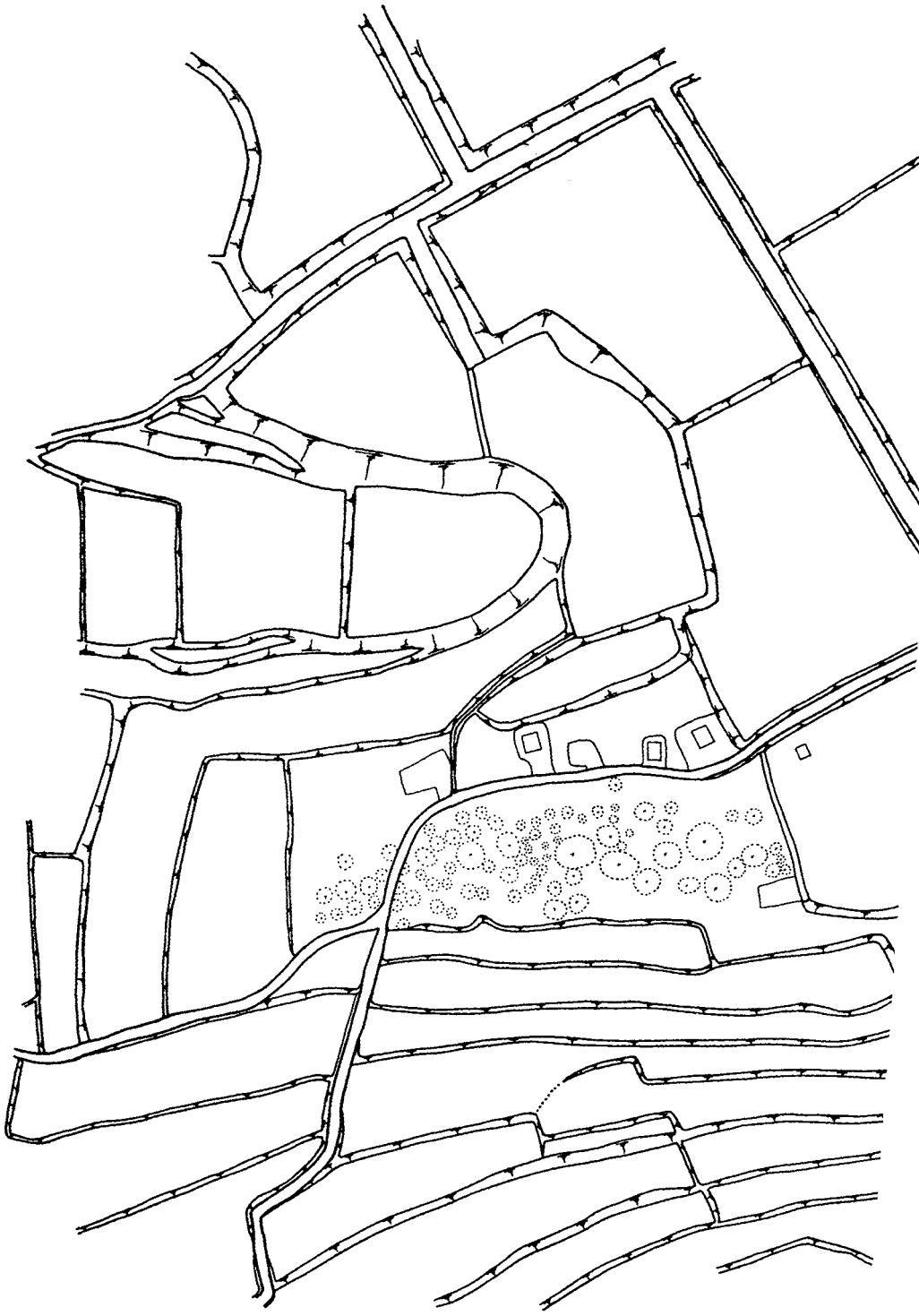
第19号墓は農道の南側に位置する。封土は径1.75m、高さ0.25mの土饅頭形である。土壙は1.46×1.1mの長方形で、深さは0.66mと比較的浅い。長軸の方向はN21°Eを指す。葬位は北頭位仰臥屈葬で、墳墓群の中でも特殊な葬法であった。尾窪遺跡においては、葬位の明瞭な38例のうち、仰臥屈葬と判断できる例は葬19号墓のみであって、他は右側臥屈葬もしくは坐臥屈葬である。被葬者は成年男子と推定され、土壙内からは何ら遺物を確認することができなかった。



第4図　第13・61・77号墓実測図

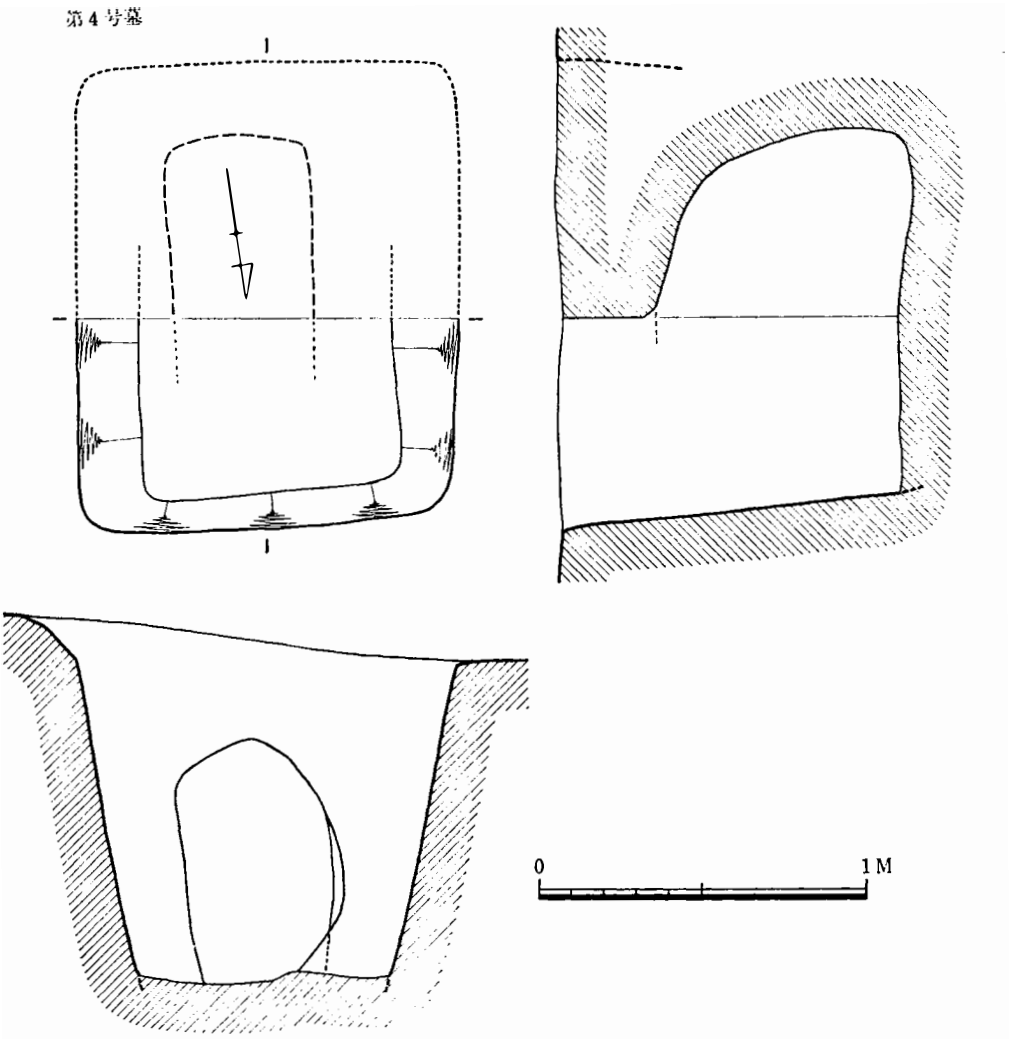
第25号墓

第25号墓は遺跡の東側にあって、遺跡を横断する農道に近接する。封土は径2.62ｍ、高さ0.4ｍほどの規模で、遺跡北側の一群（第1号墓～第11号墓）とは異った構成を示す。すなわち、第25号墓は砂質赤褐色土壌の上に築かれている関係から、その封土は赤褐色土と黒色土（腐蝕土）の混合土である褐色系の土によって構成されており、礫の混入はほとんどみられない。このような傾向は、第13号墓以下第83号墓において、ほぼ例外なく確認された。土壙は1.52×1.08ｍの方形土壙で、その深さは0.91ｍ、長軸の方向はＮ22°Ｅ（Ｓ22°Ｎ）である。また、土壙内には空洞がみられた。葬位は南頭位右側臥屈葬であり、例外的なものであるが、これはおそらく納棺の方向を間違えてしまったものかと考えられる。被葬者は成年女子と推定さ



第5図 尾窪遺跡地;

図



第6図 第 4 号 墓 実 測 図

れる。遺物は封土、土壙のいずれからも発見されなかった。

第26A号墓

第26A号墓は遺跡中もっとも東に位置し、その西側には第25号墓、南側には第26B号墓が接している。封土は径 2.05m、高さ0.21mを測り、ほとんど目立たない。土壙は長軸の方向をN2°Eにとる1.58×1.23mの方形土壙で、その深さは0.74mである。葬位は北頭位右側臥屈葬、被葬者は壮年女子と推定される。ここで注目すべき点は、土壙内の遺体の手首が位置したと思われる部分よりガラス玉26個が出土したことにある。このガラス玉は径4.2〜4.8㎜ほどのもので、もとは無色透明であったものであろうが、現在は緑灰色に褪色、あるいは白色に風化したものが多い。

第27号墓

第27号墓は第25号墓に南接し、その封土は径2.77m、高さ0.55mほどである。土壙は1.45×1.28mの長軸の方向をN15°Eにもつ方形土壙で深さは1.52mと深い。葬位は北頭位右側臥屈葬、人骨の保存は土壙の深いことによるのか、比較的良好である。被葬者は壮年男子と推定される。遺物は封土内より縄文式土器片、弥生式土器が、また土壙内からは鉄釘1本が出土している。

第31号墓

第31号墓は第27号墓の西南に接し、遺跡の中でも最大級のものである。すなわち、封土はわずかに旧状をとどめ、一辺5.65mの方形を呈している。封土の高さは0.88mである。土壙は長軸の方向をN14°Eにもつ方形プランであって、規模は2.28×1.91m、深さ1.16mで遺跡の中でも第77号墓につぐ第2位の容積を擁している。また、土壙は第1号墓から第11号墓にいたる一連の墳墓と異って、赤褐色の地山を掘り込んで築いている。葬位は西向き坐臥屈葬西向きに坐り合掌する姿勢で埋葬されたものだろう。被葬者は、人骨の保存が悪いために成人の男子と推定される以外判明しない。尾窪遺跡においては、方形土壙＝右側臥屈葬というのが公式的な埋葬法であって、それからすると第31号墓の場合は例外的な存在といえよう。また、坐臥屈葬という埋葬法は、遺骸を納めるに座棺つまり桶を利用したものと考えられる。遺物は封土内から土師質燈明皿片、縄文式土器、弥生式土器片が出土し、土壙内からは、水晶製数珠玉5個が出土している。

第39号墓

第39号墓は第31号墓の南隣りにあって、封土の旧状は第31号墓と同様に、おそらく方形であっただろうと考えられる。封土の規模は、一辺4.15m、高さ0.53mほどで、西側がやや崩れている。土壙は径1.26mの円形プランを呈すもので、深さは0.81mを測る。葬位は第31号墓と同じく西向き坐臥屈葬、つまり西向きに坐り合掌したスタイルをとる。本例の注目すべき点は、

被葬者の椎骨が右回りに不自然なほどの屈曲をみせており、土壙の形状とともに被葬者の埋葬には桶状の座棺を使用したものであろうと予想されたことである。被葬者は壮年男子と推定され、遺物は土壙内からガラス製数珠玉９個が出土した。

第44号墓

第44号墓は遺跡中央部にあって、第58Ａ号墓の北側に隣接している。封土は径1.53ｍ、高さ0.23ｍの小さな土饅頭形であまり目立たない。土壙は1.4×1.1ｍの方形プランをもち、深さは0.85ｍを測る。長軸の方向はＮ14°Ｅである。葬位は北頭位右側臥屈葬、被葬者は熟年男子と推定される。さて、この第44号墓は第41Ｂ号墓、第54号墓、第19号墓などともに、墳墓群中ではめずらしく土壙内に土師質燈明皿を副葬した例であった。加えて土壙内から15枚の銅銭が発見されており、これは他に例をみない特徴である。15枚の銅銭は紐を通して連結されていた。これは土壙内底部の南東隅から発見されたが、磨耗と腐食が著しく、15枚すべてについてその銭種を知ることができなかった。銭種の判明したものには至道元宝・熙寧元宝・元豊通宝があって、他の12枚についても、以上三種（北宋銭）のうちのいずれかであったものと考えられる。

第47号墓

第47号墓は第39号墓に南接する火葬墳墓である。封土は径1.1ｍ、高さ0.62ｍ半球形を呈する。土壙は封土の径とともに遺跡中最小の規模で0.55×0.54ｍの方形プラン、深さも0.23ｍにすぎない。第47号墓は先にのべたごとく火葬墳墓であって、それも後出の第62号墓のよう現地火葬の例ではない。すなわち、被葬者は直接土葬に付されるのではなくて、まずどこかでな骸を焼却されたのち、捨い集められた火葬骨が土葬と同じ手順で埋葬されるという例である。この場合、火葬骨はおそらくは櫃に納められて土壙に入れられたものと考えられ、主として土壙内南部にうづ高くなった状態でみられた。被葬者については、成人であるということ以外は何ら判明しなかった。また、土壙内からの遺物は皆無であった。

第54号墓

第54号墓は遺跡のほぼ中央部の西端に位置しており、東側、南側には第55号墓、第56号墓が隣接する。第54号墓の封土の規模は、封土の頂部にクヌギが自生していたためにかなり東側に崩れてはいるが、径4.08ｍ、高さ1.05ｍを測り、墳墓群の中では大型の部類に属している。土壙は赤褐色を呈する地山を掘り込んで造った円形土壙で、上縁部径1.53ｍ、底部径1.27ｍ、深さ0.91ｍを測る。葬位は北向き座臥屈葬で第38号墓と同様に円筒状の座棺に納めて埋葬したものであろう。尾窪遺跡においては、円形土壙は７例ほどあるが、北向き座臥屈葬というものは例外的な存在であって、この意味では第25号墓と同じく納棺の際に方向を間違えてしまったものかも知れない。被葬者は壮年女子と推定され、その人骨は頭骸骨がとくに良好である。遺物は、封土内より縄文式土器片、弥生式土器片、磨り石、土師質燈明皿片が出土し、土壙内から土師質釉明皿２、灰釉陶器皿１が土出した。

第57A号墓

第57A号墓は第58A号墓の西側に接している。封土は径3m・高さ0.43mの土饅頭形である。土壙は1.38×0.88m・深さ0.81mの方形土壙、長軸の方向はN 18° Eを指す。ここで、第57A号墓は第58A号墓の周溝と切り合い関係にあって、その前後関係については、第57A号墓が第51号墓・第58B号墓・第64号墓とともに第58A号墓の周溝が埋没した後に築造されたものであることが確認された。葬位は北頭位右側臥屈葬、また被葬者は熟年女子と推定され、人骨の保存は不良であった。遺物は封土内から縄文式土器片、弥生式土器片、土師質燈明皿破片などが出土したのみで、土壙内からは何も出土しなかった。

第61号墓

第61号墓は第58A号墓の西隣りに位置している。土饅頭形の封土は径4.26m・高さ0.91mと比較的大きい。土壙は1.66×1.22mの方形プランで深さは0.99mを測り、土壙内には空洞がみられた。長軸の方向はN7° Eである。葬位は西向き坐臥屈葬、被葬者があぐらの姿勢で坐り、埋葬されたことが明瞭に観察できる。第61号墓は、方形土壙と坐臥屈葬の組み合せをもつという点において第31号墓と共通していることは注目して良い。被葬者は熟年女子と推定され、遺物は土壙内より土師質燈明皿2が出土している。

第62号墓

第62号墓は第58A号墓の南隣りに位置する火葬墓である。封土は径5.9m、高さ0.76mと最大級の規模を有しているが土壙はもたない。この第62号墓は、同じ火葬墓の第47号墓とは異なり、いわゆる現地火葬の好例である。つまり、第62号墓は屍体の焼却場と遺骨の埋葬場所が同一という埋葬形態を示す。具体的には、焼却された遺骨は灰や炭とともにかき集められ、そのうち、一部の骨片のみが壺や土師坏に納められて埋葬されている。封土内から出土した壺や多数の土師燈明皿のうち、確実に遺骨を納めたものは土師質燈明皿3組5個であった。これらの土師質燈明皿は、それぞれ単独あるいは合せ口で用いられ、中には2・3の骨片を入れて、かき集めた火葬骨が灰・炭の上に安置されていた。

第77号墓

第77号墓は遺跡の南寄り東端に位置しており、その封土は方形を呈し、一辺5.66m・高さ1.14mと第58A号墓につぐ偉容を誇っている。また、土壙は方形土壙で2.4×1.8m・深さ1.33mと遺跡中最大であって、封土の規模に相応している。土壙には空洞がみられ、長軸の方向はN 2° Eと北に近い。第77号墓の封土・土壙は、きわめて保存が良好であって、墳墓の築造の過程をほぼ確認することができた。葬位は北頭位右側臥屈葬、被葬者は壮年男子と推定される。遺物は土壙内より鉄釘8本が出土している。　（石田　彰紀）

尾窪中世墳墓一覧表 I

号	封土			土壙			埋葬		被葬者	遺物		備考
	形状	規模		形状	規模	長軸の方向	葬法	葬位		封土内	土壙内	
1	円形	径 高	200 40	方形	径 深	160×100 96	N12°E	土葬	北頭位 右側臥屈葬	壮年男子		鉄釘1	土壙に空洞
2	方形	辺 高	290 62	方形	径 深	215×155 118	N22°E	土葬	北頭位 右側臥屈葬	熟年男子		鉄釘1	土壙に空洞
3	円形	径 高	260 60	方形	径 深	167×120 99	N11°E	土葬	北頭位 右側臥屈葬	壮年女子			
4	方形	辺 高	366 103	方形	径 深	158×123 118	N13°E	土葬	北頭位 右側臥屈葬	熟年女子		鉄釘1	土壙に空洞
5A	円形	径 高	320 71	方形	径 深	170×85 45	N10°E	土葬	北頭位 右側臥屈葬?	熟年女子		鉄釘2	
5B	不明	径 高		方形	径 深	160×108 63	N21°E	土葬	北頭位 右側臥屈葬?	熟年男子			新規追加
6	円形	径 高	290 85	方形	径 深	155×126 99	N3°W	土葬	北頭位 右側臥屈葬	熟年女子		鉄釘1	土壙に空洞
7	円形	径 高	235 78	方形	径 深	133×105 95	N14°E	土葬	不詳 (人骨なし)	不詳			
8	方形	辺 高	321 85	方形	径 深	172×115 50	N13°E	土葬	北頭位 右側臥屈葬	成年男子		鉄釘3	
9	円形	径 高	225 43	方形	径 深	185×130 96	N14°E	土葬	不詳	成年女子		鉄釘1	
10A		径 高	235										墳墓ではないことが確認された
10B	不明	径 高		方形	径 深	154×124 50	N10°E	土葬	北頭位 右側臥屈葬?	不詳 (成人)			新規追加
11	円形	径 高	345 62	方形	径 深	153×124 78	N19°E	土葬	北頭位 右側臥屈葬?	熟年女子		鉄釘1	
12		径 高	195										墳墓ではないことが確認された
13	円形	径 高	120 42	方形	径 深	127×105 42	N89°E (S89°W)	土葬	西頭位 右側臥屈葬	熟年男子			
14		径 高	205										墳墓ではないことが確認された
15		径 高	217										墳墓ではないことが確認された
16	円形	径 高	350 52	円形	径 深	×153 89		土葬	不詳	不詳 (成人)			
17		径 高	275										墳墓ではないことが確認された
18		径 高	230										墳墓ではないことが確認された

号	封土 形状	封土 規模	土壙 形状	土壙 規模	土壙 長軸の方向	埋葬 葬法	埋葬 葬位	被葬者	遺物 封土内	遺物 土壙内	備考
19	円形	径 175 高 25	方形	径 146×110 深 66	N21°E	土葬	北頭位 仰臥屈葬	成年男子			
20		径 高 450							景徳元宝		墳墓ではないことが確認された
21	円形	径 160 高 36	円形	径 120 深 48		土葬	不詳	熟年男子			
22	円形	径 175 高 29	方形	150×86 深 95	N1°E	土葬	不詳	不詳			
23	円形	径 255 高 44	方形	173×122 深 116	N3°W	土葬	北頭位 右側臥屈葬？	壮年女子			
24	円形	径 143 高 26	方形	155×126 深 79	N4°W	土葬	北頭位 右側臥屈葬？	熟年女子			
25	円形	径 262 高 56	方形	152×108 深 91	N22°E (S22°W)	土葬	南頭位 右側臥屈葬？	成年女子			土壙に空洞
26A	円形	径 205 高 21	方形	158×123 深 74	N2°E	土葬	北頭位 右側臥屈葬？	壮年女子		ガラス製数珠玉26個	
26B	不明	径 高	方形	112×75 深 77	N2°E	土葬	不詳	6～7才の小児（性別不詳）			新規追加
27	円形	径 277 高 55	方形	145×128 深 152	N15°E	土葬	北頭位 右側臥屈葬？	壮年男子		鉄釘1	
28	円形	径 270 高		径 深							路線予定地外であるため未調査
29	円形	径 170 高 28	方形	115×105 深 130	N8°E	土葬	不詳	不詳 （成人）			
30	円形	径 156 高 25	方形	150×80 深 38	N1°E	土葬	不詳	不詳 （成人）			
31	方形	辺 565 高 88	方形	228×191 深 116	N14°E	土葬	西向き 坐臥屈葬	男子 （成人）	弥生式土器	水晶製数珠玉5個	
32	円形	径 297 高 56	方形	130×107 深 93	N10°E	土葬	北頭位 右側臥屈葬？	壮年女子		鉄釘1	
33	円形	径 240 高		径 深							路線予定地外であるため未調査
34	円形	径 210 高 26	方形	132×104 深 62	N23°E	土葬	不詳	不詳 （成人）			
35	円形？	径 242 高		径 深							路線予定地外であるため未調査
36		径 246 高									墳墓ではないことが確認された
37	円形	径 310 高 45	方形	122×120 深 57	N12°E	土葬	不詳	壮年男子			

号	封土 形状	封土 規模	土壙 形状	土壙 規模	土壙 長軸の方向	埋葬 葬法	埋葬 葬位	被葬者	遺物 封土内	遺物 土壙内	備考
38	円形	径 200 高 25	円形	径 124 深 58		土葬	西向き 坐臥屈葬？	壮年女子	縄文式土器・弥生式土器 土師器		
39	方形	辺 415 高 53	円形	径 126 深 81		土葬	西向き 坐臥屈葬	壮年男子		ガラス製 数珠玉 9	
40	円形	径 188 高 30	方形	100× 88 深 59	N20°E	土葬？	不詳 （人骨なし）	不詳		ガラス製 数珠玉 1	
41A	円形	径 143 高 27	円形	× 深 125 62		土葬	不詳	2～3才の幼児		ガラス製 数珠玉 2	
41B	不明	径 高	円形	× 深 96 53		土葬	不詳	不詳 （成人）		土師質燈明皿 1	
41C	不明	径 高	方形	125×110 深 87	N15°E	土葬	不詳	2～3才の幼児		五輪塔空・風輪部残欠 1	
42		径 185 高									墳墓ではないことが確認された
43		径 高 133									墳墓ではないことが確認された
44	円形	径 153 高 23	方形	140×110 深 85	N14°E	土葬	北頭位 右側臥屈葬？	熟年男子		銅銭15枚・土師質燈明皿 1・鉄釘 3	
45	円形	径 150 高 46	方形	115×104 深 83	N8°E	土葬？	不詳 （人骨なし）	不詳			
46	円形	径 156 高 44	方形	100× 78 深 53	N10°E	土葬	不詳	不詳 （成人）		鉄釘 1	
47	円形	径 110 高 62	方形	55× 54 深 23	N8°E	火葬	火葬骨の集積	不詳 （成人）			
48	円形	径 220 高 76	方形	160×113 深 75	N8°E	土葬	北頭位 右側臥屈葬？	壮年男子			
49	円形？	径 高 184		× 深							路線予定地外であるため未調査
50	円形？	径 高 196		× 深							路線予定地外であるため未調査
51	円形	径 147 高 54	方形	123× 78 深 118	N13°E	土葬	北頭位 右側臥屈葬	不詳 （成人）		鉄釘 1	築造は58A号周溝埋没後
52	円形	径 225 高 70	方形	148×115 深 66	N12°E	土葬	不詳	不詳 （成人）			
53	円形？	径 高 225		× 深							路線予定地外であるため未調査
54	円形	径 408 高 72	円形	× 深 153 91		土葬	北向き 坐臥屈葬？	壮年女子		灰釉陶器皿 1 土師質燈明皿 2	
55A		径 290 高									墳墓ではないことが確認された

号	封土 形状	封土 規模	土壙 形状	土壙 規模	土壙 長軸の方向	埋葬 葬法	埋葬 葬仕	被葬者	遺物 封土内	遺物 土壙内	備考
55B	不明	径 高	方形	111×72 径 深 53	N13°E	土葬	不詳	不詳	弥生式土器		新規追加
56	円形	径 362 高 56	方形	148×138 径 深 98	S12°W	土葬	面向き坐臥屈葬？	不詳（成人）			
57A	円形	径 300 高 43	方形	138×88 径 深 68	N18°E	土葬	北頭位右側臥屈葬	熟年女子			築造は58A号周溝埋没後
57B	不明	径 高	方形	97×83 径 深 81	N	土葬	不詳	4～5才幼児（性別不詳）		鉄釘5	新規追加
58A	方形	長辺 715 短辺 510 高 122		径 深					縄文式土器・弥生式土器・土師質坏・瓦器・五輪塔・北宋銭・その他		埋め墓ではなく葬送儀礼の場か
58B	不明	径 高	方形	径 62×107 深	S72°W	土葬	不詳				新規追加築造は58A号周溝埋没後
59	円形？	径 高 225	—	径 × 深 —	—	—	—	—	—	—	路線予定地外であるため未調査
60	円形？	径 高 143 —	—	径 × 深 —	—	—	—	—	—	—	路線予定地外であるため未調査
61	円形	径 高 428 95	方形	166×122 径 深 99	N7°E	土葬	西向き坐臥屈葬	熟年女子		土師質燈明皿2	土壙に空洞
62	円形	径 高 590 76	—	径 × 深	—	火葬	火葬骨の集積と火葬骨の土師質燈明皿への納入	不詳（成人）	縄文式土器・弥生式土器・土師質坏五輪残欠		現地火葬の好例
63	円形	径 高 145 18	方形	160×110 径 深 91	N12°E	土葬	北頭位右側臥屈葬？	成年女子		鉄釘1	
64A		径 高 442 —		径 × 深							墳墓ではないことが確認された
64B	不明	径 高 — —	方形	112×96 径 深 67	N6°E	土葬	北頭位右側臥屈葬？	7～8才の小児（性別不詳）			新規追加築造は58A号周溝埋没後
65	円形？	径 高 213 —		径 × 深 —	—	—	—	—	—	—	路線予定地外であるため未調査
66	円形	径 高 157 27	方形	148×103 径 深 85	N18°E	土葬	北頭位右側臥屈葬？	不詳（成人）		鉄釘3	
67	円形？	径 高 160 —	—	径 × 深 —	—	—	—	—	—	—	路線予定地外であるため未調査
68	円形？	径 高 160 —	—	径 × 深 —	—	—	—	—	—	—	路線予定地外であるため未調査
69	円形？	径 高 440 —		径 × 深 —	—	—	—	—	—	—	路線予定地外であるため未調査
70	円形	径 高 458 90	方形	220×163 径 深 145	N10°E	土葬	北頭位右側臥屈葬？	壮年男子		鉄釘13	
71	円形	径 高 397 88	方形	198×158 径 深 148	N14°E	土葬	不詳	熟年（性別不詳）		鉄釘2	本号土壙は遺跡中最も深い。

号	封土 形状	封土 規模	土壙 形状	土壙 規模	土壙 長軸の方向	埋葬 葬法	埋葬 葬位	被葬者	遺物 封土内	遺物 土壙内	備考
72	円形？	径 278 高 —	—	× 径 — 深 —	—	—	—	—	—	—	路線予定地外であるため未調査
73	円形？	径 370 高 —	—	× 径 — 深 —	—	—	—	—	—	—	路線予定地外であるため未調査
74	円形？	径 208 高 —	—	× 径 — 深 —	—	—	—	—	—	—	路線予定地外であるため未調査
75	円形	径 272 高 46	方形	187×130 径 深 85	N11°E	土葬	不詳	壮年男子		鉄釘	
76	円形	径 410 高 129	方形	162×118 径 深 94	N17°E	土葬	北頭位 右側臥屈葬？	壮年男子			
77	方形	辺 566 高 115	方形	240×180 径 深 133	N2°E	土葬	北頭位 右側臥屈葬？	壮年男子		鉄釘8	遺跡最大の墳墓である。土壙に空洞。
78	円形	径 375 高 50	方形	176× 96 径 深 83	N11°E	土葬	北頭位 右側臥屈葬？	熟年女子			
79	円形	径 372 高 58	方形	167×126 径 深 106	N28°E		北頭位 右側臥屈葬	壮年男子		鉄釘10	
80	円形	径 200 高 38	方形	140×104 径 深 50	N12°E		不詳	不詳 （成人）		鉄釘1	
81	円形	径 115 高 22	方形	102× 73 径 深 57	N17°E	土葬？	不詳 （人骨なし）	不詳			
82	円形	径 150 高 25	方形	92× 80 径 深 66	N10°E	土葬	不詳	2～3才の幼児			
83	円形	径 185 高 34	方形	118×110 径 深 129	N7°E	土葬	北頭位 右側臥屈葬	壮年女子		鉄釘1	

（Ⅰ～Ⅴ表は、第四章Ⅰの第1表に同じ）

Ⅱ　グルーピングについて

前節では、各墳墓の調査の概要について述べたが、これら墳墓群を全体的な視野でとらえた場合、封土・土壙の規模・形状の類似性、あるいは配列の状態などから、全体はいくつかのグループに分かれるのではないかと考えられる。以下、第1図および墳墓一覧表に見られる調査の諸結果を基本資料として、グループの設定を試みてみたい。

第1群

遺跡北部のグループで、遺跡を南北に分断する農道の北側に位置する。この第1群には第1号墓から第11号墓までの一連の墳墓12基が含まれ、第1図Ⅰ・Ⅱおよび墳墓一覧表にみるごとく、ほぼ同規模の墳墓が三列に整然と並んでいることは他の各群に見られない特徴である。

第1群の12基の墳墓のうち、10基は明瞭な封土を有しており、その封土の平均値は直径2.85m、高さ0.68mとなる。ちなみに封土の直径の最小値は第1号墓の2.00m、最大値は第4号墓の3.66m、そして高さの最小値は第1号墓の0.40m、
径・高さの最小値・最大値は、ともに第1号墓、第4号墓にみられる。しかしながら、これらの封土の多くは、さまざまな自然的・人為的影響をうけて、築いた当初の封土の形状とはかなり様相を異にしていることが考えられる。したがって，現状をもって旧状を知ることは困難であるといえよう。このような中で第2号墓、第4号墓、第8号墓は、遺跡全体を通じてみても封土の保存が良く、封土の旧状を知るには貴重な存在である。すなわち、すべての墳墓の封土が方形とはいえないまでも、前記の三例については第1図Ⅰ・Ⅱにも明らかなように方形の封土を有しており、整然とした方形墳墓の存在を知ることができる。

次に第1群に属する墳墓の土壙はすべて礫を多く含む地山に掘り込んで築かれている。この点は他の各群との間に、明らかに相違点を見出すことができる。土壙の形状はすべて方形プランで、土壙の各部の平均値は長辺1.65m、短辺1.17m、深さ0.83mを測る。また、土壙の長軸の方位平均値はＮ13° Ｅとなっている。さらに第1群の墳墓の葬位は、若干の差異は認められるものの、基本的にはすべて、北頭位右側臥屈葬の形態をとっている。第1群の墳墓は他の各群に比べて、人骨の保存が比較的良好であり、このことは12基の墳墓のうち7基までが鉄釘を出土していること、土壙内に空洞をもつものが多くみられたことなどにも反映している。

第2群

第2群は、遺跡を東西に横断する農道の南側に分布する一群で、第21号墓を除いて第19号墓から第34号墓までの12基を含む。

第2群の墳墓も第1群ほどではないが、比較的整然とした並びをもっており、たとえば第25号墓、第27号墓、第32号墓および第26Ａ号墓、第26Ｂ号墓は南北の方向に、また第23号墓・第24号墓・第25号墓・第26Ａ号墓は東西の方向に規則性をもっているようである。

墳墓の規模は、第31号墓を除いて第1群のものに準ずる中規模のものが多い。すなわち、第

31号墓を除く11基の墳墓における封土の平均値は直径2.11ｍ、高さ0.34ｍで土饅頭形を呈す。また土壙はすべて方形土壙でその各部分の平均値は長辺1.46ｍ、短辺1.09ｍ、深さ0.95ｍ、長軸の方向Ｎ９°Ｅであった。このうち、長軸の方向についてはかなり変動があって、東西27°の幅があることも記しておきたい。

埋葬は第31号墓以外は第１群と同じく、右側臥屈葬である。このうち、第25号墓だけは南頭位、他はすべて北頭位であって、この場合は納棺の際に間違ったものと考えられる。

さて、第31号墓は先にのべたように、土壙の容積は5.05㎥と遺跡中第２位であり、葬位は西向きの坐臥屈葬となっている。したがって、被葬者は坐棺に納められて埋葬されたものと考えて良いが、これと同様の例として第61号墓があり、第61号方形土壙の容積は2.00㎥と小さい。第31号墓を第61号墓と比べるとき、または埋葬形態が坐臥屈葬の円形土壙と比べるときに、その土壙がいかに大きな空間をもっているかが判る。つまり、第31号墓は埋葬に不必要な多くの空間をもった土壙ということができる。そして被葬者は水晶製の玉を用いた数珠を所持していたが、これは墳墓群中唯一の例である。

以上のべてきたことから、第31号墓の被葬者は他の墳墓とは異なって、厚葬の扱いをうけているように見受けられる。そして、第２群の墳墓は、この第31号墓を中心にし、その周辺を規則性をもってとりまいているように観察されるのである。あるいは、第２群の墳墓は第31号墓の被葬者を家長とする一族の墓とすることもできようが、残念ながら推測の域を出ない。

第３群

遺跡の中央に位置する第３群は、遺跡中もっとも多くの墳墓を擁する群で、第58Ａ号墓の周辺に群集する第37号墓から第66号墓までの一連の墳墓22基を含む。この群に属する墳墓は大小二種類あって、大きいものは第58Ａ号墓の西側に、小さいものは第58Ａ号墓の北側に集中している。墳墓の配置は、第51号墓、第45号墓、第46号墓および第52号墓、第48号墓、第47号墓に南北の規則性がみられ、第39号墓、第38号墓、第41Ｂ号墓、第41Ａ号墓、第41Ｃ号墓、第55Ｂ号墓、第54号墓の７基には東西の方向に規則性がみられた。そして、後者の７基の墳墓の中には円形土壙を主体部とするものが５基までも含まれている事実は注目したい。

さて、第３群の墳墓には、封土の規模のうえで大小二種類があることはすでにふれたが、大型の封土をもつものの平均値は直径4.17ｍ、高さ0.68ｍであり、小型のものは直径1.66ｍ、高さ0.35ｍである。しかし、これら大小の墳墓の間には特に差は認められない。土壙は、方形土壙と円形土壙の二種が混在していて、方形土壙は他の各群のものよりも比較的小さいものが多く、各部の平均値は長辺1.28ｍ、短辺0.95ｍ、深さ0.77ｍとなっている。

葬位は方形、円形土壙の存在を反映して、右側臥屈葬７例、坐臥屈葬５例がみられ、他は不明である。被葬者はやはり成人が多いが、それでも幼小児の墳墓が４例ほどあって、他の各群に比べると多い。

埋葬の方法は、ほとんどが土葬であるが、遺跡全体でも２例しか知られなかった火葬墓が、ともに第３群に属している。これら火葬墓については前項においてすでに述べたが、また次節

においてもふれるので、ここでは重複を避けたい。また第３群と第58Ａ号墓の関係についても同様である。さらに第３群の墳墓については、土壙内から遺物を出す墳墓が他の各群に比べて多いという事実であろう。しかし、第１表に示したごとく、遺物の出土する墳墓に特定の傾向を見出すことはできない。つまり、遺物を出す墳墓と出さない墳墓との間に、封土の形状や大小、土壙の形状や大小、被葬者の年令や性別、そして葬位などによる差は認め難い。特徴といえるものをあげるならば、円形土壙に遺物を有する比率が高いこと、そして、本項の初めにふれた東西の規則性をもつ７基の墳墓のうち５基までが遺物を出土していることであろう。

以上のべてきたように、第３群は他の各群に比較して、多くの特徴を有する変化に富んだグループといえる。

墳墓	土壙内出土遺物	封土の形状	土壙の形状	葬位	被葬者
第　号墓	ガラス ガラス製数珠玉	方形 41 53	円形 126 81	西 坐	
第40号墓	ガラス ガラス製数珠玉	円 188 30	方 1 59	不 し	不明
第4号	ガラス ガラス製数珠玉	円 1	円 12 62	不詳	2～3才の幼児
第墓41B号	土師質 燈明皿	不明	円形 96 53	不詳	不詳（成人）
第墓41C号	五輪塔残欠	不明	方 12 87	不詳	3才の幼児
第44号墓	北	円 15 23	方形 140×110 85	北頭位 右側臥屈葬	熟年男子
第54号墓	灰釉陶器 土師質 燈明皿	円形 408 72	円 1 91	北 坐	壮年女子
第61	土師質 燈明皿	円形 428 95	方 1 99	西向 坐臥	熟年女子

第６表　土壙出土の遺物

第４群

第４群は、遺跡南部に分布する墳墓の一群で、第70号墓から第79号墓にいたる７基の墳墓によって構成されている。そして、それぞれの墳墓の位置関係には、他の各群でみられたような規則性は全く認められない。つまり第４群の墳墓では、すでに築造された墳墓があるから少し距離をおいて新たに築くといった程度の位置関係しかもっておらず、その意味では独立性を保っているといえる。したがって、第４群の構成墳墓はわずか７基と少ないにもかかわらず、これが占有する空間は、多くの墳墓から成る他の各群に比べて、決して狭いものではない。

さて、第４群の特徴は最大級の墳墓によって構成されていることであろう。封土は保存のよい第77号墓を除けば、他の例にもれず崩壊の度がはげしい。そのため、ここでは土壙の大きさによって、墳墓の規模を示すが、群中最大の墳墓は第77号墓、最小は第76号墓であった。土壙の形状はすべて方形であって、それぞれの土壙の各部分の数値は、前者が2.40×1.80m、深さ1.33mであり、後者は1.62×1.18m、深さ0.94mであった。そして７基の平均値は1.72×1.38m、深さ1.13mとなっており、他の各群の平均値に比べて、かなりの差があることが判る。

葬位は７基中５基までが北頭位右側臥屈葬であり、残り２基もその可能性が濃い。遺物につ

いては土壙内より比較的保存の良い鉄釘が多数出土している。

第５群

第５群は、遺跡のもっとも南よりに位置する第80号墓から第83号墓までの４基の方形土壙墓によって構成されている。

遺跡の中で、もっとも小さな群である第５群は、他の各群とは多少異った存在といえるものである。すなわち、第５群を構成する墳墓はいずれも小規模であり、相互の位置関係は他の各群にはみられないほど整然としたものである。第５群中の最大の墳墓は第80号墓で1.40×1.04ｍ、深さ0.5ｍ、最小は第82号墓で0.92×0.80ｍ、深さ0.66ｍ、そして全体の平均値は1.13×0.91ｍ、深さ0.75ｍとなっており、構成墳墓の小規模なことが判るだろう。また、第５群の墳墓は第83号墓をのぞいて人骨の保存が不良であって、葬位・被葬者についての詳細は判らない。

なおこの東側には、石塔を有する10数基の近世墳墓（天保～明治）がみられたことをつけくわえておく。

第６群　　各群に属さない墳墓

これまで墳墓群を５群に分け、それぞれの各群についてのべてきた。しかし墳墓の中には、前記５群のいずれにも属さないと考えられるものが３基ある。すなわち第13号墓・第16号墓・第21号墓がそれで、このうち第16号墓・第21号墓は位置的には第２群に近いものの、墳墓の形状、内容については第３群に組み入れられるべき存在であることを特記しておきたい。しかし、第13号墓の場合は形状・内容のいずれをとっても、属すべき群をもたない。

（石田　彰紀）

第二章　遺　　構

本節においては、尾窪遺跡でみられた遺構、すなわち土葬墓、火葬墓、そして第58A号墓について、それぞれ項を設けて考察を加えたい。

土葬墓は尾窪遺跡における、もっとも一般的な葬法である。そしてそれは、封土、土壙の2部分から成っている。第1項では、その封土、土壙の概要についてのべるほか、若干の形式分類を試みてみたい。

第2項では、尾窪遺跡でみられた2例の火葬墓について考察を加える。いわゆる火葬墓なるものについては、全国各所で発見されており、また調査・報告されているものも決して少なくはない。しかしながら、尾窪遺跡の例は、土葬墓との関連において非常に興味深い存在といえるものである。

第3項でとりあげる第58A号墓は墳墓ではなく、これまでは便宜上、当初の第58A号墓の名をそのまま用いてきたが、第3項においては、第58A号遺構と改称する。

I　土　葬　墓

尾窪遺跡で調査した64基の墳墓中、62基までが土葬墓である。このことは土葬という埋葬法が、尾窪遺跡を形成したひとびとの間でいかに一般化していたかということを如実に示している。

ところでこの土葬墓の築造過程は、第77号墓ほか2・3の例からほぼ以下のように復元されるであろう。

1、墳墓を築造する地点の決定。

墳墓の位置関係に規則性があるなしにかかわらず、隣接する墳墓とは重複しないように配慮されている。[注1]

2、土壙の形状・規模と方向の決定。

土壙の形状規模は、もちろん、被葬者を納めた棺の形状、規模によって定まる。しかし、第31号墓、第77号墓のごとき大型の土壙においては若干の厚葬の傾向を認めざるを得ない。また、方形土壙における長軸の方向の決定については、多少の変動はあっても大体 N10°E～N 15°Eの間におさまっていることは、長軸の方向を決定する目標、たとえば塚原地区の台地に大木あるいは古墳などがあったことを暗示しているようである。[注2]

3、土壙の掘り下げ

土壙の深さは、土壙の平面積との間に一応比例関係を認めてよいが、この両者に一定の割と合いうものは存在しないようにみうけられる。掘り下げの手順は、土壙となるべき範囲の土を少しづつ全体的に掘り下げてゆき、周囲に排土する。したがって、排土の構成は下部が表土（黒色土）、中部が表土と地山の土との混合土（褐色土）、そして上部が地山の土（赤

褐色）となって、掘り下げ前の層序とは逆転する。しかし、これは第1群を除く墳墓にのみ共通することであって、第1群の墳墓は、礫の多い地山の上に築かれているために、層序は不明瞭である。

4、納棺と副葬品の納入

棺には寝棺と座棺があるが、基本的には、前者は北枕、後者は顔が西向きとなるように納棺される。しかし、中には第25号墓や第54号墓のように、納棺の際に方向を変えたと思われるものもある。副葬品については土壙内棺外より灰釉陶器、土師器燈明皿、北宋銭などが出土しているが、そのいずれも丁寧に安置された状況ではなく、無雑作に置いたり投げ入れたりという状況を示していた。[注3]

5、封土の形成

納棺が完了すると土壙を掘り下げることによって得られた排土でもって、土壙と棺の間隙を埋め、さらに上面を覆う。この段階が封土の形成であるが、この手順は土壙の掘り下げとは逆になる。ところで、封土の規模は土壙掘り下げの排土の量、すなわち土壙の容積に比例することはいうまでもない。また、調査時にしばしば確認された土壙内の空洞は、棺のなごりであることにほぼまちがいないと思われるが、その空洞は封土の土圧によって変形しており、棺の正確な形状、規模を確認することはできなかった。封土が築かれた後、その上にはおそらく餓飢草子にみるような木製の墓標が立てられたものと想像される。

封　土

尾窪遺跡においては、発掘調査前の地形測量時に、83にのぼる盛り土を認めることができた。これは当初より墓の封土であろうと考えられていたものである。しかし、実際に発掘調査が進行するにつれ、盛り土の多くは墳墓であることが判明したが、結果としては、墳墓と想定された83例のうち、九州縦貫道路線予定地内のもの68例について発掘調査を行なった。そして調査終了時には、68例中56例が実際の墳墓であって、他の12例は墳墓ではないと確認されたのである。つまり、発掘した盛り土に対する墳墓の割合は82.6%とかなりの高率で、当初の予想が的中したわけである。換言するならば、盛り土5・6例に対して1例の割合で、墳墓ではない盛り土がみられたことになる。

さて、発掘調査の結果、実際に墳墓であったものの盛り土を封土と称する。そしてこれらの封土は、築造後長い年月を経過する中で、自然的・人為的な諸影響をうけてかなり変形していると考えられるものが少なくなかった。しかし、それらに色々の観察・検討を加えることにより、封土には大小さまざまの規模のものがあり、一般的には封土の大きさは土壙の大きさに比例している。また形態にも方形・円形の二種があることが判ったのである。以下、封土を方形封土、円形封土に分けて、それぞれについて考察したい。

方形封土

尾窪遺跡の墳墓の中で、方形プランの封土をもつものには第2号墓、第4号墓、第8号墓、第31号墓、第39号墓、第77号墓がある。しかし、これらは現状で確認できたもののみであって、本来は前記以外のものもあったかも知れない。また、現在方形封土をもつ墳墓と判断され

るものも、決して保存が良い訳ではない。

方形封土をもつ墳墓は、円形封土のものに比べ、一般に大型のもので、最小のものは第2号墓の一辺の長さ2.90m、高さ0.62m、最大のものが第31号墓の一辺5.65m、高さ0.88m、そして平均値は一辺3.91m、高さ0.74mとなっている。

封土と土壙の関係については、規模の点では比例的関係にあるが、それぞれの形態については特に関係はないように見受けられる。すなわち、方形封土は方形土壙、円形土壙のいずれかとの組み合せがみられ、これらの傾向は、後出の円形封土をもつ墳墓にも同様に認められている。

円形封土

遺跡の多くの墳墓が、いわゆる土饅頭形の封土をもっているが、これを円形封土と称する。もちろんこの場合、現状が土饅頭形であるからといって、それがそのまま旧状を示しているとは限らない。[注4] 封土は、構造的には土壙を掘り下げることによって得られた土の集積である。しかも、古墳時代の古墳の封土にみられるように、かためながら盛り上げたものではない。したがって、長期間にわたる風雨などの自然現象が、封土にどのような影響を与えたかは予想できよう。

さて、円形封土の規模は大小さまざまであって、最小のものは第47号墓で径1,10m、高さ0.62m、最大のものは第62号墓で径5.90m、高さ0.76m、そして平均値は径2.48m、高さ0.4mとなっている。

円形封土の埋葬主体部との組み合せは、方形土壙・円形土壙・火葬墓などがあって、公式的なものは認められない。ただ、数の上では方形土壙との組み合せがもっとも多い。

土　壙

尾窪遺跡の墳墓の埋葬法には土葬・火葬の二種があるが、前者の場合、そのほとんどは地中に土壙を掘り込んで棺を納め、余った空間を土で埋め、その上を封土で覆うという手法を用いている。しかし、このような埋葬法は何も尾窪遺跡に限ったことではなく、全国に散見することができる。たとえば、長野県中野市の安源寺遺跡[注5]、島根県松江市檜山古墓群[注6]、広島県豊田郡本郷町陣ベラ遺跡群[注7]などの報告があり、熊本県下においても宇土市緑川遺跡[注8]が報告されている。

本稿においては、尾窪遺跡のもっとも一般的な埋葬遺構である土壙について、若干の考察を加えてみたい。なお、尾窪遺跡の土壙には大別して方形のプランをもつ土壙と円形のプランをもつ土壙とがあり、それぞれについてのべるものとする。

方形土壙

尾窪遺跡の調査を行なった64基の墳墓のうち、55墓が方形土壙を主体部とする土葬墓であって、その全体に対する割合は79.7%を占める。一方、円形土壙は62基のうち7基で、全体の10.9%にすぎない。したがって、尾窪遺跡におけるもっともポピュラーな埋葬主体部は方形土壙ということがいえよう。

さて、一言で方形土壙とはいっても厳密には、方形土壙にも正方形に近いプランをもつもの

と長方形のプランをもつものとがある。ここで仮に前者をA類、後者をB類とし、それぞれの具体的な数を示すならば、A類は4基、B類は47基となる。以下A類、B類に分けて考察する

A　類

方形土壙のうち、長軸の長さと短軸の長さとの差が10㎝以内で正方形に近いプランを有するものをA類と仮称する。

Aタイプに属する墳墓には第37号墓、第56号墓、第82号墓、第83号墓があげられる。これらの墳墓葬位は、第37号墓は不明であるが発掘調査時の観察から坐臥屈葬の傾向が強く、第56号墓は西向き坐臥屈葬、第82号墓は不明、そして第83号墓は北頭位右側臥屈葬となっている。

A類の方形土壙は55例中、わずかに4例であるために、詳細を把握することが困難であるが、可能性としては、後出の円形土壙と同様に、坐棺に納めたものとも考えられる。そしてこのことについては、円形土壙6基と坐臥屈葬若しくはその可能性の強い第56号墓、第37号墓が同じ第3群に属していることも示唆を与えてくれる。

B　類

方形土壙の中で、長軸と短軸の差が11㎝以上の長方形のプランをもつものをB類とする。B類の方形土壙は、尾窪遺跡では51基が検出されているが、そのうち葬位が判るのは右側臥屈葬32例、仰臥屈葬1例、坐臥屈葬2例である。右側臥屈葬は32例のうち29例までが北頭位、他の2例は南頭位、西頭位が各1例づつであり、この場合の南頭位は、これまでしばしば触れたように納棺の際の間違いと考えられる。また、B類の方形土壙は、形態的にはいわゆる寝棺を納めるに適したものである。したがって基本的には、B類の方形土壙は寝棺＝北頭位側臥屈葬の公式化が可能であろう。

仰臥屈葬については、資料が第19号墓1例であるために、その全貌を把むのはむづかしい。未調査、葬位不明の土壙墓の中には仰臥屈葬が何例かみられるかも知れないが、いずれにせよ尾窪遺跡においては、右側臥屈葬ほどには用されることのなかった埋葬法と考えられる。

円形土壙

平面プランが円形を呈する土壙を円形土壙と称する。あるいは土壙の形状から、円筒状土壙と称することも可能であるが、ここではさきの方形土壙に対することばとして円形土壙の名称をあてたい。なお、円形土壙断面の形はいずれも底部よりも上縁部の方が若干広い、いわゆる逆截頭方錐形を呈している。

さて、尾窪遺跡において円形土壙を主体部とする墳墓は7例ほど発見されているが、一覧表にみるように、円形土壙には大きく分けて大小ふたつのタイプが考えられる。すなわち、大型の円形土壙として直径1.53m、深さ0.94mほどの規模のもの、小型の円形土壙として直径1.23m前後、深さ0.56m前後の規模のものであって、大型のタイプには第16号墓、第54号墓が、小型のタイプには第21号墓、第38号墓、第41A号墓第41B号墓が該当する。そして第39号墓は深さでは前者、直径では後者の計測値に近く、両者の中間的な位置にあるものといえる。

円形土壙における埋葬形態は、第38号墓、第39号墓、第54号墓がいずれも坐臥屈葬位であること、土壙の形状から右側臥屈葬、仰臥屈葬の方法をとることは困難であることなどから、一応、円形土壙＝坐臥屈葬の公式を導くことができる。[注9]

坐臥屈葬の場合、第38号墓、第39号墓が西向きであるのに対して、第54号墓のみが北向きである。また、第31号墓、第56号墓、第61号墓は方形土壙の例であるが、これまた西向き坐屈葬である。ここで、方形土壙墓第25号墓の南頭位右側臥屈葬という葬位が、納棺の際に方向を間違えたことによるものとすれば、第54号墓もまた、本来は西向き坐臥屈葬であるべきところを納棺の際のミスによって、北向き坐臥屈葬という例外的な存在となったものといえよう。

つぎに被葬者を納める棺については、土壙の形状から座棺、すなわち円筒状の棺桶が予想される。一般に座棺は蓋をするにも縄掛けだけで釘を打たないが、実際に円形土壙のいづれからも鉄釘は発見されていない。以上のことから、尾窪遺跡における円形土壙を主体部とする墳墓は、円形土壙は座棺＝西向き坐臥屈葬の公式が成立することを容認し得ると考える。

Ⅱ 火 葬 墓

火葬とは、いうまでもなく屍体を火熱によって焼却し、その遺骨を拾集して埋葬するという方法であって、その埋葬する施設を火葬墓という。尾窪遺跡においては、このような火葬墓は62例中２例が確認されている。１例は第47号墓であり、他は第62号墓の例である。この２例は同じ火葬墓であっても内容的には、全く似て非なるものといってよい。すなわち前者は火葬と土の折衷とでもいうべき存在であり、後者は現地火葬の好例である。これらはいずれも封土をもっており、外面的には他の土葬と何ら変りはない。以下、それぞれの特徴についてのべる。

火葬土壙墓

第47号墓は、被葬者の遺骨を集め、土壙に納めて埋葬した例であるが、このような埋葬施設をここでは火葬土壙と仮称する。

火葬土壙とは要するに火葬と土葬の折衷であって、屍体焼却後の遺骨を拾い集め、櫃（ひつ）に納め土壙の中へ入れるという埋葬方法であり、土壙の上部は他の土葬墓と同様に封土で覆われる。第47号墓はこのように埋葬の過程が複雑な点において第31号墓とは違った意味で被葬者が厚葬の扱いを受けたものということが可能かも知れない。

第47号墓の土壙は、0.45×0.44ｍの方形状を呈し、深さは0.23ｍである。このように他の土葬墓の土壙に比較して、きわめて小規模なものであるが、これは、遺骨を納めた櫃を入れるためのものであるから、この程度の大きさのもので十分であったのだろう。つまり、火葬土壙としては第47号墓のごとき規模のものが、必要にして十分なものであったと考えられる。

現地火葬墓

第62号墓は前章第二節においてのべたように、屍体焼却の場所と埋葬の場所が同一の現地火葬の例である。ここではその具体的内容にはふれないが、同じ火葬墓ではあっても、第47号墓

とは埋葬の過程を異にしていることはいうまでもない。つまり、第62号墓は第47号墓に比べてかなり埋葬の手続が簡略化されている。

第62号墓においては、封土の下部と上部にそれぞれ遺骨を納めた土器が安置されていた。すなわち、下部のそれは土師質燈明皿を納骨器としたものであり、上部のものは陶製壺を納骨器としたものである。前者の土師質燈皿は、他の墳墓から検出されているものとほとんど同じタイプのものである。そして、これら二者の納骨器が同時期のものか否かについては、調査前に封土がすでに攪乱をうけていたために、残念ながら判定を下すことができない。また、陶製壺については断定はできないが、おそらく江戸初期頃の佐賀周辺で製作されたものと考えられる。

Ⅲ　特殊な遺構

第58Ａ号遺構は、その外見が他の墳墓とよく似ていたために、調査のほとんど終了間際まで墳墓と考えられており、ために第58Ａ号墓と呼称されていた。しかし結果的には、第58Ａ号跡構のどの部分にも埋葬の形跡は認められず、少なくともいわゆる「埋め墓」としての施設ではないことが確認されたのである。

第58Ａ号遺跡の発掘前の形状は、方形の封土でその規模は長辺7.15ｍ、短辺5.10ｍ、高さ1.22ｍと遺跡の中では最大であった。しかし、その封土の下部には土壙やその他の埋葬施設はなく、周溝によって囲まれた平面のみが認められた。この平面は5.10×4.60ｍほどの広さを有している。以下、第58Ａ号遺構の調査結果を箇条書きで示す。

1、遺跡中央に位置する。

第58Ａ号遺構は、第1図Ⅰ・Ⅱにみるように遺跡のほぼ中央に位置している。

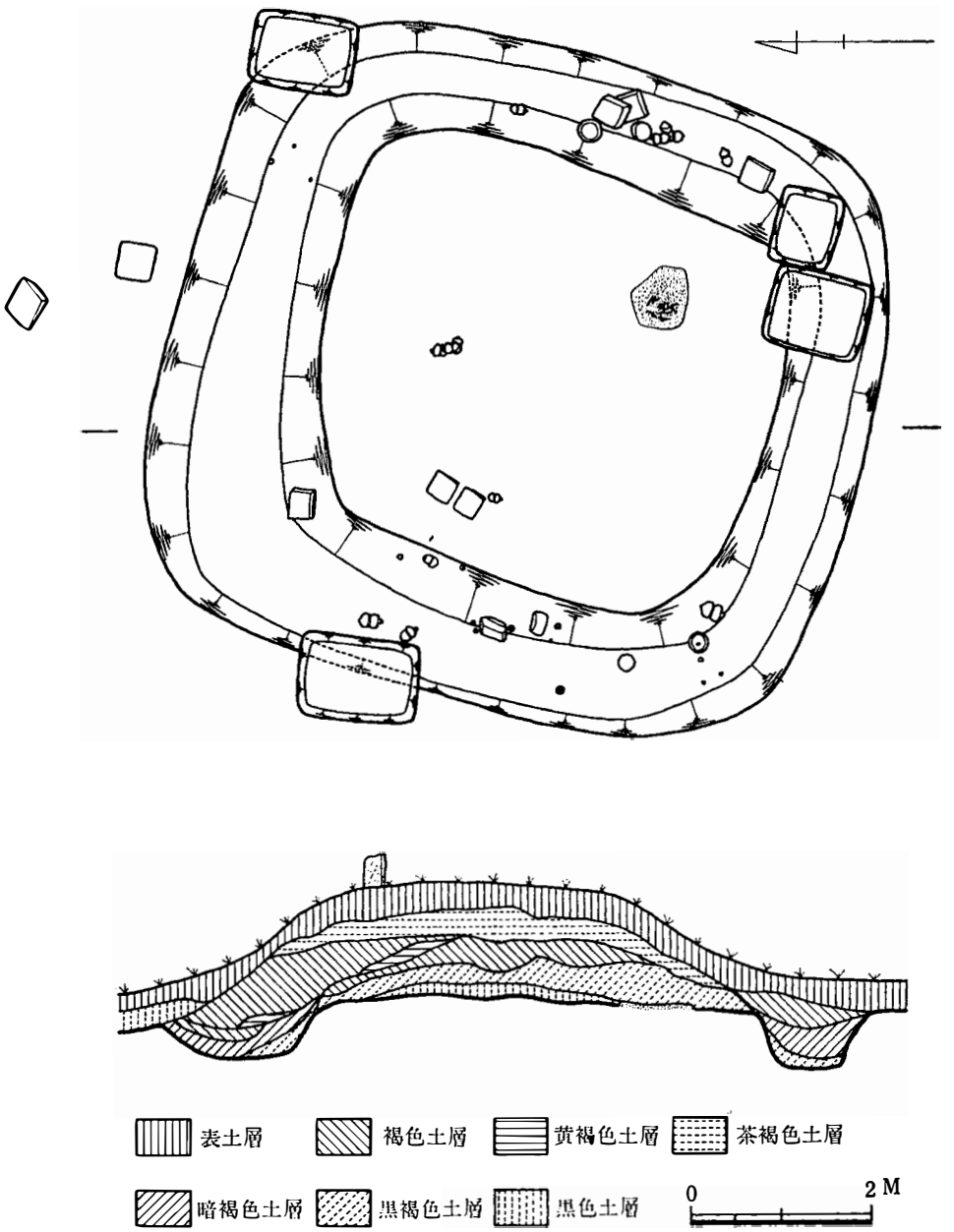
2、遺跡中、最大の規模である。

第58Ａ号遺構は、封土にしろ周溝に囲まれた部分にしろ、遺跡の中では最大の空間を占有しており、その規模は、発掘前も発掘終了後も他を圧倒している。

3、いわゆる「埋め墓」ではない。

第58Ａ号遺構も当初他の例と同様墳墓と考えられていたが、調査した結果、埋葬のための施設を確認することができなかった。ただ、第58Ａ号遺構の敷地内からは第51号墓、第57Ａ号墓・第58Ｂ号墓・第64Ｂ号墓の4基の土壙が発見されており、人骨も検出されている。しかしこれらは、第58Ａ号遺構の周溝が埋没したのちに築かれたもので、それぞれ独立した墳墓であることが判った。また、封土の中から、他の遺跡ではしばしば納骨器として利用されている瓦器の壺片が出土しているが、封土の裾部の浅い所から検出しておりこれを第58Ａ号遺構における埋葬主体と認定することはできなかった。つまり封土を利用して後に埋納されたものと考えられる。

4、周溝をもつ。



第7図 第 58 A 号 遺 構

尾窪遺跡の中で、周溝を有するのは第58Ａ号遺構のみである。この周溝内からは土師器坏、瓦器、五輪塔残欠が出土している。特に土師器坏の中には周溝の底に密着して出土しているものもあること、周溝の底には砂状の土が堆積していたこと、周溝の底の各部のレベルがほぼ同一であることなどから、周溝としての機能を十二分に備えていたことは疑いがない。この周溝は、第58Ａ号遺構の範囲を設定することと封土を築く土の確保などを目的として造られたものと考えられる。なお、周溝外から周溝内に至る架橋等の施設は、確認できなかった。

５、土師器坏と瓦器の出土

封土の比較的浅い部分および周溝内から多量の土師質の坏が出土した。特に、封土西側部分からは集中的に出土しているが、これらの坏は第44号墓・第54号墓などの土壙から出土している燈明皿と同じタイプのものである。坏の中には作りが雑なために孔があいたものもあって、非実用的な供献用のものと考えられる。また、封土内から瓦器の壺が、周溝内から瓦器の皿が出土している。

６、五輪塔の出土

封土内、周溝内から五輪塔残欠が多数出土した。出土したのは空・風輪部13、火輪部４、水輪部５、地輪部４、部位不明１であり、そのことごとくが小型で梵字・紀年名などをもたないものである。これらの五輪塔は、当初は封土の頂部に立っていたものが崩壊して周溝内へ転落した状況を示していた。五輪塔残欠は周溝の東側・西側に集中して出土している。一方、周溝の北側・南側には出土していないが、これは第51号墓、第58号墓などの築造時に除去されたものと考えられる。

７、炭化物の検出

封土を除いた平面の南東部コーナーに近い部分から炭化物を検出した。炭化物は、80×80㎝の範囲で厚さ１～２㎝ほど堆積している。しかし、炭化物の下の土は火熱による変化が生じておらず、炭化物がおそらくは１回の燃焼結果の産物であることを物語っている。

８、封土上の石碑

封土の頂部には、62×21.5×9㎝の不整形の凝灰岩の板石が立てられていた。板石の表面にはノミによる加工の痕がみられ、全体の半分以上が封土中に埋もれていた。ところで第58Ａ号遺構の封土は、本来は、周溝の内側の範囲にあったものであろうが、周溝の埋没後は、周溝外にも何度か土盛りがなされているようである。一方、封土の北半には大きく攪乱の跡がみえるが、この攪乱は土取りか何かの目的であろう。しかしこの作業は何かの理由により中断され、旧状に復されている。筆者は、凝灰岩の板石は、攪乱が旧状に復された際に立てられたものであり、第58Ａ号遺構とは直接に関係のない後世の追補と考えている。したがって、この板石は、かなり時代が下った時期の供養碑といえる。

９、北宋銭の出土

封土の中から五輪塔の地輪部がふたつ並んで出ているが、その近くから北宋銭１枚が発見された。銭種は熙寧元宝と読め、かなり磨滅はしているものの保存は良い。

以上のべてきたように、第58A号遺構は他にみられない多くの特徴を備えた遺構である。そして調査の諸結果を総合するとき、祭祀的な色彩の濃い遺構であることが容易に推測される。つまり、第58A号遺構は実際に遺骸・遺骨を埋葬する「埋め墓」ではなく、礼拝の対象あるいは葬送儀礼の場＝「詣り墓」としての機能をもった遺構ということができる。第58A号遺構から検出された多くの供献用の土師質坏や小型で紀年銘のない供養塔的な五輪塔の存在などは、第58A号遺構が「詣り墓」としての性格をもつことを如実に反映しており、さらに位置的なことも考慮するとき、第58A号遺構は、尾窪遺跡全体の「詣り墓」としてとらえることができるのである。[注11]

ところで、第58A号遺構のごとき類例をあげるならば、横浜市富岡町修法壇遺跡[注12]がある。前者は14×16m、高さ3mの土壇中に敷石遺構をもち、付近から熙寧元宝・かわらけの出土をみたといわれ、後者は5.6×7.5m、高さ1mの土壇で周溝をもち、五輪塔1基が出土したという。いずれも第58A号遺構に共通する点があるが、第58A号遺構を修法壇跡とするには、なお検討を要する。（石田　彰紀）

注1　第58B号墓と第64B号墓の場合はわずかに切合い関係がみられる例である。

注2　たとえば、琵琶塚があげられる。

注3　第61号墓土壙内の土師質坏は、いずれも割れた状態で出土した。

注4　方形封土が諸々の外的影響をうけて、円形封土となったものもあると考えられる。

注5　長野県考古学会「海戸・安源寺」長野県考古学研究報告書2昭和42年3日

注6　近藤「正松江・檜山古墓群」島根県文化財調査報告書3昭和46年3月

注7　陣べら遺跡群発掘調査団「陣べら遺跡群」昭和46年3月

注8　松野茂他「熊本県宇土市緑川の中世時代早期の遺跡出土の頭骨について」熊本医学会誌44—10　昭和45年10月

注9　しかしながら、第41B号墓のように北頭位と考えられるような人骨の出土状態を示しているものもある。

注10　遺骨が櫃に納められて、土壙の中に入れられたことは、土壙内の遺骨が南東部にうずたかく積っていたことから十二分に予想されることである。

注11　ここで詣り墓と称したのは、いわゆる両墓制にいうそれではなく、単に礼拝の対象としての施設と考えていただきたい。

注12　佐野大和「横浜市金沢区富岡町における修法壇遺跡の調査」横浜市文化財調査報告書4昭和42年3月

注13　横山純夫・近藤正「松江・松本修法壇跡」島根県埋蔵文化財調査報告書2昭和46年3月

第3章　遺　　物

1　五　輪　塔

五輪塔は、第58A号遺構にそのほとんどが集中しているが、五輪塔として完全に揃った形で出土しているものはない。出土したのは空・風輪部16、火輪部5、水輪部5、地輪部5、部位不明2であって、それぞれ計測値および特徴などは別表に示した。

図版7にみえる第1号五輪塔・第2号五輪塔は、第58A号遺構から出土したものを組み立てることによって推定復原したもので、これが尾窪五輪塔の基本形となる。尾窪五輪塔はすべて加工しやすい凝灰岩によって造られているが、全体的に小型であることに特色がある。すなわち、第1号五輪塔は全高66.3cm、最大幅30.2cm、第2号五輪塔は全高51.2cm、最大幅30.9cmであって、両者の高さの差はほとんど地輪の高さの差である。地態的には、宝珠形の空・風輪部は整美であり、やや肉薄の火輪部は球形のものではなく下膨れの円筒形を呈しており、地輪部は肉薄、肉厚の二種がある。

以上のことから、尾窪五輪塔が鎌倉時代～室町時代のものであることが推定される。そして、尾窪五輪塔のごとき下膨れ五輪塔と称されるものは、五輪塔の中でも古式を示すものといわれ、注目に値する。[注1]

第7表　空風輪部計測表

	全長	空輪部長	空輪部径	風輪部長	風輪部径	くびれ部径	抉部長	抉部幅	出土地点	備　　考
1	24.7	12.5	15.5	7.5	14.1	9.1	4.7	6.4	第58A号遺構周溝内東側	宝珠形を呈し，よく研磨されている。
2	24.7	11.6	16.5	8.5	16.7	11.9	5.6	7.6	〃	宝珠形を呈し，一部ノミ痕を残す。
3	26.8?	14.1?	14.5	7.6	14.1	11.8	5.1	8.1	〃	たて長の感じがつよく，作りは荒い。
4	25.1	12.4	17.9	7.6	17.7	13.5	5.1	8.0	〃	宝珠形を呈し，作り，研磨ともに良い。
5	21.7	9.5	14.0	7.9	14.1	11.5	4.3	7.8	〃	稜線がはっきりしている空輪部の平面形は隅丸方形を呈す
6	25.1	13.3	16.4	7.7	17.1	11.2	4.1	8.1	第58A号遺構封土頂部	宝珠形を呈し研磨は良好
7	30.1	15.0	17.1	8.9	16.2	12.2	6.2	8.5	〃	宝珠形，研磨はやや荒い。
8	24.7?	13.6	16.5	8.7	15.5	11.0	2.4?	6.9	〃	抉の底部を欠く。研磨はよい。
9	28.4	15.0	16.4	7.6	16.1	10.8	5.8	7.4	第58A号遺構周溝内西側	作りはやや荒い。
10	25.4?	12.2?	14.7	7.2	14.9	10.8	6.0	7.1	〃	稜線がはっきりしている。
11	26.1	15.6?	15.6?	8.7	15.2?	11.9	1.8?	6.2	〃	残欠，研磨は良好
12	23.3	10.3	14.2	9.1	13.3	10.5	3.9	6.0	第58A号遺構封土裾西側	稜線がはっきりしている。No 5に似る
13	28.1	14.7	16.4	8.4	15.4	11.8	5.2	7.3	第58A号遺構周溝内南西側	宝珠形を呈し，研磨は良好である。
14	27.8	12.8	17.3	8.2	15.8	12.9	6.8	7.0	第56号墓の土坑の南側肩	稜線がはっきりしており角ばった感じ。
15	?	15.0	16.0	7.5	15.0	13.3	?	?	第5A号墓封土内	残欠
16	?	15.0	18.4	?	?	11.0	?	?	第41C号墓土坑内	残欠，No14に似る。

第8表 火輪部計測表

	全高	最大値	抉入部径	抉入部深	出土地点
1	15.4	30.9	7.0	5.9	第58A号周溝内東側
2	14.4	30.2	12.0	6.5	〃
3	12.4	28.0	?	4.2	〃
4	18.8	30.5	7.3	6.6	第58A号周溝内北側
5	11.4	30.5	9.2	6.0	第58A号周溝内西側

第9表 水輪計測表

	全高	最大径	上部径	下部径	備考
1	13.0	21.3	16.8	21.3	上部がややくぼむ
2	15.8	24.6	15.3	21.6	上部が平垣でなくやや傾斜をもつ
3	14.7	23.6	18.8	20.3	上部がややくぼむ
4	13.9	21.4	16.7	21.4	研磨が荒くノミ痕が残る
5	11.5	20.0	16.9	18.5	下部に人為的なくぼみをもつ

第10表 地輪計測表

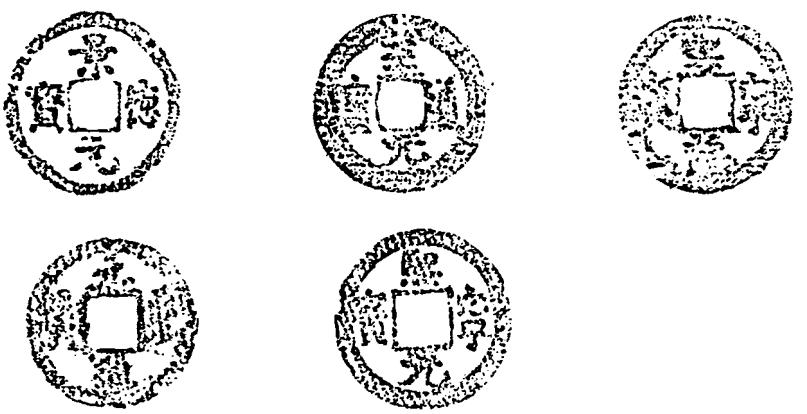
	最大幅	厚さ	備考
1	30.0	15.8	
2	34.5	10.2	下部にノミ痕が残る
3	30.0	10.0	研磨良好
4	30.6	12.3	
5	29.0	?	残欠 第62号封土内出土

ところで、尾窪遺跡出土の五輪塔は、いずれも梵字・紀年銘などを刻んでいない無銘のものばかりであり、また別表にみるごとく、各部の寸法にほとんど差のないいわば一種の規格品といえるものである。これらの事実と第58A号遺構[注2]が墳墓ではないことを考え合せるならば、尾窪五輪塔が墓標としてではなく、追善供養塔として立てられたものであることが判るであろう。[注3]

Ⅱ 銭　　貨

尾窪遺跡では、銭貨は、第20号墓封土内より1枚、第44号墓土壙内より15枚、第58A号遺構封土内より1枚と合計17枚が発見された。第20号墓封土内――実際には墳墓ではなく、単なる土の盛り上りであった――から出土した銭貨は北宋銭で、銭種は景徳元宝である。

第44号墓のものは、土壙内南東のすみから15枚の銭貨が紐通しにされた状態で発見された。これらは錆の付着と使用による磨滅のためにすべての銭種を知ることはできないが、北宋銭と考えられる。銭種の判明したのは4種5枚で、その内訳は至道元宝1、皇宋通宝2、熙寧元宝



第8図　第44号墓出土の銭貨

1、元豊通宝1であった。

第58A号遺構の封土内から出土した銭貨もやはり北宋銭で、銭種は熙寧元宝であった。

以上の銭貨はいずれも磨滅度が高く、十二分に通貨としての機能を果したのちに、報宝を目的に埋納されたものと考えられる。ところで銭種の判った銭貨の中で鋳造の上限を示すのは至道元宝（995～997年）、下限を示すのは元豊通宝（1078～1085年）となっている。銭種不明の銭貨もあり、速断は慎しまねばならないが、輸入銭貨のうちもっとも一般的な洪武通宝や永楽通宝の出土をみなかったのは注目すべきであろう。これからすれば、少なくとも第44号墓の築造時期については、元豊通宝から洪武通宝・永楽通宝の間と考えられる。[注4] つまり、北宋銭の輸入時期と使用期間を考慮に入れたとしても、第44号墓の築造時期は鎌倉時代の中葉を前後する頃と考えてよい。

Ⅲ 灰 釉 陶 器

口縁部径10.3cm、全高2.4cm、高台径5.2cm、高台高0.5cmほどの大きさで、高台部・底部を除く内外面に灰釉がかかっている。器の内面底部には、ロクロ痕と重ね焼きによる釉薬の欠除がみられ、器表下部には糸クズ状の釉溜が付着している。器全体は箆によって美しく整形され、焼成も良好である。色調は、全体的につやのある灰白色を呈しており、灰釉陶器としては白磁とみまがうほどに上質のものである。また、器表底部に墨で線書きしてあるのを認めることができる。なお、製作時期については、鎌倉時代初期のものであろうとの大場磐雄博士（現国学院大学客員教授）のご教示を得た。[注5]

灰釉陶器は、第54号土壙の北西よりのすみから底より3cmほど浮き、土壙の内側に傾いた状態で発見された。このことは、他の土師質燈明皿の出土状態とともに、土器類が決して安置して副葬したものではなく、無雑作に投げ込まれたことを示している。

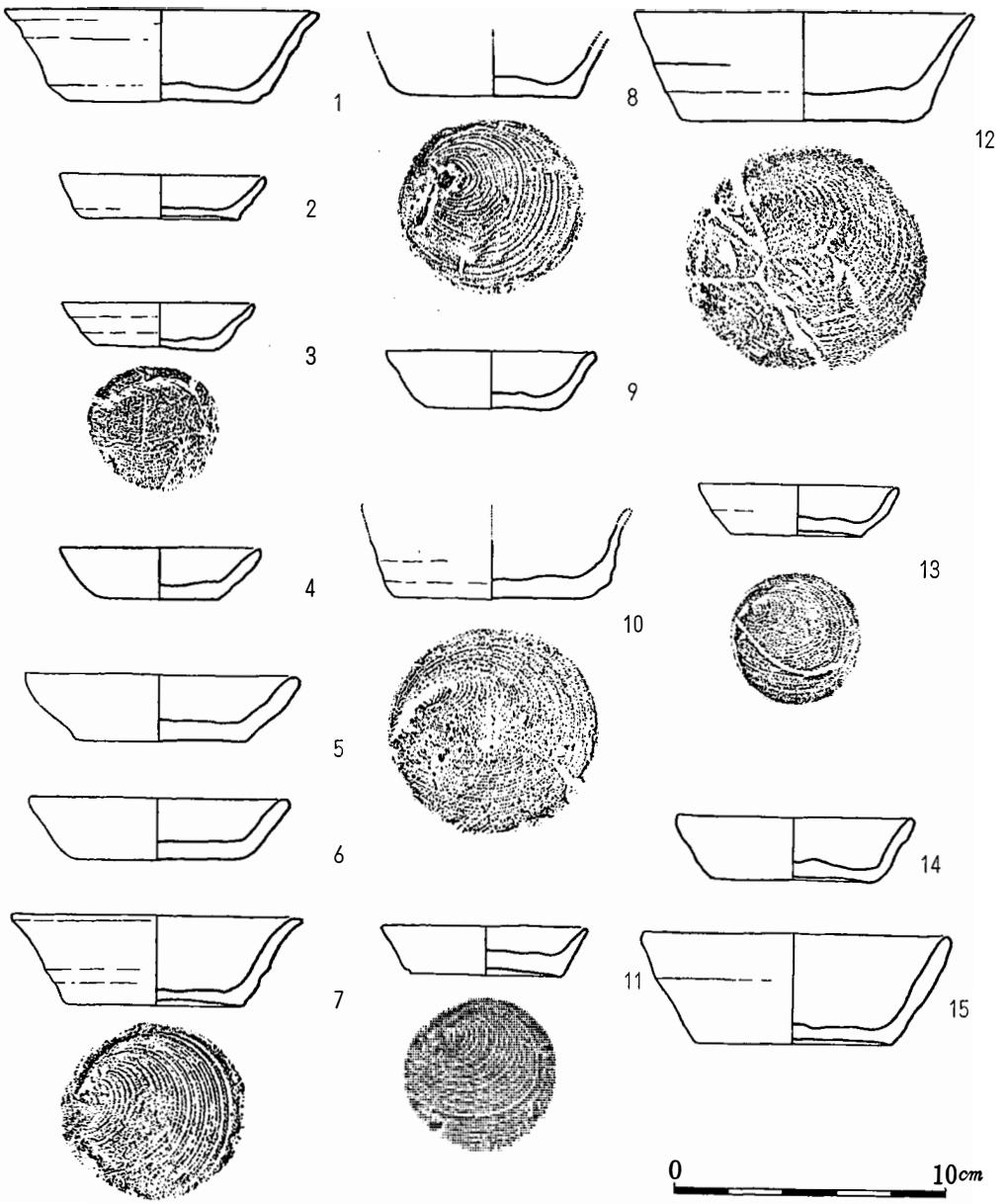
第9図 54号墓土壙出土の灰釉陶器実測図

Ⅳ 土 師 質 土 器

俗にかわらけと称される一群の土器であって、とくに第58A号遺構から集中的に出土している。数は、遺跡全体でおそらく100個体分をこえるものと考えられるが、そのほとんどは小さなかけらであり、器形、大きさの詳細が判るものはきわめて少なかった。

土師質土器は、確認し得るものはすべて坏であった。第58A号遺構出土のものの中には、孔を有するもの、変形して粗雑な造りのものが多い。一方、墳墓から出土しているものには燈明皿として用いられているもの蔵骨器に転用されているものなどがあった。このことは、前者が祭祀的な色彩の濃い供献用のものであるのに対し、後者は精製された実用的なものであることを示している。

尾窪遺跡出土の土師質土器は、ろくろを利用して製作しており、その形態的特徴によって5類に分類できた。そして、それぞれの特徴は次の通りである。



第10図 土師質土器実測図

A類

口縁部径10～12㎝・高さ3.5～4.0㎝ほどの大型のもので、1・7・10・12・8がこれに属する。いずれも糸切り底で、色調は全体的に明るい褐色を呈し、口縁部はわずかに外反する。器表には篦による整形の痕が顕著に残り、内面は刷毛による横なでで仕上げられている。

A′類

A類の小型のもので3と11がこれに相当する。口縁部径7.2～7.6㎝、高さ1.6～1.8㎝ほどのこれら坏は、第62号墓の火葬骨を納めていたものである。製作手法・特徴はA類と同様であるが、3は底部を糸切り後、刷毛で調整している。

B類

口縁部径7.5～10.4㎝・高さ1.8～2.5㎝のもので4・5・6・9がこれに属する。このタイプのものは総じて肉厚であり、器の内外面は刷毛による横なで調整を加えられ、色調は全面暗褐色を呈している。底はいずれも糸切り底と考えられる。

C類

口縁部径7.3～8.7㎝の小型のもので、2・13・14がこれに属する。いずれも糸切り底で、口縁部はわずかに内湾する。色調は褐色あるいは赤褐色で、底部を除く内外面は刷毛で入念に仕上されている。なお、第54号土壙出土の13・14は口縁部にススの付着がみられ、燈明皿として用いられたことが判る。

第11表 土師質土器の形態分類表

土器の分類	出土した遺構					
A類		44		58A		62
A類				58A		
B類				58A	61	
C類			54			62
C類	41B					

C′類

C類の大型のもので、第41B号土壙内出土の15がこれに相当する。仕上げはやや荒いが口縁部にススが付着しており、燈明皿として用いられたことが判る。

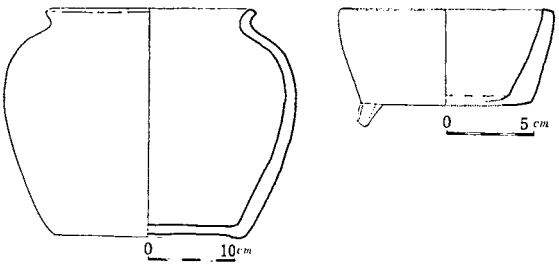
以上の5類の土器の共有関係については、第10表のとおりである。第62号墓のもつA類・C類の土器はいずれも同一の埋葬に付された蔵骨器であり、第44号墓、第54号墓、第62号墓の築造時期はほぼ一線に並び、C′類の土器を出した第41B号墓も同時期と考えてよい。B類の土器とA類・C類の土器の前後関係については不明であるが、全体的な製作時期は他の遺物との関連から中世、それも前半期のものと考えて差しつかえないと思われる。

Ⅴ 瓦 器

尾窪遺跡において発見された瓦器は2例が知られるが、いずれも第58A号遺構から出土している。一例は周溝内西部から出土した脚付きの深皿であり、他は封土内西部から出土した壺形のものである。

脚付きの深皿は、西側周溝内の比較的浅い部分から出土したもので、北寄りの部分から1

片、南寄りの部分から２片と計３片が発見された。それらを接着することによって知り得た器は第10図のごときもので、脚の位置からみて三脚付きの深皿であろうと推定される。この深皿は口縁部径12.4㎝、底部径9.8㎝、全高6.8㎝（脚部1.2㎝、坏部5.6㎝）を測り、全体的にいわゆるねずみ色＝濃灰色を呈する。整形は内面は刷毛、外面は篦によっており、瓦器としては高温で均質に焼かれた、きわめて上質なものである、



第11図 瓦器実測図

壺形の瓦器は西側封土内の10㎝ほど下から多数の破片となって発見されたもので、全高25.6㎝、口縁部径24.9㎝、頸部径23.4㎝、底部径25.6㎝を測る。壺としてはやや広口の、形の整っているものであるが、器面には格子状の叩き目をよく残し、内面、口縁部および底部は刷毛による横なで調整をうけている。色調は全体的に灰色で、口縁部から肩部にかけての一部は自然釉をあびて緑灰色、そして内面は明るい灰褐色を呈している。また、焼成は不均質で下半がやや軟弱である。この壺は納骨器として使用された可能性もあるが、不明瞭な出土状態からにわかには断じ難い。

Ⅵ　玉　　類

尾窪遺跡における特徴的な遺物としては玉類があげられる。玉類は、その形状、大きさそして出土状態などから、連絡されて数珠として用いられたものと考えられる。数珠玉を検出することができたのは第26Ａ号墓、第31号墓、第39号墓、第40号墓、第41Ａ号墓であって、そのうち第31号墓のものだけが水晶製、他はすべてガラス製であった。それぞれの数珠玉の特徴および出土状態については以下の通りである。

第26Ａ号墓

北頭位右側臥屈葬の状況を示す人骨の顎下、つまり両手首が位置していたと考えられる部分から、26個のガラス玉が一括して出土した。ガラス玉はその大半が白く風化しており、径4.2～4.8㎜、厚さ2.5～3.0㎜、孔径1.2㎜ほどの小さなものである。ガラス玉の中には連結した状態そのままに付着したものもあり、また玉の大きさから考えても第26Ａ号墓の被葬者が所持していた数珠は総ガラス製であったかも知れない。

第31号墓

西向き坐臥屈葬の状態を示す被葬者の膝関節の間から水晶製の数珠玉が出土した。第12図にみるように親玉２、小玉１、棗玉１がその内訳であるが、これらの水晶玉はそれぞれ大きさが異なり、使用された部分が違うことが判る。水晶玉はその数からみて、数珠の主要部に用いられたもので、その間の玉は木質のものであったろう。

第39号墓

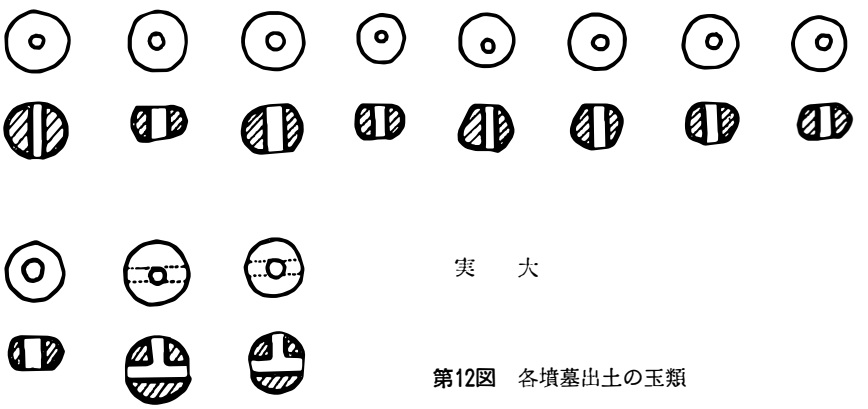
第31号墓とほぼ同じような状況で9個のガラス玉が出土したが、うち1個は残片である。大きさは径6～8㎜、厚さ4～6㎜、孔径1.5～2.5㎜ですべて小玉である。もとは透明であったと思われるが、今は表面が風化して白くなっている。また、2は一度割れたものを接着して使用している。

第40号墓

人骨の検出されなかった第40号墓より1個のガラス玉が出土した。径8㎜、厚さ7.5㎜、径1.8㎜のほぼ球形に近い形のもので材質は第39号墓と同じものである。

第41A号墓

第41A号墓は幼児を被葬者とする円形土壙墓であるが、2個のガラス製親玉が出土した。1は径8.5㎜、他は径7.5㎜の球形のもので、いずれも風化がひどく白く変色している。小玉は出土しなかったが、木質のものであったかも知れない。



第12図　各墳墓出土の玉類

Ⅶ　鉄　　釘

土壙内からの出土遺物の少ない尾窪遺跡における、もっとも一般的な遺物として鉄釘があげられる。鉄釘は23基から63本が検出されたが、その多くは錆がひどく、旧形を知り得るものはきわめて少なかった。

鉄釘は、すべて、断面が四角形を呈する角釘であって、頭の部分は特に調整されてはいない。ところで、長さによって鉄釘を分類するとき、4種類に大別できるようである。

Ⅰ類　長さが7㎝以上の大型のもので、約2寸5分見当のものである。

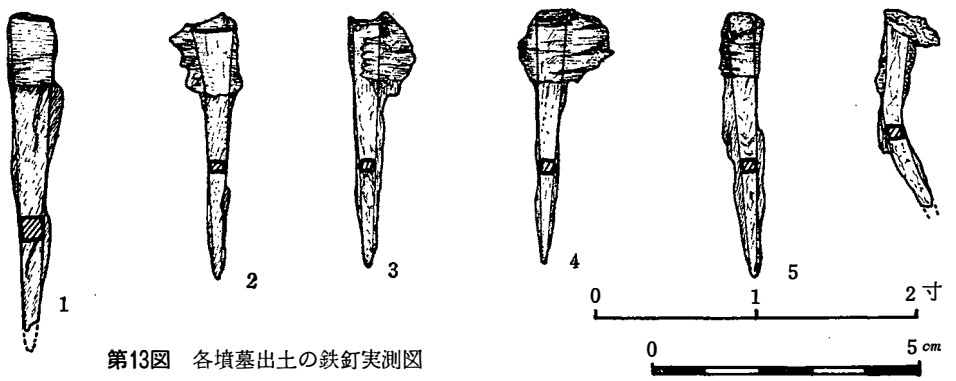
Ⅱ類　Ⅰ類に準じるもので長さ6㎝前後、2寸釘と考えられる。

Ⅲ類　長さ4.5㎝前後の中型のもので、1寸5分のものと考えられる。

Ⅳ類　長さ3㎝前後の小型の釘で、1寸釘と考えられる。

以上のうち、もっとも多いのはⅢ類のものでⅠ類、Ⅳ類のものは少ない。鉄釘には錆とともに木質が付着しており、それによって、棺に使用した板の厚さを知ることができる。すなわち、棺材には厚いものと薄いものとがあって、前者は1.3㎝前後のもので5分板、後者は0.8㎝前後の3分と考えられる。

さて、第A表は鉄釘を出土した墳墓と釘の数を示したものであるが、鉄釘の出土は方形土壙に限られ、円形土壙には皆無である。そして、第4群の2、3の例を除いて、ほとんどは1



第13図　各墳墓出土の鉄釘実測図

本、多い場合でも5本しか鉄釘を出していない。円形土壙から鉄釘の出土をみないのは、棺が座棺＝桶[注7]ということから納得できるとしても、寝棺の場合[注8]はどうなるのであろうか。土壙内から出土した鉄釘の数から、棺の製作に要した釘の絶対数を知ることはできないが、出土し鉄た釘の多い第70号墓、第77号墓、第79号墓の場合は別に考慮するとして他の墳墓の棺は、鉄釘を使わない造りのものではなかったかと考えられる。たとえ竹釘を用いたものば、あるいは組み物であったかも知れない。そして、数の少ない釘は棺蓋の打ちつけに使用したものと考えられる。

ところで第9号墓出土の鉄釘は、上記4類のいずれにも入らない特殊なものである。長さ10.7㎝、太さ0.75㎝のこの鉄釘は合釘と称されるもので、釘の両端が尖っており、板と板と矧ぎ合せる場合に用いている。実際に、釘に付着した木質も木目の方向がわずかにずれている程度で、角釘と異なり板の矧ぎ合せ用の釘であることを示している。　（石田彰紀）

注

注　1、日野一郎「五輪塔」新版考古学講座7雄山閣　昭和45年12月
　　石田茂作編「塔」日本の美術77　至文堂　昭和47年10月

注　2、たとえば、地輪部・火輪部は一辺の長さが30㎝前後、つまり約一尺である。

注　3、坂詰秀一編「中世の石塔と葬制」シンポジウム仏教考古学序説　雄山閣　昭和46年11月
　　内藤政恒「古代・中世の墓制」新版考古学講座6　雄山閣　昭和45年8月

注　4、同様の例は長野県中野市安源寺遺跡にみえる。

注　5　大場磐雄教授の教示によれば、長野県平出遺跡出土のものを典型とし、平安中期から鎌倉末にかけて作られた。原産地は美濃および近江などで、九州・中国・四国等に出土例がなく、現在知られている北限は宮城県多賀城、西限と南限は京都市大秦広隆寺、和歌山県新宮市飛鳥神社境内、同県熊野の那智遺跡などに出土例があるといわれる。

注　6、明らかに安置したと考えられるものは第44号墓の例のみである。

注　7　桶は普通、わずかに内彎する板を竹などによって連接して製作されるため釘を使用しない。また蓋をするにも縄掛けによるのが慣例的である。

注　8　寝棺を作るのに何本の釘が必要とされるかは不明であるが、最低12本以上は必要であろう。第70号墓、第77号墓、第79号墓などの場合は錆び朽ちてしまったかもしれない釘を考慮に入れると、棺が鉄釘によって製作された可能性もある。

Ⅷ　その他の遺物

尾窪墳墓の調査中に墳墓以前の若干の考古学的資料が得られた。ここではそれらを紹介したい。（第14図参照）

1、2は57号墓、3、6～9、11は39号墓、5は77号墓、12、10は11号墓の盛土から出土し、4は表採資料である。

石器（1、2）

1は淡黄褐色を呈する頁岩を用いたスクレーパーである。石質の関係であろうかパティナはかなり進んでいる。A面の一部に主要剝離面としての痕跡が残され、この剝離が行なわれたのち両面に亘る二次加工が施されたことをものがたる。この主要剝離面に対する三度の大きな剝離は、刃部形成を目的とした剝離ではなく、むしろフレーク取得を目的としたものとみることができる。このことからフレークを剝離した石核とみることもできる。しかし、右側辺部における二度の剝離は明らかに刃部形成のためのものである。さらにB面においては、全体の半分近くが自然面として残されてはいるものの、大きく三度の剝離と、数度のステップ状の小調整剝離とを加え刃部形成をなしている。ともに形成された刃部には細かな使用痕が認められ、A面における大きな剝離は、機能をうながすための整形剝離と見ることができよう。2は素材に断面が三角形を呈するサヌカイトの縦長剝片を用いている。縦長剝片製作時における顕著な打剝部調整剝離は見られないがパティナはかなり進んでいる。またこのサヌカイトは岩質、色調、リング、フイッシャーの表われ方などから佐賀県多久地方一連[注1]のサヌカイトとの異質性がとわれる。二次加工は主要剝離面にその主なるものが施され、一般に端正なる剝離技術は見られない。両面とも一度及び二度の大きな剝離を基調として、数度の小剝離を加えて刃部を形成している。

土器（3～12）

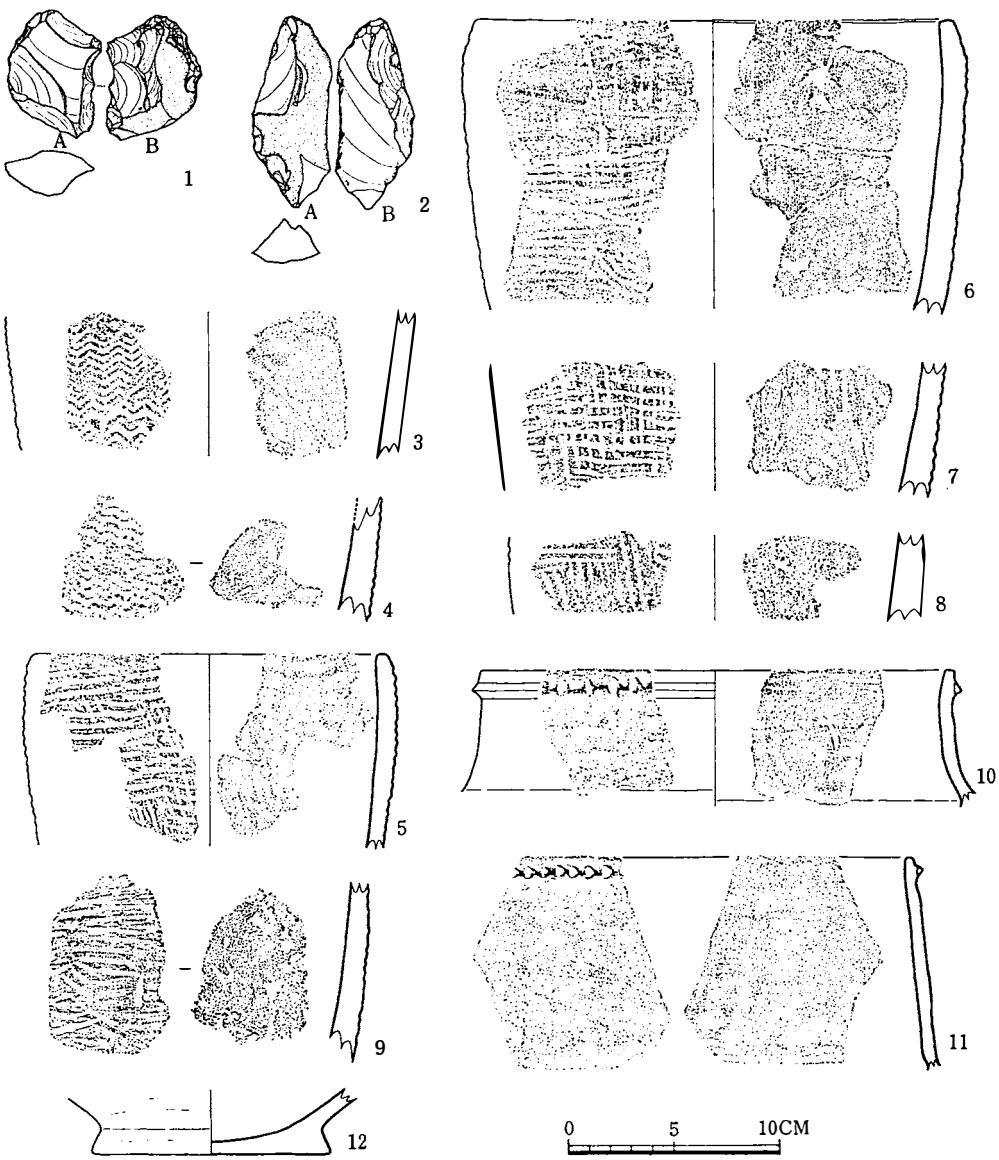
3、4は山形押型文土器の胴部破片である。器壁の厚さは3は1.0㎝、4は1.3㎝と比較的厚手で、いずれの胎土にも少量の砂粒が含まれ、焼成は充分ではなく、色調は暗黄褐色を呈している。外面は原体を横にころがして施文し、内面は無文であるがなめらかである。施文原体の大きさを想定することは小破片のため難しい。

5～9は条痕文土器で5、6は口縁部より胴部まで、7～9は胴部の破片である。厚さは0.9～1.5㎝を測り比較的厚手の土器である。胎土に少量の砂粒を含むこと、焼成が充分でないこと、暗黄褐色の色調を呈することなどは押型文土器に酷似している。5は口縁部がいくぶん内彎しており口径は16.5㎝、それより3.0㎝下にある最大径は17.4㎝を測る。横走と斜走の二重の施文により格子目状の文様を形成している。6の口縁部もいくぶん内彎しており口径22.4㎝、口縁部より2.0㎝下にある最大径は23.8㎝を測る。縦にひっかいた後、横にひっかいたらしく、一部に縦走する条痕文が認められる。5、6ともに口唇部と内面は施文がなく、内面はなめらかである。7、8は縦走する条痕文の上に横走する条痕文を重ねて文様としている。9は横走する条痕文を数度施文し、縦走する条痕文は認められない。これら条痕文は貝殻縁によ

ってひっかいて施文したとみられる。

10、11は刻目突帯文をもつ口縁部である。二点とも胴部以下を欠くが口縁部が内反し胴部で折れる器形を成している。10は口径22.3㎝で黒川式土器の伝統を残し、色調は黒色を呈している。口唇部は平らで、その1.0㎝下に刻目突帯があり、同じく6.0㎝下の屈折部にも刻目突帯があったものと推定される。11は10よりやや大きな直径をもつもので、器壁厚0.6㎝、色調は黄褐色である。口唇部は丸みをもち0.7㎝下に刻目突帯があり屈折する胴部にも同様な突帯をはり付けていたものと思われる。外面に煤が付着しているので煮沸に使用したものと考える。この二点は山ノ寺式に比定できよう。

12は胎土焼成ともやや良好であり、形態よりいわゆる御領式土器の底部と思われる。



第14図　その他の遺物実測図

ま と め

出土した遺物により、日当たりがよく湧水地をひかえたこの丘陵が幾度か生活の舞台とされたことが明らかになった。

遺物のうち二点の石器は先土器時代遺物としての可能性を充分に秘めたものである。土器では条痕文土器群が注目される。この土器は玉名郡菊水町西原遺跡や上益城郡御船町千無田遺跡(注2)の資料によれば円筒形平底を成すことが知られている。押型文土器や撚り糸文土器などと採集されることが多く、共存あるいは近接した時期に存在した可能性が強い。なお鹿児島県小山遺跡(注3)では塞ノ神式土器などと共伴出土している。このように円筒形条痕文土器は実体が明らかにされつつあるが、ここでは資料を呈示するにとどめたい。なおこの文は石器について江本が、土器とまとめを高木が担当した。　　（高木正文・江本直）

註　1　清水宗昭「石材からみた九州先土器時代の問題」速見考古第２・３号

註　2　緒方勉「熊本県上益城郡御船町千無田遺跡出土の縄文土器」九州考古学38、1970年

註　3　河口貞徳「塞ノ神式土器」鹿児島考古第６号、1972年

第4章　埋　　葬

坂　田　邦　洋

は　じ　め　に

尾窪墳墓群の調査は考古班の発掘のあとを人類班が引き継ぎ人骨の露出および取り上げを行なった。

80数基の墳墓群のうち、われわれは予定路線内に営なまれた64基について発掘を行なった。調査した64墓の墳基のうち60基から人骨を発掘できたが、いずれも保存状態が不良であり、発掘作業は予定よりも早く進行した。

60体の人骨は成人骨54体（男性23、女性16、不詳15）、幼・小児骨６体であった。60体のうち火葬人骨が２例あったが、他は土葬であった。

墳墓はすべて封土をもち、土葬の場合封土の下に円形または方形の土壙が掘られ右側臥屈葬、仰臥屈葬あるいは坐臥屈葬の姿勢で埋葬されていた。

封土の上または周辺には墓碑となるような墓標はまったくなかった。墳墓群のほぼ中央に位置する58Ａ号の性格については前章で述べられているように墳墓群の祭祀の場所ではなかったかと考えられる。

尾窪墳墓群に隣接して江戸時代以降現在に至るまでの墓地が営まれているので、遺跡付近は古い時代から現在に至るまで少しづつ場所を移しながら墓地として利用され続けてきたものとおもわれる。

当遺跡から60体の人骨が発掘されたが、いずれも一人づつ丁重に埋葬されており合葬された例はない。また墓域内に老若男女が入り混っている。したがって尾窪墳墓群はたとえば戦争のような大事件によって一挙に大量の死者を出した人々の墳墓ではなく、おそらく鎌倉から室町時代にかけて遺跡付近に生活を営んだ庶民の墓地ではなかったかとかんがえられる。

尾窪墳墓群の調査

１　墓地のひろがり

尾窪墳墓群の東端を南から北に走る農道は第11号墓付近で西に方向を転じ、墳墓の封土を幾つか断ちながら７号付近をとおって丘陵下の水田へ通じる。この農道は墳墓群が営まれたあとに作られたものである。農道の東側は江戸時代以降現在に至るまでの墓地になっている。江戸時代以降の墓地の中には石製の墓碑をもった墓だけでなく封土だけで墓標をもたない墓も幾つかあった。かつては封土の上に木製の墓標が造立されていたかもしれない。

われわれが今回調査した墳墓群は農道の西側に南北に細長く営まれた封土をもった中世の墳墓群である（図版１）。農道より東側の江戸時代以降の墓地は尾窪部落の人々によって現在も

供養が行なわれてきているが、中世墳墓群は藪の中に放置されたままであった。

九州縦貫道路は墳墓地をすっぽり覆うように南北に走るため80数基の墳墓群のうち調査を行なった64基が路線内には入ることになった。未調査の20数基の墳墓は路線予定地と農道の間に位置しており、第62号墓や第66号墓の付近つまり墳墓地の東南地区に多く残った。

墳墓は１個の土壙に必ず１個の封土が作られた（図版２）。封土の上あるいは付近には墓碑となるような墓標はなかったが、あるいは木製の墓碑が造立されていたかもしれない。封土の平面形は元来円形であったとおもわれるが、後世多少変形したものもある。封土は直径の最大が566㎝、最小が120㎝、高さの最高が117㎝、最低が13㎝であった。封土の大きさはその下に掘られた土壙の大きさに相関することがわかった。封土の大きな墳墓と小さな墳墓の間では出土人骨に年令または性別の特徴は認められかなった。調査を行なった64基の墳墓のうち、火葬骨の２例を除く他の62例はすべて封土の下に土壙が掘られていた。62例の土壙を円形と方形に分けることができる。方形は55例と多く、円形は僅か７例であった。埋葬にあたって性別または年令に関係なく土壙の形や埋葬場所が決められたようである。

埋葬された人骨を年令別に分類すれば60体の人骨のうち成人骨が54体で、幼・小児は僅か６体であった。人骨が腐敗してしまっていた４基の墳墓に幼・小児が埋葬されていたと仮定しても幼・小児骨の出土が少なすぎる。おそらく幼・小児を主とした墓域が今回調査した地域外にあったとしか考えられない。

土壙は重複した数例を除いて他は適当な間隔をおいて掘られていた。溝をもつ第58Ａ号の場合、周辺にめぐらされた溝をよく観察すると、土壙によって溝をたっており、58Ａ号は墳墓群が営まれるに過程において作られたことは明らかである。

２　土壙の大きさ　（表２－８）

調査した64基の墳墓はすべて封土をもっていたが、62基の土葬人骨は封土の下に土壙が掘られていた。

土壙の形は円形と方形に分けられる。両形とも上縁に比べて下縁が多少小さいので土壙の側壁はやや内傾していた（表２）

封土は元来円形であったとおもわれるが後世になって変形したものもあったので、直径の計測は当時の形をもっともとどめているとおもわれる地点を選んで行なった。高さは、封土が地表面と接する「北」の地点から頂上までとした。地表面の腐蝕土を浅く削って行くとそのうち土壙の切り込みの上面を見つけることができた。土壙の大きさはこの切り込みの上面において長さ、幅および深さを計測した。切り込みの面が見つかるまで地点によって多少は異なるが、現在の地表面からおよそ10―15㎝掘り下げなければならなかった（表３、４）。

円形または方形土壙の大きさの平均値を求めてみた（表５、６）。円形土壙の場合は７例のうち成人骨のみを出土した５例について求めた。方形土壙の場合は55例のうち成人骨を出土し

表2　土壙の形

	例　数
土壙のない墳墓	2
円形土壙	7
方形土壙	55

表3　円形土壙墓の大きさ　（C*m*）

番号	土壙の直径	土壙の深さ	封土の直径	封土の高さ
16	153	89	350	42
21	120	48	160	26
38	124	58	200	25
39	126	81	415	45
41A	125	62	143	27
54	153	91	408	70
57B	97	81		

表4　方形土壙墓の大きさ　（C*m*）

番号	土壙の長さ	土壙の幅	土壙の深さ	封土の直径	封土の高さ	番号	土壙の長さ	土壙の幅	土壙の深さ	封土の直径	封土の高さ
1	160	100	96	200	40	41B	112	83	53	—	—
2	215	155	118	290	62	41C	125	110	87	—	—
3	167	120	99	260	60	44	140	110	85	153	23
4	158	123	118	366	103	45	115	104	84	150	46
5B	160	108	63	320	71	46	100	78	53	156	44
5A	170	85	45	—	—	48	160	113	75	220	76
6	155	126	99	290	65	51	123	73	118	147	54
7	133	105	95	235	78	52	148	115	66	225	70
8	172	115	50	321	85	55B	117	72	53	—	—
9	185	130	96	225	43	56	138	148	98	362	51
10B	154	124	50	145	13	57A	138	88	68	300	41
11	153	124	78	345	62	58B	107	62	70	—	—
13	127	105	43	120	20	61	166	122	99	428	95
19	146	110	66	275	24	63	160	110	91	145	18
22	150	86	95	175	19	64B	112	96	67	445	67
23	173	122	116	255	34	66	148	103	85	157	27
24	155	126	79	143	18	70	220	163	145	458	90
25	152	108	91	262	40	71	198	158	148	397	68
26A	158	123	74	205	21	75	187	130	85	272	30
26B	112	75	77	—	—	76	162	118	94	410	117
27	145	128	130	277	45	77	240	180	133	566	115
29	115	105	130	170	28	78	176	96	83	375	40
30	150	80	38	156	13	79	167	126	106	372	33
31	228	191	116	565	—	80	140	104	50	200	20
32	130	107	93	297	56	81	102	73	57	115	12
34	132	104	62	210	21	82	92	80	66	150	20
37	122	120	57	310	45	83	118	110	129	185	26
40	100	88	59	188	30						

表5 成人骨を出土した方形土壙墓の大きさの平均値

	n	M	U²	Max.	Min.
1. 土壙の直径	5	135,20	268,63	153	120
2. 土壙の深さ	5	73.40	373,26	91	48
3. 封土の直径	5	306,60	14191,96	408	160
4. 封土の高さ	5	41.60	334,16	70	25
5. 2/1×100	5	53.74	100,40	64.29	40,00
6. 3/4×100	5	13.75	7.73	17.16	10.84

表6 方形土壙の大きさの平均値

		n	M	U²	Max.	Min.
成人	1. 土壙の高さ	47	155.89	960.38	240	100
	2. 土壙の幅	47	114.62	700.13	180	62
	3. 土壙の深さ	47	87.00.	821.32	148	38
	4. 封土の直径	43	272.28	12202.54	566	120
	5. 封土の高さ	42	48.24	791.30	117	13
	6. 2/1×100	47	73.82	111.75	98.36	50.00
	7. 3/1×100	47	56.57	330.15	113.04	25.33
	8. 5/4×100	42	17.83	53.44	36.73	8.33
幼・小児	1. 土壙の高さ	4	110.25	185.50	112	92
	2. 土壙の幅	4	90.25	253.45	110	75
	3. 土壙の深さ	4	74.25	96.83	87	66
	4. 土饅頭の直径	2	297.50		445	150
	5. 土饅頭の高さ	2	43.50		67	20
	6. 2/1×100	4	81.91	100.20	88.00	66.96
	7. 3/1×100	4	67.48	27.67	71.74	59.82
	8. 5/4×100	2	14.19		15.06	13.33

表7 成人骨を出土した円形土壙における相関度

	相関係数	有意性
土壙の直径と深さ	0.85	※
土壙の直径と封土の直径	0.64	
土壙の直径と封土子高さ	0.75	
土壙の深さと封土の高さ	0.84	※
土饅頭の高さと直径	0.84	※
封土の直径と土壙の深さ	0.94	※ ※

※ 危検率5％で有意
※※危検率1％で有意

た47例と、幼・小児骨を出土した4例について求めた。

円形土壙：封土は直径306.60㎝、高さ41.60㎝であった。直径に対する高さの示数は13.75となり、いわゆる土饅頭形をしていた。土壙は直径135.20㎝、深さ73.40㎝であった。

成人骨を出土した方形土壙：封土は直径272.28㎝、高さ48.24㎝であった。直径に対する高さの示数は7.83となり同じく土饅頭形をしていた。土壙は長さ115.89㎝、幅114.62㎝、深さ87.00㎝であった。長さに対する幅の示数は73.82となり平面形は長方形であった。

幼・小児骨を出土した方形土壙：封土は直径297.50㎝、高さ43.50㎝であった。直径に対する高さの示数は14.19であった。土壙は長さ110.25㎝、幅90.25㎝、深さ74.25㎝であった。長さに対する幅の示数は89.91となり前者と同じく長方形であった。

次いで、成人骨と幼・小児骨を出土した方形土壙について長さ、幅、深さそれに長幅示数について平均値の比較を行なった。有意性の判定にはF分布を用いて検定した。なお危険率を5％とした。

検定の結果、幅（$t_s=2.75<t_0$）、深さ（$t_s=1.97<t_0$）それに長幅示数（$t_s=1.54<t_0$）のあいだでは有意の差が認められないが、長さ（$t_s=5.58>t_0$）および長深示数（$t_s=2.92>t_0$）において両者に有意の差が認められた。

円形または方形土壙のそれぞれの計測項目間における相関度をみてみたい。（表7、8）

円形土壙では、土壙の直径と封土の直径および土壙の直径と封土の高さの間には相関を認められない。土壙の直径と深さ、土壙の深さと封土の高さそれに封土の高さと直径の間では5％の危険率において有意の相関があった。さらに封土の直径と土壙の深さでは1％の危険率において有意の相関があった。

幼・小児骨を出土した方形土壙では、土壙の長さと幅それに封土の直径と土壙の深さには相関がなかった。土壙の長さと深さでは5％の危険率において有意の相関があった。土壙の長さと封土の高さ、土壙の深さと封土の高さ，それに封土の直径と高さでは1％の危険率において有意の相関があった。成人骨を出土した方形土壙では、すべてに1％の危険率において有意の相関があった。

尾窪人骨の埋葬について

1　埋葬の姿勢　（表9、10）

尾窪墳墓群の人骨の埋葬は火葬または土葬であった。60体のうち火葬骨は第47号墓、第62号の墓（以下略して47号とか62号とする）の2体のみで他の58体は土葬されていた。尾窪人骨は成人骨54体、幼・小児骨6体であった。

土葬の人骨は坐臥屈葬、仰臥屈葬、右側臥屈葬の姿勢で埋葬されていた。右側臥屈葬が最も

表8 方形土壙における相関度

		相関係数	有意性
成人	土壙の長さと幅	0.84	※※
	土壙の長さと深さ	0.48	※※
	土壙の長さと封土の直径	0.68	※※
	土壙の長さと封土の高き	0.47	※※
	土壙の深さと封土高さ	0.38	※※
	封土の高さと直径	0.75	※※
	封土の直径と土壙の深き	0.42	※※
幼・小児	土壙の長さと幅	0.71	
	土壙の長さと深さ	0.82	※
	土壙の長さと封土の直径	1.00	※※
	土壙の長さと封土の高さ	1.00	※※
	土壙の深さと封土の高さ	1.00	※※
	封土の高さと直径	1.00	※※
	封土の直径と土壙の深さ	0.46	

※ 危検率5％で有意
※※危検率1％で有意

表9 埋葬姿勢と性別および年令

		成人			幼・小児
		男	女	不詳	
土葬	坐臥屈葬	3	3	0	0
	仰臥屈葬	1	1	0	0
	右側臥屈葬	14	11	3	1
	不詳	3	1	12	5
火葬				2	0

表10 埋葬姿勢と土壙の形

	円形土壙	方形土壙
坐臥屈葬	3	3
仰臥屈葬	0	2
右側臥屈葬	0	29
不詳	4	17

表11 土壙の形と性別および年令

	成人			幼・小児
	男	女	不詳	
円形土壙	2	2	1	2
方形土壙	21	14	14	4

表12 成人骨を出土した方形土壙の方向の一覧表

番号	土壙の方位
1	N—12—E
2	N—22—E
3	N—11—E
4	N—13—E
5A	N—21—E
5B	N—10—E
6	N—3—E
8	N—13—E
10B	N—10—E
11	N—19—E
19	N—21—E
23	N—3—E
24	N—4—E
26A	N—2—E
27	N—15—E
32	N—10—E
44	N—14—E
48	N—8—E
51	N—13—E
57A	N—18—E
63	N—12—E
64B	N—6—E
66	N—18—E
70	N—10—E
76	N—13—E
77	N—11—E
79	N—28—E
83	N—7—E

表13 埋葬姿勢と方向

	西向き	北向き	北頭位	南頭位	西頭位
坐臥屈葬	5	1			
仰臥屈葬			2		
右側臥屈葬			27	1	1

多く、坐臥および仰臥屈葬は少なかった。なお、埋葬姿勢は性別とは関係がないようにおもわれる。

円形土壙から発見された7体のうち埋葬姿勢のはっきりしない4体を除く3体は、西向きの坐臥屈葬であった。他の4体も坐臥屈葬ではなかったかとおもわれる。坐臥屈葬の遺体を入れる容器として座棺がかんがえられるので、円形土壙には坐臥屈葬位で桶に入れた遺体を埋葬したのではないだろうか。

方形土壙から発見された51体の人骨の埋葬姿勢は右側臥屈葬が最も多く、坐臥および仰臥屈葬は少なかった。29体の右側臥屈葬のうち27体は北頭位であった。右側臥屈葬または仰臥屈葬の遺体を入れる容器は寝棺でなければならない。方形土壙は棺を埋葬するには絶好の形であったろうとおもわれる。坐臥屈葬の人骨が方形土壙からも発見されたが、土壙が大型であれば桶であっても埋葬そのものにはさしつかえなかったのではないだろうか。

2　人骨の出土状況

火葬人骨（図版4）

47号人骨直径110㎝、高さ62㎝の封土の下に長さ55㎝、幅54㎝それに深さ23㎝の小さな方形の穴を掘り、その中から1個体分の火葬人骨が出土した。火葬骨を直接穴の中に埋葬したものかあるいは容器に入れて埋葬したものかどうかわからない。

62号人骨直径590㎝、高さ69㎝の封土が作られ、封土の最下面（当時の地表面）には火葬された人骨が散乱していた。封土の中に埋められていた土師質の皿の中には下層の人骨と同一個体とおもわれる火葬人骨が納められていた。おそらく封土下部の火葬人骨の一部を皿に納めたものとおもわれる。

62号人骨には遺体を火葬する際にできたとおもわれる木炭が多量に混っていたので、それらの木炭を採集し放射性炭素の測定を行なったところ、B.P.484±43年（GAK—4157）であった。これをたしからしいとかんがえられているC^{14}の半減期（5730±40）によって計算すればB.P.494±44年となる。したがって、本試料はA.D.1456±44年である。西暦1456年は康正2年にあたり室町幕府中期、足利義政のころである。

土葬人骨（図版2、3、5—10）

58体の土葬人骨は、坐臥屈葬6体、仰臥屈葬2体それに右側臥屈葬29体であった。そのほか保存が悪くて埋葬姿勢のはっきりしない人骨が21体あった。埋葬姿勢不詳の21体の人骨は前記3姿勢のいずれかとおもわれる。

1号人骨（図版2）、北頭位で右側臥屈葬の男性人骨、頭蓋骨は右側頭部が床面についていた。上肢は左・右ほぼそろえ肘関節を直角にまげて前頭部につけていた。下肢は膝関節を強くまげていた。

83号人骨（図版2）、北頭位で右側臥屈葬の女性人骨、頭蓋骨は右側頭部が床面についていた。上肢は肘関節をほぼ直角にまげ前腕を前に出していた。下肢は膝関節を強くまげ頭部に近

づけているが、左右が少し開いていた。

11号人骨（図版２）北頭位で右側臥屈葬の男性人骨、頭蓋骨は右側頭部が床面についていた。上肢は左右とも上腕骨のみであるが、前下方に伸ばしているので、おそらく前腕骨は１号人骨の頭蓋骨付近にもっていったものとおもわれる。下肢は膝関節を強くまげて左右ともほぼ重なり合っていた。

６号人骨（図版２）　北頭位で右側臥屈葬の男性人骨、頭蓋骨は右側頭部が床面についていた。上肢は肘関節を強くまげ下顎付近に手があった。下肢は膝関節を強くまげさらに前上方に引きあげていた。

66号人骨（図版３）　北頭位で右側臥屈葬の女性人骨、頭蓋骨の右側頭部を床につけていた。上肢は肘関節を強くまげ下顎付近に手があった。下肢は膝関節を強くまげ前上方に引きあげていた。

39号人骨（図版３）　西向きで坐臥屈葬の男性人骨。元来下肢は膝関節でまげ、立てていたものとおもわれるが、そのうちに腐敗して前方に倒れたものとおもわれる。そのとき頭蓋骨も股間部に顔面を下にして落ちたものとおもわれる。

61号人骨（図版３）　西向きで坐臥屈葬位の女性人骨。元来下肢は膝関節でまげて立てていたものとおもわれる。頭蓋骨および上肢は腐敗して股間部に落ち込んだものとおもわれる。

19号人骨（図版３）　北頭位で仰臥屈葬の男性人骨。頭蓋骨は右側頭部を下に倒れていた。下肢は膝関節を上方に強くまげ大腿骨と下腿骨とがほぼ重なり合っていた。

なお、人骨の出土状況を図版２―10に示した。

3　埋葬の方法　（表11）

62基の土葬のうち22基の土壙の中から鉄釘が発見されたので、これらの土壙の人骨は容器に入れて埋葬したものと思われる。残り40基の土壙からは鉄釘が発見されなかった。それは鉄釘が腐蝕したともかんがえられる。また桶には鉄釘は普通使用しないし、棺の場合でも鉄釘を使用しなかったものもあったかもしれない。さらに発掘中しばしば土壙内に大きな空洞がみられたので、おそらく土葬人骨は容器に入れて埋葬したものとおもわれる（図４）。

円形土壙からは坐臥屈葬人骨が、方形土壙からは右側臥屈葬人骨が最も多く出土したので、坐臥屈葬人骨は桶に、右側臥屈葬および仰臥屈葬は棺に入れていたものと思われる。そして円形土壙には桶を、棺は方形土壙に埋葬したのではないだろうか。もちろん方形土壙からも坐臥屈葬人骨が出土しているので、桶は方形土壙にも埋葬されたらしい。

4　埋葬の方向　（表12．13）

尾窪墳墓群の場合、全般に人骨の保存が不良のため、人骨そのものから埋葬の方向を測ることはできなかった。

円形土壙の７基のうち坐臥屈葬の３体の方向は、西向きが２体で、北向きが１体であった。残り４体は埋葬姿勢を確認できなかった。

方形土壙は55例であった。うち長軸が南北にくるもの53例、東西にくるもの２例であった。長軸を南北にとる53例の土壙のうち埋葬姿勢が確認できた人骨は30例であった。これらの人骨は北頭位の右側臥屈葬27例、北頭位の仰臥屈葬２例、それに南頭位の右側臥屈葬１例であった。つまり北頭位が29例で、南頭位は１例であった。

長軸を東西にとる２例の土壙は、西頭位が１例で、残り１体（58Ｂ号）は東側から頭蓋骨が発見されたので、おそらく東頭位ではなかったかとおもわれる。

長軸を南北にとる方形土壙のうち、北頭位の右側臥屈葬（27例）と仰臥屈葬（２例）を出土した土壙の長軸の方向は、算術平均によれば Ｎ－12.2° －Ｅ であった。もし人骨の保存がよくて人骨をもとに埋葬の方向を出すことができたとしたら、土壙とほぼ同じ方向を示したものとおもわれる（表12）。

埋葬姿勢が確認できた37基の人骨の方向についてみてみたい。

坐臥屈葬と仰臥屈葬や右側臥屈葬の場合では姿勢の方向といっても多少意味が異なる。坐臥屈葬の場合は屍体の向いた方向を、仰臥屈葬または右側臥屈葬の場合は頭の位置が問題である。

坐臥屈葬は６例のうち西向きが５例で、残り１例は北向きであった。仰臥屈葬は２例とも北頭位であった。右側臥屈葬は北頭位が最も多く27例、南頭位および西頭位が各１例であった。

以上のことから、尾窪墳墓群では、円形土壙には西向きの坐臥屈葬を桶に入れて埋葬し、方形土壙には北向きの右側臥屈葬を棺に入れて埋葬する習慣があったようにおもわれる。

要　　約

尾窪墳墓群は80数基の墳墓から構成されているが、そのうちの64基の墳墓について調査を行なった。墳墓の特徴および出土人骨については前項で述べたとおりである。

同一場所に埋葬を繰り返せば土壙（封土）が重なり合う場合が多いが、尾窪墳墓群ではこうした例が非常に少ないことが注目される。尾窪墳墓群の墓域は南北に帯状に細長いので、おそらく順次外縁部へ墓域を広げて行ったものとおもわれる。

埋葬には火葬と土葬が用いられ、封土の外見では両者を区別することはできなかった。

火葬骨は僅か２例であったが、他の土葬骨の土壙と重なることもなく、墳墓群ができて行く過程において埋葬されたものとかんがえられる。

土葬骨は封土の下に掘られた方形または円形の土壙の中に埋葬されていた。方形土壙に比べて円形土壙が少ないこともあって、土壙の形による墳墓群の形成あるいは性別・年令の違いは認められなかった。土壙の形の違いはおそらく屍体を入れた容器の形と強い関係があったものとおもわれる。

埋葬姿勢は右側臥屈葬が最も多く、坐臥屈葬および仰臥屈葬は少なかった。右側臥屈葬または仰臥屈葬の屍体を容器に入れた場合、その容器は寝棺であったとおもわれる。また坐臥屈葬の屍体の場合は座棺であったとおもわれる。尾窪墳墓群の一般的な習慣として、坐臥屈葬の屍体は桶に入れ方形あるいは円形土壙に西向きで埋葬し、右側臥屈葬および仰臥屈葬の屍体は棺に入れ方形土壙に北頭位で埋葬していた。

尾窪墳墓群は土饅頭形の封土が印象的であったが、封土の大きさは土壙の大きさと相関があった。封土および土壙の大きさは各墳墓とも大差がないので、たとえ大・小があっても作業労働力的には問題にならない。したがって封土および土壙の大きさの大・小は、古墳の墳丘に考えられているように主権者的意味はもっていないとおもわれる。土壙はただ地山を掘り下げただけで特別に粘土壁を作ったりはしていない。人骨といっしょに副葬品が発見されたが、数少ない副葬品は貧弱なもので、むしろ副葬品をもたない人骨の方が多かった。そのため土壙の内部構造あるいは副葬品のうえからも各墳墓間に優劣きめがたい。

最後に尾窪墳墓群の編年について私見を述べたい。

すでに前章において考古学部門では、尾窪墳墓群から出土した五輪塔の形態や副葬品をとおして、同墳墓群が鎌倉時代に編年できるとしている。

筆者は、墳墓群の編年にあたって58号に注目したい。祭祀の場所とかんがえられる58号の封土は明らかに墳墓が営まれている過程に作られたものである。したがって58号の土饅頭の上に造立された石造五輪塔の編年は重要であろう。五輪塔には銘記はなかったが、おそらく尾窪墳墓群の人々のための供養塔とおもわれる。五輪塔の詳細な説明は重複をさけるが、笠石は勾配がさほど急ではなく、屋根のそりは鎌倉期のものに比べて弱いので、室町期に編年できそうである。

62号人骨（火葬）に混って採集された木炭の放射性炭素の測定によればA.D.1456±44年であり、誤差を考慮に入れても室町時代中期に編年できる。

尾窪墳墓群の編年について筆者は、鎌倉時代から室町時代にかけて営まれたいわゆる中世に編年される墓地であろうとかんがえている。そして埋葬された人々は、遺跡付近で肥沃な水田と畑とを耕作しながら生活を営んだ中世の庶民たちではなかったろうか。

おわりに

尾窪墳墓群の発掘は考古班の発掘のあとを人類班が引き継ぎ人骨の露出および取り上げを行なった。ただし6基だけは考古班によってすべての作業が行なわれたので、人骨の出土写真のうち13、57A、61、64B、77号人骨については考古班から借用した。

尾窪人骨の発掘には多くの方々のご援助があったが、とくに下記の長崎大学医学部学生諸君には多大の労を煩わした。記して感謝申しあげます。

人類班参加者 内藤芳篤 （長崎大学医学部教授）、坂田邦洋（同助手）、吉村淳（同文部技官）、池田治子（同学生）、岡本純英（同学生）、草野裕幸（同学生）、永武毅（同学生）、赤瀬恵（県立熊本高等学校教諭）、松井孝之（別府大学文学部学生）。

第五章　人　　骨

はじめに

内　藤　芳　篤

尾窪遺跡における64基の墳墓から幼小児骨６体、火葬骨２体を含む合計60体の人骨が発掘された。これらの出土人骨は一般に保存状態が悪く、その大部分は骨格の一部を残すのみであった。52体の成人骨のうち性別を判じ得たのは37体（男性21体、女性16体）で、他の15体は性別不明であった。

出土人骨の年代に関しては、別項で述べられているが、火葬骨（№62）の土壙から得られた木炭を資料とした放射性炭素による年代測定の結果では、Ａ.Ｄ.1456±44（B.P.494±44）であった。勿論、当遺跡は未調査の分を含めると約100基の墳墓が数えられ、ある程度長期間にわたって営まれた墳墓群と思われるが、人骨は大体15世紀に由来する当地方人の遺骨と考えて差しつかえないであろう。このような理解のもとに尾窪墳墓群から出土した人骨をここでは中世尾窪人とよぶことにする。

わが国の中世人骨については、鈴木尚博士の鎌倉材木座発見の人骨に関する研究があり、同時代人の形質が明らかにされ、日本人形質の時代的変化の問題に関して種々の考察がなされている。同博士によれば、材木座発見の中世鎌倉人の年代は14世紀初頭（1333）に由来するものとされ、南部関東地方人の遺骨と見なされているが、その形質は現代人と比較するとき特異的で、強い時代性が現われている。中世尾窪人は時期的に多少のずれはあるが、中世鎌倉人に近い時代の資料であり、地域的には離れた九州からの出土であるために、時代性と共に地方差の問題を考え合わせるとき誠に興味深いものがあった。すでに述べたように研究上きわめて不充分な資料ではあるが、おおよその傾向をうかがい得たので、主として頭蓋骨の計測値について述べてみたい。

結　　果

Ａ.頭　蓋　骨

中世尾窪人のうち性別を判じ得た成人骨は男性21体、女性16体であったが、頭蓋骨は完全なものはなく、比較的保存状態が良好な資料は男性８例、女性10例であった。計測できる項目はきわめて限られたものであったが、その成績は附表１、２に掲げている。また図版１～図版15を参照していただきたい。

a.脳　頭　蓋

表1　脳頭蓋の比較（男性）

	中世 尾窪人		中世 鎌倉人		現代 中部九州人		現代 関東人	
	n	$\bar{x}$	n	$\bar{x}$	n	$\bar{x}$	n	$\bar{x}$
1　頭骨最大長	6	184.33	170	184.2	67	179.66	143	178.9
8　頭骨最大幅	1	138	164	136.5	67	139.38	143	140.3
17　バジオン・ブレグマ高	4	136.50	96	137.2	67	138.46	143	138.1
8/1 頭骨長幅示数	1	77.09	164	74.2	67	78.08	143	78.5
7/1 頭骨長高示数	4	74.80	94	75.0	67	77.34	143	77.3
7/8 頭骨幅高示数	1	99.28	93	99.8	67	99.25	143	98.6
23　頭水平周	2	513.00	151	516.9	67	520.22	142	513.7
24　横孤長	1	310.00	127	309.4	66	318.36	143	324.4
25　正矢状孤長	5	384.40	111	373.7	67	379,00	143	371.7
1+8+17(3)脳頭骨モズルス	1	151.33	88	152.04		(152.50)	143	152.8

表2　脳頭蓋の比較（女性）

	中世 尾窪人		中世 鎌倉人		現代 中部九州人		現代 関東人	
	n	$\bar{x}$	n	$\bar{x}$	n	$\bar{x}$	n	$\bar{x}$
1　頭骨最大長	7	174.57	62	177.9	45	171.92	82	170.8
8　頭骨最大幅	5	128.80	60	131.8	45	135.10	82	135.9
17　バジオン・ブレグマ高	6	130.00	42	128.8	45	133.37	81	132.5
8/1 頭骨長幅示数	4	72.85	57	74.2	44	79.07	82	79.7
17/1 頭骨長高示数	6	74.43	40	73.4	45	78.08	81	77.9
17/8 頭骨幅高示数	4	101.67	40	97.6	45	99.32	81	97.7
23　頭水平周	4	500.25	56	495.6	45	499.08	81	493.7
24　横孤長	4	294.25	51	297.2	45	306.74	81	313.2
25　正中矢状孤長	3	364.67	44	360.1	45	363.46	82	357.6
1+8+17/(3) 脳頭骨モズルス	4	145.34	33	146.4		(146.80)	81	146.3

中世尾窪人の脳頭蓋の特徴を明らかにするために、鈴木（1956）の中世鎌倉人、松元（1956）の現代中部九州（肥後）人および森田（1950）の現代関東人の成績と比較しながら説明したい。その成績は表1および表2に示すとおりである。

(1) 脳頭蓋の3主径

1．頭骨最大長

中世尾窪人の男性では、最大が190㎜、最小が179㎜で、6例の平均値は184.33㎜（$u^2=17.89$）となり、中世鎌倉人とはほとんど差がなく、現代の中部九州人および関東人よりは明らかに長い。女性では最大が180㎜、最小が170㎜で、7例の平均値は174.57㎜（$u^2=11.29$）となり、中世鎌倉人より短いが、両現代人より長い。

2．頭骨最大幅

男性では頭骨最大幅が正確に計測できる資料は1例（No.27）のみで138㎜である。観察したところでは一般に狭く、例えば（No.77）では130㎜以下と推測されるものもあった。比較群の中では、中世鎌倉人は両現代人に比してかなり狭い。

女性では最大が137㎜、最小が120㎜で、5例の平均値は128.80㎜（$u^2=44.22$）となり、現代の中部九州人、関東人より明らかに狭く、また中世鎌倉人にも及ばない。

3．バジオン・ブレグマ高

男性では最大が139㎜、最小が131㎜で、4例の平均値は136.50㎜（$u^2=14.36$）であり、著しい差ではないが、中部九州、関東両現代人より低く、また中世鎌倉人にもわずかに劣っている。

女性では最大が136㎜、最小が125㎜で、6例の平均値は 130.00㎜（$u^2=20.79$）となり、中世鎌倉人より高いが、両現代人より低い。

4．頭骨長幅示数

男性の頭骨最大幅の計測可能なものが1例で、したがって示数値の算出も（№27）の1例のみであり、77.09となっているが、本例は頭骨最大長においても最小値（179㎜）を示すもので、観察上は中世尾窪人のうち最も短頭に傾いているものである。比較群の中では、中世鎌倉人（74.2）は長頭型（dolichocran）に属し、現代の中部九州人（78.08）、関東人（78.5）は中頭型（mesocran）で、両者の間にはかなりの差がみられる。

女性の場合は最大が78.29、最小が68.18で、他の2例もそれぞれ73.89、71.02となり、4例の平均値は72.85（$u^2=18.58$）で、中世鎌倉人（74.2）と共に長頭型（dolichocran)に属し、例数は少ないが、強い長頭性がうかがわれる。現代の中部九州人（79.07）および関東人（79.7）は男性の場合と同様に中頭型（mesocran）に属し、両中世人との間にはかなり著明な差が認められる。

5．頭骨長高示数

男性では最大が76.54、最小が72.78で、4例の平均値は74.80（$u^2=2.62$）となり、中頭型（orthocran）の上限にあるが、中世鎌倉人とはほとんど差がなく、両現代人（いずれも高頭型hypsicran）より低い値を示している。

女性では最大が77.78、最小が72.00で、6例の平均値は74.43（$u^2=5.15$）で中世鎌倉人と共に中階型（orthocran）に属しているが、両現代人は高頭型（hypaicran）に属している。

6．頭骨幅高示数

男性は1例（No.27）のみで、99.28となっている。比較群はいずれも尖頭型（acrocran）に属し、99.8～98.6の間を占めている。

女性では最大が110.83、最小が91.97で、4例の平均値は101.67（$u^2=59.44$）であり、現代中部九州人と共に尖頭型（acrocran）に属している。現代関東人、中世鎌倉人はいずれも中頭型（metriocran）に属し、中世尾窪人よりは低い値を示している。

(2) 周径および弧長

7．頭骨水平周

男性では2例（No.6、No.27）のみが計測可能で、それぞれ516㎜、510㎜となり、平均値を求むるならば513㎜であり、中世鎌倉人および両現代人とほとんど差異は認められない。

女性では最大が512㎜、最小が495㎜で、4例の平均値は500.25㎜（$u^2=62.89$）となるが、中世鎌倉人および両現代人と大差はない。

8．横弧長

男性では1例（No.27）のみで、310㎜であり、中世鎌倉人（309.4㎜）の平均値に近いが、両現代人の平均値よりは小さい。

女性では最大が312㎜、最小が284㎜で、4例の平均値は294.25㎜（$u^2=149.57$）で、両現代人よりは勿論、中世鎌倉人に比してもわずかに小さい。

9．正中矢状弧長

男性では最大が410㎜、最小が362㎜で、4例の平均値は384.40㎜（$u^2=292.75$）であり、比較群よりわずかに大きい。

女性では最大が371㎜、最小が361㎜で3例ではあるが、その平均値は364.67㎜（$u^2=30.36$）となり、中世鎌倉人および現代関東人よりはやや大きく、現代中部九州人と近似している。

(3) 脳頭骨モズルス

男性では1例(No.27)のみであるが、151.33㎜で比較群それぞれの平均値と近いものである。

女性でも最大が149.67㎜、最小が142.67㎜で、4例の平均値は145.34㎜（$u^2=10.63$）であるが、中世鎌倉人および両現代人と大差がない。

b. 顔面頭蓋

顔面頭蓋では葬位の関係でとくに左側に破損がひどく、横径の計測ができない資料が多く、

表3　顔面頭蓋の比較（男性）

	中世尾窪人		中世鎌倉人		現代中部九州人		現代関東人	
	n	$\bar{x}$	n	$\bar{x}$	n	$\bar{x}$	n	$\bar{x}$
43. 上顔幅	4	103.00	118	105.5	66	104.61	144	103.8
44. 両眼窩幅	1	95.00	101	100.0	66	97.39	144	97.2
46. 中顔幅	2	100.00	107	101.8	66	98.00	143	98.6
47. 顔高	6	113.33	48	115.8	30	123.23	142	123.8
48. 上顔高	7	63.57	119	64.7	54	72.56	144	70.7
47/46 顔示数	2	112.33	43	113.9	33	124.99	141	125.4
48/46 上顔示数(V)	2	61.68	97	65.6	54	74.87	143	71.8
50. 前眼窩間幅	3	19.67	108	19.1	66	19.27	142	17.8
51. 眼窩幅	6	40.67	95	43.3	67	43.02	142	42.7
52. 眼窩高	6	32.50	92	33.8	67	34.74	144	34.3
52/51 眼窩示数	6	79.90	90	77.8	67	81.10	142	80.4
54. 鼻幅(r)	6	26.50	122	26.6	66	26.46	144	25.0(ℓ)
55. 鼻高(r)	7	49.00	121	51.1	67	52,40	143	52.0(ℓ)
54/55 鼻示数(r)	6	54.04	113	52.1	66	50.33	143	48.4(ℓ)
60. 上顎歯槽長	2	54.50	98	55.7	53	52.29	144	52.4
61. 上顎歯槽幅	6	66.67	100	65.2	47	66.80	144	65.8
61/60 上顎歯槽示数	2	126.65	86	121.8	47	129.37	144	126.0
62. 口蓋長	5	44.20	76	46.3	54	43.67	142	44.0
63. 口蓋幅	5	38.00	96	41.0	44	40.98	109	40.0
63/62 口蓋示数	4	87.61	65	86.7	43	95.27	109	91.1
72 全側面角	6	83.08	73	81.7	52	84.02	143	85.1
73. 鼻側面角	6	92.00	79	88.6	132	85.96	144	88.5
74. 歯槽側面角	6	61.50	68	60.3	106	76.43	143	76.4

表4　顔面頭蓋の比較（女性）

	中世尾窪人		中世鎌倉人		現代中部八州人		現代関東人	
	n	$\bar{x}$	n	$\bar{x}$	n	$\bar{x}$	n	$\bar{x}$
43. 上顔幅	3	98.67	39	100.1	45	98.94	84	100.1
44. 両眼窩幅	2	94.50	34	94.7	45	93.03	84	94.1
46. 中顔幅	3	94.67	32	95.4	45	92.39	84	93.5
47. 顔高	6	106.00	16	105.1	11	114.68	84	115.0
48. 上顔高	7	60.86	40	61.6	24	67.46	83	67.1
47/64 顔示数(V)	3	115.74	15	109.4	11	122.14	84	123.3
48/46 上顔示数(V)	3	65.38	29	64.1	24	73.17	83	72.0
50. 前眼窩間幅	5	19.40	40	18.2	45	18.50	84	17.4
50/44 前眼窩間示数	2	21.24	32	19.8	45	19.83	83	18.5
51 眼窩幅(v)	5	40.00	37	41.1	45	40.99	84	41.1(ℓ)
52 眼窩高(v)	5	33.00	33	33.1	44	34.77	84	33.8(ℓ)
52/51 眼窩示数(v)	5	80.53	34	80.7	44	84.93	84	82.4(ℓ)
54 鼻幅	8	26.00	34	24.6	45	24.77	84	24.5
55 鼻高	8	47.50	34	46.9	45	49.32	84	49.0
54 55 鼻示数	8	54.97	32	52.7	45	50.41	84	50.2
60. 上顎歯槽長	1	46.00	36	49.5	24	49.50	83	50.3
61. 上顎歯槽幅	4	61.00	31	60.7	27	60.98	83	61.7
61/60 顎歯槽示数	1	126.09	27	124.1	22	125.55	81	123.2
62. 口蓋長	5	42.20	25	43.6	26	42.35	81	42.7
63. 口蓋幅	5	36.60	32	38.3	22	38.73	66	38.4
63/62 口蓋示数	5	86.79	21	88.9	21	92.79	66	90.4
72. 全側面角	5	79.60	31	81.1	24	82.67	83	83.6
73. 鼻側面角	5	89.60	32	89.0	90	86.04	84	87.8
74 歯槽側面角	5	50.30	30	59.1	48	71.58	83	73.2

表5　推定身長値

男性	大腿骨	脛骨	上腕骨	女性	大腿骨	脛骨	上腕骨
No. 1	161.02			No 3	145.78	147.69	145.01
No. 2	156.60	159.21		No 25	143.84	142.75	141.98
No. 6	156.13		152.25	No 83	148.31		
No 31	162.71						
No 39	155.75						
n	5			n	3		
$\bar{x}$	158.44			$\bar{x}$	145.98		
u'	10.24			u'	5.02		

また鼻根部等の詳細が不明であるが、脳頭蓋の場合と同様に比較群と共に成績を表3および表4に示している。

(1) 横　　径

1．上顔幅

男性では最大が107㎜、最小が96㎜で、4例の平均値は103.00㎜（$u^2=23.33$）であり、中世鎌倉人よりやや狭いが、両現代人とは大差がない。

女性では2例がそれぞれ100㎜で、他の1例が96㎜であり、3例の平均値は98.67㎜（$u^2=5.34$）となり、中世鎌倉人および現代関東人よりわずかに狭く、中部九州人と近似している。

2．両眼窩幅

男性の場合は1例（No.8）のみで、95㎜となっており判じ難いが、比較群の中では中世鎌倉人は両現代人より広い。

女性では2例（No.25、No.54）のみでそれぞれ98㎜、91㎜で、平均値を求むれば94.50㎜となり、この数値は比較群と大差がない。

3．中顔幅

男性では2例（No.8、No.27）のみが計測可能で、それぞれ105㎜、95㎜となり、その平均値をとると100.00㎜となる。この数値は中世鎌倉人よりやや狭く、両現代人より広い。

女性では最大が101㎜、最小が91㎜で、3例の平均値は94.67㎜（$u^2=32.38$）となり、男性の場合と同様に著しい差ではないが、中世鎌倉人よりわずかに狭く、両現代人よりやや広い。

(2) 高　　径

1．顔　高

男性では最大が117㎜、最小が108㎜で、6例の平均値は113.33㎜（$u^2=11.49$）となり、両現代人より明らかに低いが、中世鎌倉人とは近似している。

女性の場合も男性と同様の傾向が認められる。最大は110㎜、最小は99㎜で、6例の平均値は106.00㎜（$u^2=22.37$）となり、中世鎌倉人と近似しているが、両現代人よりは明らかに低い。

2．上顔高

男性では最大が67㎜、最小が61㎜で、7例の平均値は63.57㎜（$u^2=4.62$）となり、顔高の場合と同様に両現代人よりはかなり低いが、中世鎌倉人とは近い。

女性では66㎜（No.5 B）というのが1例あるが、その他は一般に低く、最小は54㎜で、7例の平均値は60.86㎜（$u^2=15.45$）となり、両現代人より明らかに低いが、中世鎌倉人とは近似している。

(3) 示　数　値

男女共に頬骨弓幅の計測可能な例がないために、示数値は Virchow の顔示数および上顔示数について説明する。

1．顔示数（V.）

男性では2例のみであるが、（No.8）は105.71、（No.27）は118.95で、その平均をとれば112.33となり、中世鎌倉人と共に低顔型（chamaeprosop）に属し、正顔型（orthoprosop）に属する両現代人よりは明らかに低い。

女性では最大が121.11、最小が108.91で、3例ではあるが、その平均値は115.74（$u^2=38.81$）となり、低顔型（chamaeprosop）に属し、中世鎌倉人よりわずかに高いが、両現代人よりは著しく低い。

2．上顔示数（V）

男性では2例のみで、（No.8）が58.10、（No.27）が65.26で、その平均をとると、61.68となり、超低顔型（hyperchamaeprosop）に属し、両現代人より著しく低い。また中世鎌倉人と比較してもわずかに低い値を示している。

女性では最大が68.89、最小が58.42で、3例のみではあるが、平均値は65.38（$u^2=36.24$）で、低顔型（chamaeprosop）に属し、両現代人よりは明らかに低いが、中世鎌倉人には近い値を示している。

(4) 鼻根および眼窩

1．前眼窩間幅

男性では最大が22㎜、最小が17㎜で、3例ではあるが、その平均値は19.67㎜（$u^2=6.35$）となり、中世鎌倉人および現代中部九州人と近いが、現代関東人より広い。

女性では最大が21㎜、最小が18㎜で、4例の平均値は19.40㎜（$u^2=2.31$）となり、比較群の中では最も広い値を示している。

2．前眼窩間示数

男性では示数値の算出できる例がないが、女性で性No.25、No.54の2例があり、それぞれ23.08、19.39となり、その平均をとると、21.24となる。この示数値は比較群に比して大きいが、これは両眼窩幅では差がなく、前眼窩間幅が多少広いことに起因している。勿論2例のみではっきりしないが、観察上は、中世尾窪人は鼻根部が広く、眼窩が左右離れた感じを受ける。

3．眼窩幅（右側）

左側の破損例が多いので、右側について計測したが、男性では最大が42㎜、最小が38㎜で、6例の平均値は40.67㎜（$u^2=3.06$）となり、比較群より狭い。

女性では１例（No.25）のみは左側を計測したが、他は右側を用いた。最大は42㎜、最小は38㎜で、５例の平均値は40.00㎜（$u^2=2.50$）となり、比較群よりもわずかに狭い。

４．眼窩高（右側）

男性では最大が37㎜、最小が30㎜で、６例の平均値は32.50㎜（$u^2=5.91$）となり、両現代人より低く、また中世鎌倉人に比してもわずかに低い値を示している。

女性では最大が34㎜、最小が32㎜で、５例の平均値は33.00㎜（$u^2=1.00$）となり、現代中部九州人よりやや低いが、関東人および中世鎌倉人とは差が小さい。

５．眼窩示数（右側）

男性では最大が88.10、最小が76.19で６例の平均値は79.90（$u^2=19.54$）となり、中眼窩型（mesoconch）に属しているが、示数値は両現代人よりわずかに小さく、中世鎌倉人と大差がない。

女性では最大が84.91、最小が72.05で、６例の平均値は80.53（$u^2=23.81$）となり、中眼窩型（mesoconch）に属しており、中世鎌倉人と近似しているが、両現代人より多少小さい値を示している。

(5) 鼻

１．鼻　幅

男性では最大が31㎜、最小が25㎜で、６例の平均値は26.50㎜（$u^2=5.52$）となり、中世鎌倉人および現代中部九州人と近いが、関東人よりはやや広い。

女性では最大が27㎜、最小が25㎜で、８例の平均値は26.00㎜（$u^2=0.58$）であり、比較群よりは広い値を示している。

２．鼻　高

男性では最大54㎜、最小が44㎜で、７例の平均値は49.00㎜（$u^2=13.99$）となり、両現代人よりは勿論、中世鎌倉人に比しても低い。

女性では最大が50㎜、最小が41㎜で８例の平均値は47.50㎜（$u^2=12.32$）となり、両現代人よりは低く、中世鎌倉人よりはわずかに高い。

３．鼻示数

男性では最大が58.49、最小が46、30で、６例の平均値は54.04となり、低鼻型（chamaerrhin）に属している。示数値は両現代人よりは明らかに大きく、中世鎌倉人に比してもわずかに勝っている。

女性では最大が60.98、最小が48.08で、８例の平均値は54.97（$u^2=14.82$）となり、低鼻型（chamaerrhin）に属しているが、男性の場合と同様に両現代人よりは著しく大きく、また中世鎌倉人に比しても多少大きい値を示している。

(6) 上顎および口蓋

1．上顎歯長槽

男性では計測できたのは2例のみで、（No.1）が53㎜、（No.19）が56㎜で、その平均をとれば54.50㎜となり、中世鎌倉人と近似しているが、両現代人よりは多少長い値を示している。

女性では1例（No.25）のみで46㎜となっているが、この数値だけでみると、比較群の平均値より小さい値となっている。

2．上顎歯槽幅

男性では最大が70㎜、最小が64㎜で、6例の平均値は66.67㎜（$u^2=4.67$）となり、比較群と著しい差はない。

女性では最大が64㎜、最小が58㎜で、4例の平均値は61.00㎜（$u^2=6.00$）となり、比較群との差は小さい。

3．上顎歯槽示数

男性では上顎歯槽長の計測ができた2例のみであるが、（No.1）は128.30、（No.19）は125.00で、平均をとると126.65となり、現代関東人と近似しているが、現代中部九州人より小さく、中世鎌倉人よりは大きい値を示している。

女性では1例（No.25）のみで、126.09となっている。この数値は比較群それぞれの平均値より多少大きい。

4．口　蓋　長

男性では最大が47㎜、最小が43㎜で、5例の平均値は44.20㎜（$u^2=2.69$）となり、中世鎌倉人よりやや短く、両現代人とは大差がない。

女性では最大が44㎜、最小が41㎜で、5例の平均値は42.20㎜（$u^2=1.69$）であり、男性と同様に中世鎌倉人よりわずかに小さく、両現代人と近似している。

5．口　蓋　幅

男性では最大が40㎜、最小が35㎜で、5例の平均値は38.00㎜（$u^2=5.52$）で、比較群より狭い。

女性では最大が39㎜、最小が34㎜で、5例の平均値は36.60㎜となり、男性の場合と同様に比較群より狭い。

6．口蓋示数

中世尾窪人は男女共に他群に比して、口蓋長では差が小さく、口蓋幅では狭いので、当然口蓋示数では小さい値を示している。すなわち男性では最大が90.91、最小が83.72で、4例の平均値は87.61（$u^2=13.91$）となり、中世鎌倉人と近いが、両現代人よりは明らかに小さい値を示している。

女性では最大が95.12、最小が81.82で、5例の平均値は86.79（$u^2=28.20$）となり、中世

鎌倉人と比較的近似しているが、両現代人よりは明らかに小さい。

(7) 顔 面 角

中世尾窪人のうちNo.77（男性）およびNo.54（女性）の頭蓋右側側面の投影図を図1および図2として示している。

1．全側面角

男性では最大が87.0°、最小が78.5°で、6例の平均値は83.08°（$u^2=8.94$）となり、中顎型（mesognath）に属し、中世鎌倉人にわずかに劣っているが、両現代人よりはやや大きい。

女性では最大が87.5°、最小が73.0°で、5例の平均値は79.60°（$u^2=30.91$）となり、突顎型（prognath）に属している。示数値は両現代人より明らかに小さく、また中世鎌倉人にもわずかに劣っている。

2．鼻側面角

男性では最大が97.0°、最小が87.0°で、6例の平均値は90.09°（$u^2=11.49$）となり、正顎型（orthognath）に属し、現代中部九州人よりはかなり大きく、また現代関東人および中世鎌倉人に比してもやや大きい。

女性では最大が94.0°、最小が85.0°で、5例の平均値は89.60°（$u^2=14.82$）となり、中世鎌倉人と近似しているが、両現代人よりはわずかに大きい。

3．歯槽側面角

男性では最大が74.0°、最小が42.5°であるが、6例のうちultraprognathが2例、hyperprognathが2例、prognathが2例で、平均値としては61.50°（$u^2=122.54$）となり、過突顎型（hyperprognath）に属するが、平均値は中世鎌倉人（60.3°）と近似し、現代の中部九州人（76.43°）および関東人（76.4°）よりは著しく小さく、突顎の傾向が強いことを示しており、その差は有意である。

女性では最大が66.5°最小が42.0°であるが、5例のうち4例はultraprognathで、他の1例はhyperprognathで、その平均値としては50.30°（$u^2=102.01$）となり、起突顎型cultraprognath）に属している。比較群の中では中世鎌倉人（59.1°）は類似の傾向を示しているが、現代の中部九州人（71.58°）および関東人（73.2°）より著しく小さく、その差は有意である。

B 四 肢 骨

四肢骨および躯幹骨では頭蓋骨よりさらに保存状態が悪く、大部分は計測に不適当なものであったが、比較的保存状態の良好な資料については図版16〜図版25に示している。また火葬骨2例（No. 47、No.62）を見いだしたが、これは図版26を参照していただきたい。

(1) 推定身長値

四肢骨のうち大腿骨、脛骨および上腕骨で長径のほぼ完全なものを用いてPEARSONの方法により推定身長値を算出した。その成績は表5に示すとおりである。

最も信頼性の強い大腿骨にもとずいて算出された数値について述べると、男性では2例（No.1、No.31）が160㎝を越え、他の3例は155㎝～157㎝の間を占めているが、5例の平均値は158.44㎝（$u^2=10.24$）である。

女性では（No.83）が148.31㎝でやや高いが、他の2例はそれぞれ145.78㎝、143.84㎝で低く、3例の平均値は145.98㎝（$u^2=5.02$）であった。

(2) 大腿骨の異常例

No.19は男性骨であるが、年令は成年で、おそらく20才前後であろう。この右側大腿骨に病的な像が見られたのでその所見について述べる。なお図版27に本例を示している。

右側大腿骨は近位骨端が破損しているが、骨体はよく残在している。概して太く、頑丈な感じである。

骨体後面の中部より粗線に沿って骨の肥厚が見られ、あたかも内・外唇にまたがったような状態を示している。肥厚部は上下に約10㎝に及び、正常との境界は不明瞭である。表面は粗糙で、凹凸不平、特別の着色や骨破壊は全く見られない。また同部の前面にも粗糙部があり、棘状の小隆起が多数見られる。なお最大肥厚部の周径は12㎝であったが、正常例の同部位は大体9㎝である。

レ線像では、骨緻密質の肥厚が見られ、内面における骨梁の不整配列がある。一部には蜂窩状の構造を呈しているが、これは部位的に石灰沈着程度の濃淡があるものと思われる。骨折線は認め得ない。また骨端線は骨破損のため不詳である。

以上のような所見から腫瘍ではなく炎症性の変化であろうが、最も考えられる疾患としては、骨髄炎の一種で、比較的慢性的な経過を辿り、非化膿性である硬化性骨髄炎があげられる。本疾患は外傷（叩打）等により骨血液供給の不足を来たす循環障碍に因るものとされている。慢性炎症（結核、梅毒）を全く否定することはできないとしても、発生部位、骨破壊が全くないこと、あるいは他の骨に病変が見られないこと等から除外できるであろう。なお本人骨が若年者であることも硬化性骨髄炎の好発年令と一致するものである。

総　　括

1．中世尾窪人の脳頭蓋の諸径に関しては、頭骨最大長では男女共に現代の中部九州人および関東人より長く、中世鎌倉人と近似している。頭骨最大幅では、女性の場合、明らかに両現代人より狭く、また中世鎌倉人にも及ばない。したがって頭骨長幅示数では小さい値を示し、

著しい長頭性を示している。バジオン・ブレグマ高では男女共に比較群よりわずかに低く、したがって頭骨長高示数では小さく、頭骨幅高示数ではいくらか大きい傾向を示している。

2. 頭骨モズルス、頭骨水平周、横弧長、正中矢状弧長等については、中世尾窪人は比較群との間に多少の差を示してはいるが、いずれも著明なものではない。

3. 顔面頭蓋については、中世尾窪人は男女共に中部九州、関東両現代人に比して幅径では差がなく、高径では著しく低くなっているので、顔示数、上顔示数ではかなり小さい値を示し、低顔の傾向が強い。ここでも中世鎌倉人とは類似の傾向が認められる。

4. 眼窩示数や鼻示数についても顔型の場合と同じような傾向がうかがわれるが、鼻示数の場合が著明である。また前眼窩間幅では、中世尾窪人は女性の場合、比較群より広く、両眼窩幅では差がないので、したがって前眼窩間示数では大きい傾向が見られる。

5. 口蓋部についても、中世尾窪人は男女共に口蓋幅では比較群より狭く、口蓋長では差がないので、口蓋示数では小さい値を示している。

6. 顔面角については、中世尾窪人は男女共に比較群より全側面角ではやや小さく、鼻側面角ではわずかに大きいが、必ずしも著しい差ではない。

しかしながら歯槽側面角では、両現代人より著しく小さく突顎の傾向が著明であるが、中世鎌倉人とはよく類似した傾向を示している。

7. 大腿骨を用いて PEARSON の方法により推定身長値を算出すると、中世尾窪人の男性は158.44㎝、女性145.95㎝であった。

8. 男性、成年の右側大腿骨に骨肥厚をきたした異常例があったが、硬化性骨髄炎の可能性が考えられる。

以上述べたように中世尾窪人は、長頭型（dolichocran）、低顔型（chamaeprosop）、低鼻型（chamaerrhin）、超ないし過突顎型（ultra—、hyperprognath）等の特徴をもっているが、これらは中世鎌倉人の形質ときわめて類似したものであり、中世尾窪人と現代中部九州人との差異は、中世鎌倉人と現代関東人とのそれとよく符合するものであった。

いずれにしても中世尾窪人は、日本人形質の時代的変化の中にあって、地方差を越えた強い時代性を現わしているものと考えられる。

文　　献

Martin-Saller,1957:Lehrbuch der Anthropologie Bd.I. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.

松本実義，1956：現代中部九州（肥後）人頭骨の人類学的研究．熊本医誌、30：1—46.

森田　茂，1950：関東地方人頭蓋骨の人類学的研究．東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集、3：1—59,

鈴木　尚，1956：鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨（XI、XIII）P.75—148、P.156—170 東京。

鈴木　尚，1967：日本人形質の時代的変化．解剖誌（第72回総会号）42：13—15.

SuzukI, H., 1969:Microevolutional changes in the Japanesepopulation fromthe prehistoricagetothepresent-day.J. Fac.Sci.,Univ. Tokyo,Section V:279—309.

附表1　中世尾窪人の計測値（男性）

	No.1	No.6	No.8	No.11	No.19	No.27	No.77	No.79	n	$\bar{x}$	u^2
1　頭骨最大長	109	184		186	180	179	187		6	184.33	17.89
5　頭骨底長		105			107	95	107		4	103.50	32.95
8　頭骨最大幅						138			1	138	
10　最大前頭幅					96	91	99		3	95.33	16.32
11　両耳幅					132	127	126		3	128.33	16.33
12　最大後頭幅		107			112		107		3	108.67	8.35
17　バジオン・ブレグマ高		139			131	137	139		4	136.50	14.36
20　耳・ブレグマ高	115	117			115	115	112	107	6	113.50	12.67
21　垂直耳高	120	120			117	121	118	112	6	118.00	10.82
8/1　頭骨長幅示数						77.09			1	77.09	
17/1　頭骨長高示数		75.54			72.78	76.54	74.33		4	74.80	2.62
17/8　頭骨幅高示数						99.28			1	99.28	
23　頭水平周		516				510			2	513.00	
24　横弧長						310			1	310.00	
25　正中矢状弧長	410	382			362	386	282		5	384.40	292.75
1+8+17/(3)　脳頭骨 Modulus						151.33			1	151.33	
40.　顔長		94			99	93	104		4	97.50	25.60
43.　上顔幅			104		107	96	105		4	103.00	23.33
44.　両眼窩幅			95						1	95.00	
46.　中顔幅			105			95			2	100.00	
47.　顔高	117		111		116	113	115	108	6	113.33	11.49
48.　上顔高	67	65	61	62	65	62	63		7	63.57	4.62
47/46　顔示数(V)			105.71			118.95			2	112.33	87.61
48/46　上顔示数(V)			58.10			65.26			2	61.68	
50.　前眼窩間幅		17					20	22	3	19.67	6.35
50/44　前眼窩間示数											
51.　眼窩幅(r)	42	41	42	39		38	42		6	40.67	3.06
52　眼窩高(r)	37	32	32	30		31	33		6	32.50	5.91
52/51　眼窩示数(r)	88.10	78.05	76.19	76.92		81.58	78.57		6	79.90	19.54
54.　鼻幅	31	25	27	25		25	26		6	26.50	5.52
55.　鼻高	53	54	51	46	48	44	47		7	49.00	13.99
54/55　鼻示数	58.49	46.30	52.94	54.35		56.82	55.32		6	54.04	18.06
60.　上顎歯槽長	53				56				2	54.50	
61.　上顎歯槽幅	68		66		70	67	64	65	6	66.67	4.67
61/60　上顎歯槽示数	28.3				125.00				2	126.65	

62. 口蓋長		44	47		44	43	43		5	44.20	2.69
63. 口蓋幅			40		40	39	36	35	5	38.00	5.52
63/62 口蓋示数			85.11		90.91	90.70	83.72		4	87.61	13.91
72. 全側面角	85.5			81.5	83.0	87.0	78.5	83.0	6	83.08	8.94
73 鼻側面角	90.0			90.0	89.0	97.0	90.0	87.0	6	92.00	14.2
74 歯槽側面角	70.0			62.5	63.0	57.0	42.5	74.0	6	61.50	122.60

附表2　中世尾窪人の計測値（女性）

		No.3	No.4	No.5B	No.25	No.26A	No.32	No.38	No.54	No.78	No.83	n	$\bar{x}$	u'
1	頭骨最大長	176	180		171	176	170		175		174	7	174.57	11.29
5	頭骨底長	95	106		96	96	97		95			6	97.50	17.89
8	頭骨最大幅	125	133			120		129	137			5	128.80	44.22
9	最小前頭幅	90				90		92	95			4	91.75	5.57
10	最大前頭幅							112	110			2	111.00	
11	両耳幅	117	124		117	117			126			5	120.20	19.71
12	最大後頭幅	106	107			105			106			4	106.00	0.67
17	バジオン・ブレグマ高	127	136		133	133	125		126			6	130.00	20.79
20	耳・ブレグマ高	103	113	104	111	110	106	106	102		107	9	106.78	14.21
21	垂直耳高	106	114	107	113	113	109	108	104		111	8	109.25	13.62
8/1	頭骨長幅示数	71.02	73.89			68.18			78.29			4	72.85	18.58
17/1	頭骨長高示数	72.16	75.56		77.78	75.57	73.53		72.00			6	74.43	5.15
17/8	頭骨幅高示数	101.60	102.26			110.83			91.97			4	101.67	59.44
23	頭水平周	496	512			495			498			4	500.25	62.89
24	横弧長	284	312			290			291			4	294.25	149.57
25	正中矢状弧長	362	371		361							3	364.67	30.36
1+8+17/(3)	脳頭骨 Modulus	142.67	149.67			143.00			146.00			4	145.34	10.63
40	顔長	95	97		91	97			101			5	96.20	13.18
43	上顔幅	100			96				100			3	98.67	5.34
44	両眼窩幅				91				98			2	94.50	
46	中顔幅		93		90				101			3	94.67	32.38
47	顔高	101	109		109		180		110		99	6	106.00	22.37
48	上顔高	59	64	66	62	62			59		54	7	60.86	15.45
47/46	顔示数(V)		117.20		121.11				108.91			3	115.74	38.81
48/46	上顔示数(V)		68.82		68.89				58.42			3	65.38	36.24
50	前眼窩間幅		21		21	18			19	18		5	19.40	2.31
50/44	前眼窩間示数				23.08				19.39			2	21.24	
51	眼窩幅(r)	39	40	41	38(ℓ)				42			5	40.00	2.50
52	眼窩高(r)	32	33	34	32(ℓ)				34			5	33.00	1.00
52/51	眼窩示数(r)	72.05	82.50	82.93	84.21 (ℓ)				80.95			5	80.53	23.81
54	鼻幅	26	27	25	26	26			26	27	25	8	26.00	0.58
55	鼻高	47	49	52	46	50			45	50	41	8	47.50	12.32
54/55	鼻示数	55.32	55.10	48.08	56.52	52.00			57.78	54.00	60.98	8	54.97	14.82
60	上顎歯槽長				46							1	46.00	
61	上顎歯槽幅	61			58				61		64	4	61.00	6.00

61/60	上顎歯槽示数				126.09							1	126.09	
62	口蓋長	42	41		41				44		43	5	42.20	1.69
63	口蓋幅	36	39		34				36		38	5	36.60	3.80
63/62	口蓋示数	85.71	95.12		82.93				81.82		88.37	5	86.79	28.20
72	全側面角	77.0	87.5		82.5				78.0		73.0	5	79.60	30.91
73	鼻側面角	87.0	94.0		93.0				89.0		85.0	5	89.60	14.82
74	歯槽側面角	42.0	66.5		52.5				4.85		42.0	5	50.30	102.01

結　　語

九州自動車道文化財調査（託麻～松橋）の一つとして調査した尾窪遺跡では、昭和45年３月の分布調査にひき続いて、昭和47年３月３日から同年10月31日までの発掘調査ならびに周辺調査によって、以下のような成果をあげることができた。

尾窪遺跡は有明海の南端に注ぐ浜戸川に侵食された洪積台地上に立地する。浜戸川の左岸には阿高貝塚や国指定史跡御領貝塚等があるが、後者の東南方約３㎞、尾窪部落からは西方　約200ｍの地点にあたり、現在は雑木林となっている。

洪積層は南から北にかけて緩かに傾斜しており、尾窪遺跡では南の方が約2.5ｍ高い。尾窪中世墳墓群が営まれる以前に、先土器文化の遺物とみられる掻器類、縄文時代の押型文、晩期の山ノ寺式さらには弥生後期の文化が存在していたことがわかった。すでに尾窪中世墳墓群によってそれらの包含層は掘り抜かれていて、詳しい内容はつかめなかった。また地山はこの遺跡の南と北とでは幾分異なっており、高い方の南側では、砂質の赤褐色土壌、北では礫を多く含んでおり、そのため尾窪の墳墓の封土や人骨の保存等にもその違いが認められた。つまり北側の第１～13号墓では、封土中に多量の礫を含み、人骨の保存状況も北側の方が幾分よい。

尾窪中世墳墓群は調査の進行につれて数が増え、当初30基余と推定していたものが、最終的には封土の数83基となった。そのうち縦貫自動車道の路線内に存在するものが64基である。

封土は一見したところいわゆる土饅頭型の円形封土が主体であるが、第２・４・８・31・39・58Ａ・77号墓は方形封土で、一般に円形封土よりも方形封土の方が大形である。これらのほかにも方形封土があった可能性もあるが、現状でとらえられたのは以上の７基である。

土壙は62基を確認した。うち方形土壙が55、円形土壙が７、このほか火葬墓の小形の方形土壙が１つである。方形土壙のうち51基は長方形（Ｂ類）を呈し、残る４基がほぼ正方形（Ａ類）である。長方形土壙の長軸の方位は第１図Ｉにみられるとおり、第13・58Ｂ号墓を除けば、ほぼ南北に向いており、一定の意識された方位が示されていると考えられる。なお封土と土壙の形態上の関係については、例えば方形封土７基のうち第39号墓の円形土壙、第58Ａ号の特殊な遺構を除けば、方形土壙であるが、円形封土については、むしろ大半が方形土壙ということができる。

土壙と埋葬の関連についてはおおよそ以下にのべるようなことがいえる。まず方形土壙Ａ類と円形土壙は人骨の保存の状態から推測すると坐臥屈葬で、しかも西向きの傾向が強い。おそらく坐棺を納めたものであろう。つぎに方形土壙Ｂ類については埋葬状況を確認できたもののうち、北頭位の右側臥屈葬がほとんどを占めることが判明した。おそらくこれらはいわゆる寝棺であろう。つまり以上のことから、土壙の形状と埋葬状況との関連性が強いことがうかがわれる。このことは先述のとおり、意識された一定の方向というものがあったことを物語るものと考える。また23基の墳墓から合計63本の鉄釘が検出されているが、その出土した土壙はすべて方形土壙であるので、いわゆる箱型の棺であったことも推察できる。

火葬についてはわずか2例しか認めなかったが、この2例にも差異が確かめられる。つまり第47号墓は別の地点で遺骸を焼いたのち、集骨して土葬と同じ手順で櫃に入れて土壙に埋葬しているのに対し、第62号墓は現地火葬に付したのち燈明皿や坏（土師器）に納めたのち盛土を施しただけで土壙をもっていない。出土品としては、五輪塔・銭貨・土器・玉類・鉄釘等の関連遺物を検出した。

五輪塔は第58Ａ号から出土したものの中から2基を復元した。その2基は高さ66.3㎝および51.2㎝、最大幅30.2㎝、30.9㎝のほぼ同形式のものである。全体的には整美な宝珠形の空風輪をもち、火輪はやや肉薄で軒の部分はわずかに外反しており、水輪はやや下ぶくれ型である。この五輪塔について、石田調査員は鎌倉期のものとするのに対し、坂田調査員は室町期に比定している。編年の決め手となる銘文等がないため、ここでは一応両説を併記して、諸氏のご批評を仰ぎたい。

銭貨は第44号墓の土壙内から紐通しした状態で15枚が検出された。そのうち銘文を判読できるものは至道元寶・熙寧元寶・元豊通寶各1と皇宋通寶2枚である。これらのほか単なる盛土である第20号から景徳元寶、第58Ａ号の封土から熙寧元寶各1枚を検出した。これら銘文の判読できる銅銭はすべて北宋銭であるという共通点を認めることができる。このことは尾窪墳墓群の時期を決める重要な資料となるもので、洪武通寶や永楽通寶等の明銭の出土を見ないので、北宋銭の輸入から、明銭の輸入される以前の時期ということを暗示するものであろう。

土器としては燈明皿（土師器）と瓦器および灰釉陶器皿を検出した。燈明皿は第44・41Ｂ・54・61号墓から出土し、このうち第44号墓では至道元寶等15枚の銅銭と共伴し、第54号墓では灰釉陶器と共伴している。燈明皿の形式分類がもし可能であるとして、第10表の試案が成り立つとすれば、第44・54・62・41Ｂ号墓はきわめて近い時期の遺構であるといえる。灰釉陶器は白磁に近く、上質の焼成であり、本地方では初めての例だといわれる珍品で、今後入手の経路等に問題を残すものである。

数珠玉にはガラス製と水晶製とがあり、第26Ａ・39・40・41Ａ号墓の4基からガラスが、第31号墓からは水晶玉が出土した。とくにガラスは、古代ガラスとの時間的間隙をうめる資料として貴重なものである。玉類の出土状況は、第26Ａ号墓では側臥屈葬の両手首付近から、第31・39号墓では坐臥屈葬の膝関節の間から出土しているので、おそらく合掌した手首にかけていたものと考えられる。

鉄釘は先述のとおり23基から63本を検出した。23基はすべて方形土壙であるという共通点があり、箱型の棺を使用したことを物語るものであろう。とくに第9号墓からは板と板とを継ぎ合わせるのに使用する合釘を検出しており、かなり入念な棺の存在を推測できるものである。

尾窪遺跡のほぼ中央部にある第58Ａ号は、特異な存在である。7.15×5.1ｍの方形封土で、高さ1.22ｍの規模をもち、尾窪最大である。しかも周囲に方形の溝をめぐらす特殊な区域を設けながら、内部主体はない。つまり、埋葬のための遺構である土壙等の施設が認められず、いわゆる「埋め墓」ということはできないのである。溝がある程度埋没した段階で、第51・57Ａ・58Ｂ・64Ｂ号墓が営まれ、周溝を一部切断していることは、尾窪中世墳墓群が成立していく

過程の中で、この第58Ａ号が造られたことを意味するものであろう。関連する遺物としては封土の浅い部分や周溝内から多くの燈明皿や五輪塔の各部分が出土し、封土中から熙寧元寶１枚が検出された。とくに五輪塔群は、おそらく初め封土の頂上にあったものが、次第に倒壊して周溝内に転落した状況で発見されており、次々に供養塔として建てられたものではないかと推測する。このようなことから考えると、この第58Ａ号はいわゆる「埋め墓」ではなく、礼拝の対象または葬送儀礼の場、いいかえれば「詣り墓」として構築された遺構であるとしなければならないであろう。

さて第１図の封土および土壙の分布図や尾窪中世墳墓一覧表（Ⅰ～Ⅴ）を検討すると、おそらくいくつかのグループに分けることができそうである。もし可能であるとすれば一応封土や遺構・遺物等から五つの群を考えてみたい。まず、北端の第１～11号墓の１群は比較的整然と並んだ方形土壙で、人骨の確認できたものはすべて右側臥屈葬である。第19～34号墓（除第21号墓）の２群は、大形の方形土壙をもつ第31号墓中心の群で、方形土壙である。ただ第31号墓については水晶数珠玉をもち、必要以上に大形の土壙を設けた特異な墓であることがいえる。３群は第58Ａ号をとりまく群で、方形土壙を主体として円形土壙が混じり、火葬墓２基もこの一群に含まれる。４群は配置にあまり規則性はないが、封土・土壙とも大形であることが特色で、すべて方形土壙である。５群は南端の方形土壙群で、これらの近くには江戸期の石塔をもつ墓地が存在した。

便宜上分けた５群には、それぞれの特色が見られるが、これがはたして年代的な差異を示すのか、また家族構成の違いなのか、あるいは時代の習慣（流行？）を物語るものかは不明である。今後の課題の一つとして究明すべき点であろう。

尾窪中世墳墓群の成立した年代については、はっきり断定することはできないが、至道元寶等の北宋銭のみを出土し、明銭の出土をみない点、また五輪塔の形式、さらには第62号墓の火葬墓の C^{14} の測定結果を尾窪遺跡の時代判定に参考とした場合、一応鎌倉時代から室町時代にかけて築造された墳墓群であり、しかもこの尾窪周辺の庶民の墓であろうと考える。

最後に尾窪遺跡から検出された60体の人骨の特徴をまとめてみたい。60体のうちわけは成人骨54・幼小児骨６で、２例の火葬墓を除く他の58はすべて土葬で、しかも合葬を行なっていない。土葬人骨は比較的保存が悪く計測できるものが少ないという状況であるが、以下のような特徴が得られたことは中世人骨の今後の資料として貴重なものといえる。まず推定身長は男性５例の平均値158.44㎝、うち２例は160㎝を越え、女性では３例の平均値145.98㎝であった。頭骨はその最大長では男女ともに中世鎌倉人に近く、最大幅では男女とも中世鎌倉人よりも狭く長頭性が著しく、また突顎の傾向が強い。いずれにしてもこの中世尾窪人は中世鎌倉人の形質にきわめて近く、地方差の特徴よりも時代的特徴をもつものといえそうである。

（隈　　昭志）

——お　わ　り　に——

発掘調査の事前作業として、初めて尾窪墳墓遺跡に足を踏み入れ藪の伐採にかかったのは2月末日のことであった。

それから約8か月、冬曇りの空のもとで寒さに震えながら、またある時は5月の陽光の下順調に進む調査に喜びながら、そして夏の炎天下では真黒になりながら調査を進めたが、現場での調査をほぼ終えたのは早秋風の吹き始める頃であった。

苦しかった8か月間ではあったが、今ふり返って見ると共に調査に励んだ人達の顔と相まって懐しくも感じられる。

記憶の確かなうちに記録に留めようと現場での調査終了と同時に報告書作製の準備にかかり、翌48年2月にはほぼ報告書としての体裁をとれるだけの資料を集めることができた。これは偏えに執筆者各位の努力のたまものであることはいうまでもない。

このように調査終了後4か月を経ずして調査報告書の上梓の運びとなったことは、調査員一同最も喜びとするところである。

しかし、報告書の完成によって尾窪墳墓遺跡に関しての記録保存がすべて終了したわけではない。資料の整理期間が短かかったため関係資料の収集、出土遺物の個々の吟味等まで力が及ばず、報告書として不完全の謗りも免がれない。

今後、当遺跡に関する新資料の発見や新知見等については遂次関係学術書等に掲載し補っていく予定でいる。

本報告書の成るにあたっては関係者各位の多大なご協力をいただいた。紙上をかりて茲に厚くお礼を申し上げる次第である。

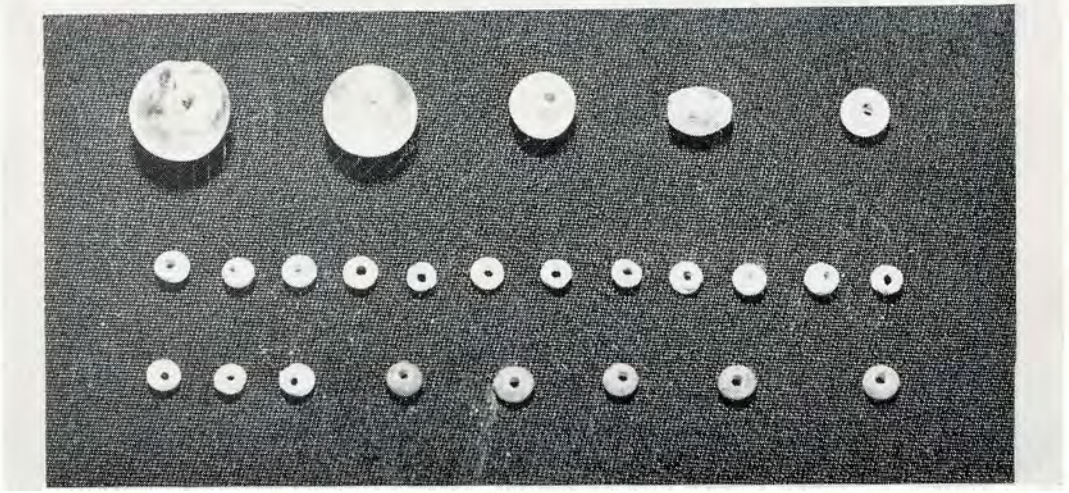
（調査主任　桑原憲彰）

図　　版

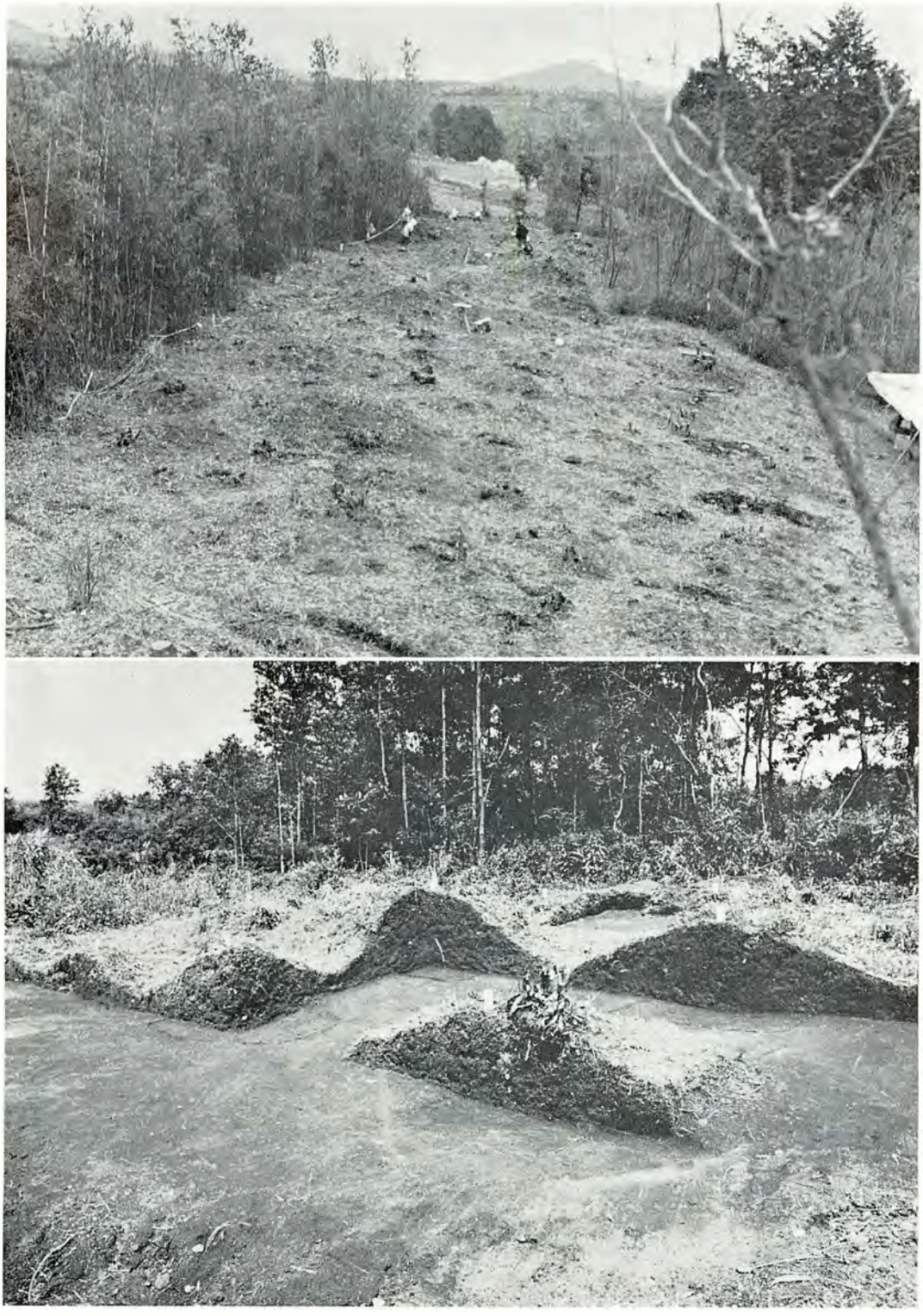
図 版 目 次

（第一・二・三章）

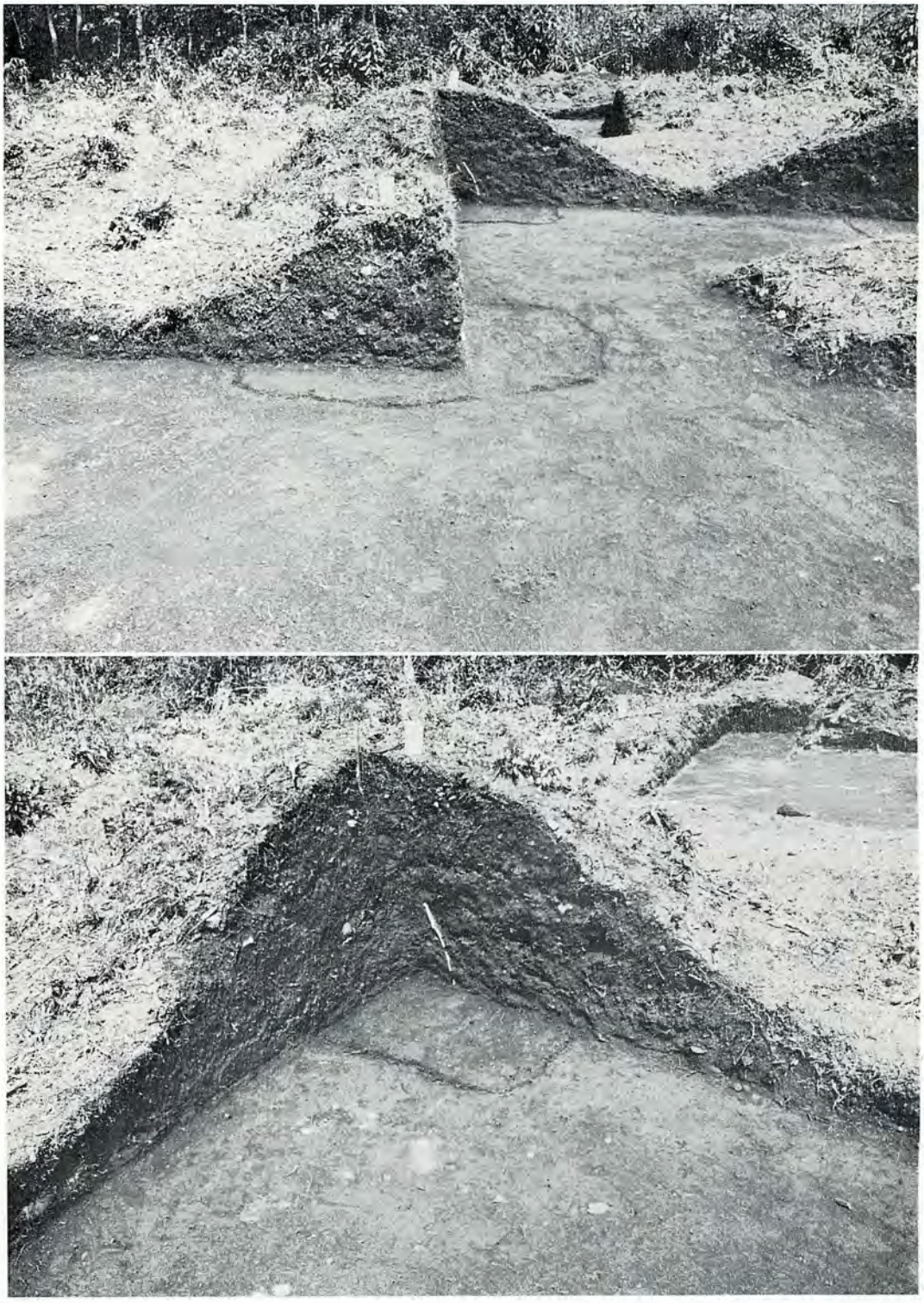
図版 1　上・灰釉陶器、下・玉類
図版 2　上・遺跡全景（北側より）下・墳墓群の封土
図版 3　上・封土下・ 4 号墓墳丘と方形土壙
図版 4　上・円形土壙下・方形土壙（ 8 号墓）
図版 5　上・57Ａ号遺構下・57Ａ号遺構と周囲の土壙群
図版 6　上・57Ａ号遺構下・57Ａ号遺構南溝内の五輪塔出土状況
図版 7　上・57Ａ号遺構東溝の五輪塔出土状況下・57Ａ号遺構出土五輪塔復元状況
図版 8　第58Ａ号墓出土の五輪塔空・風輪部
図版 9　封土断面図



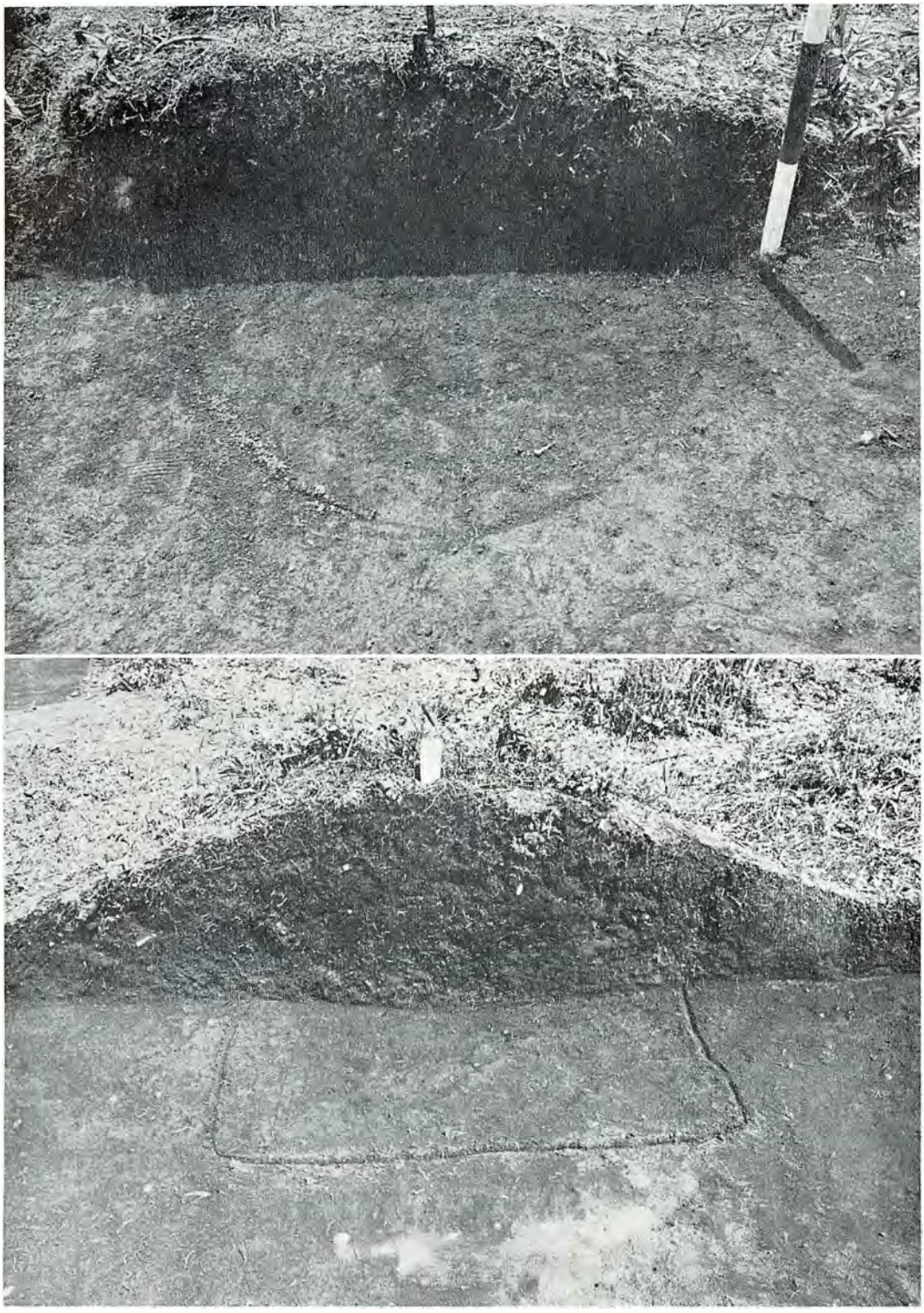
図版1　上　灰釉陶器　　下　玉類



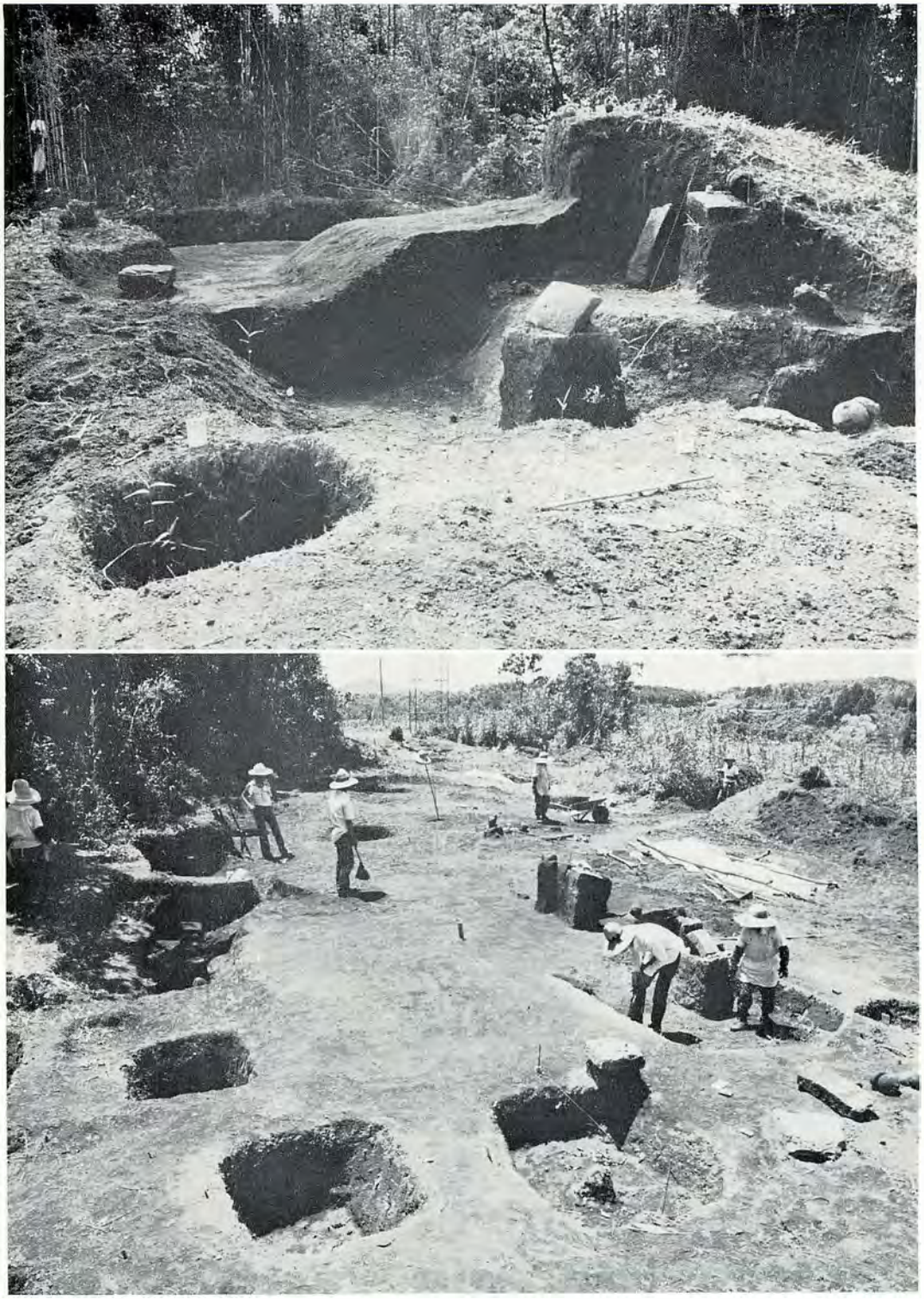
図版 2　上　遺跡全景（北側より）　　下　墳墓群の封土



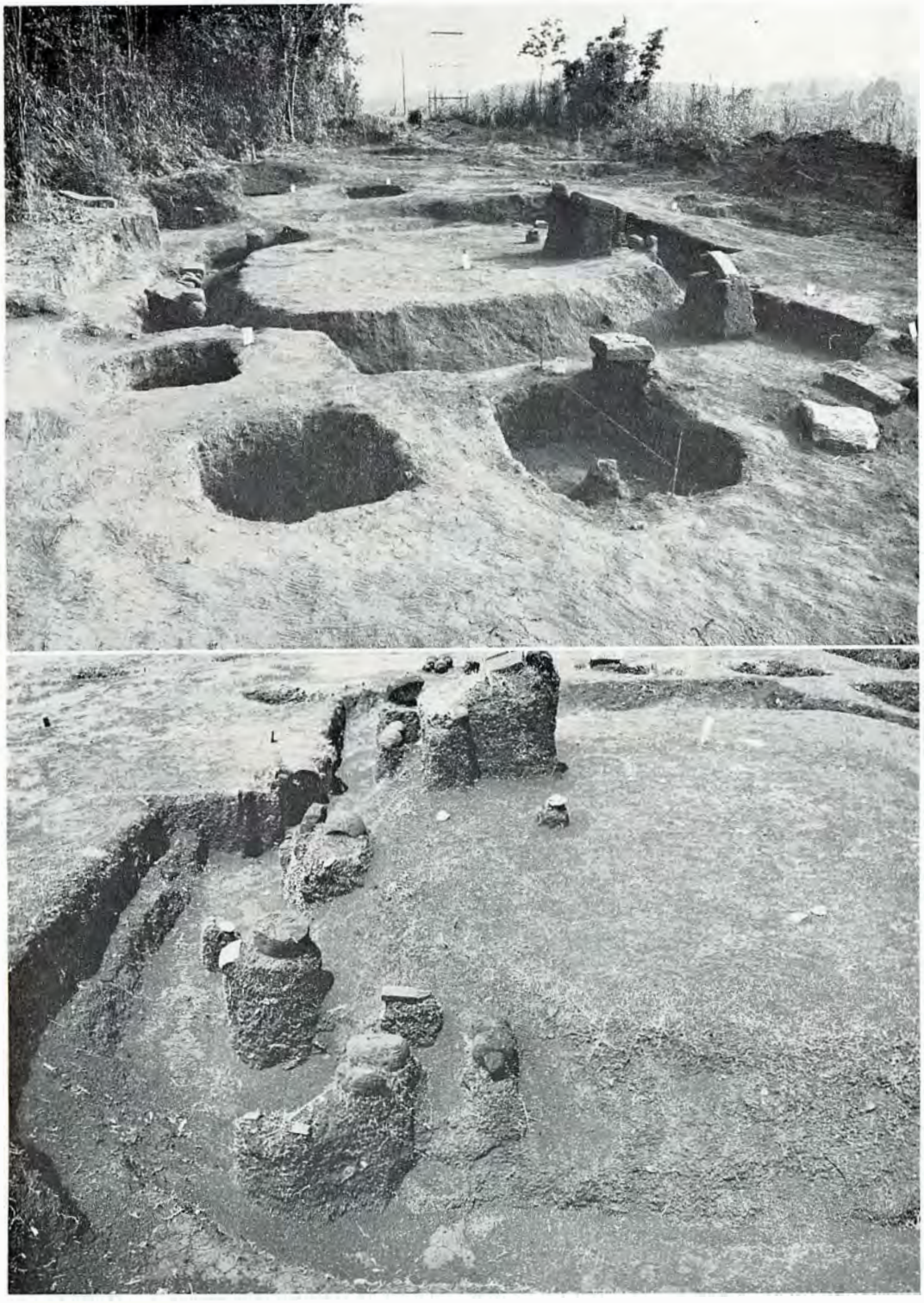
図版3　上　封土（第6号墓）　　下　第4号墓墳丘と方形土壙



図版4　上　円形土壙　　下　方形土壙（第8号墓）



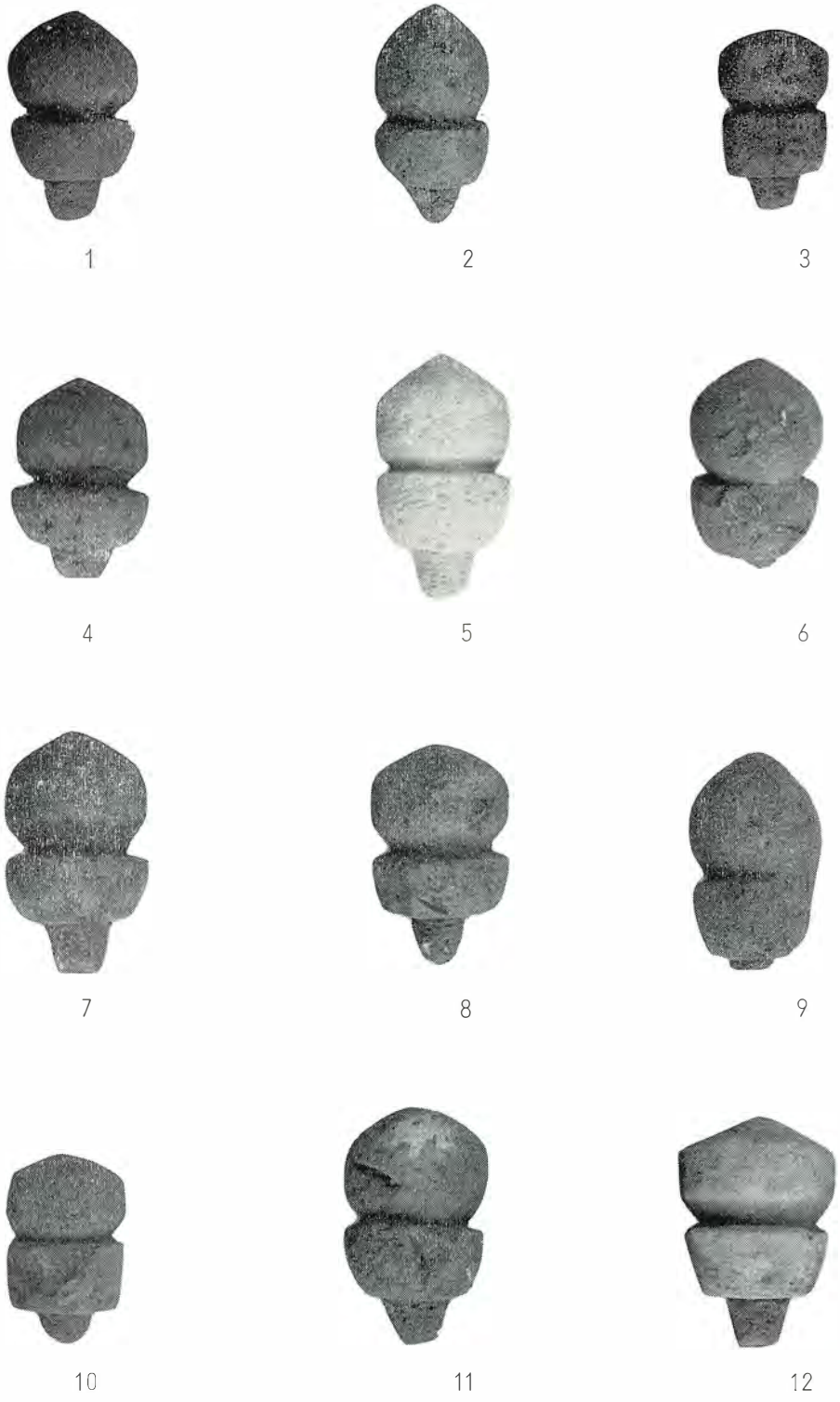
図版5　上　第57A号遺構　　下　第57A号遺構と周囲の土壙群



図版6　上　第57A号遺構　　下　第57A号遺構南溝内の五輪塔出土状況

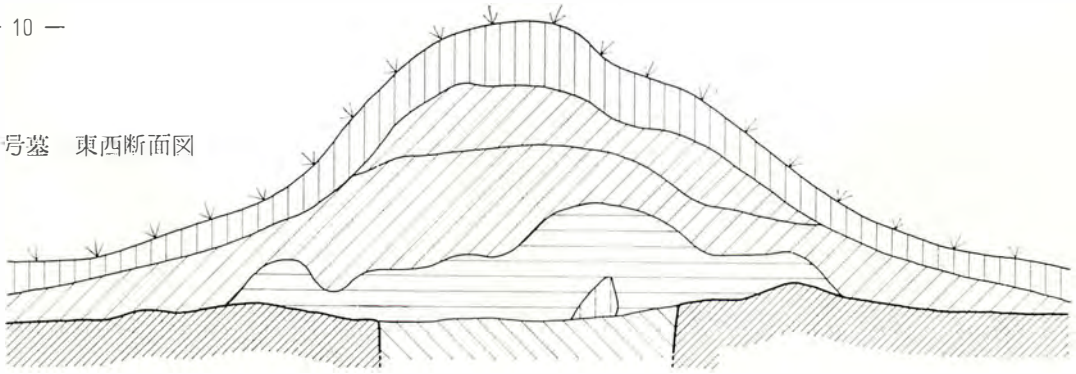
図版 7　上　第57A号遺構東溝の五輪塔出土状況

下　第57A号遺構出土五輪塔復元状況

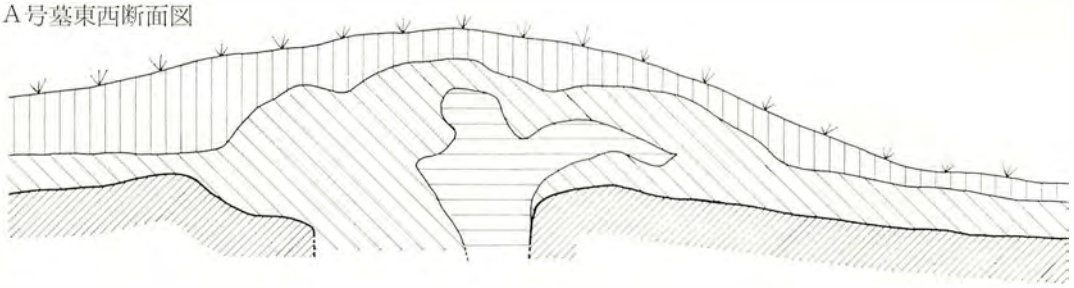


図版 8　第58A号墓出土五輪塔空・風輪部

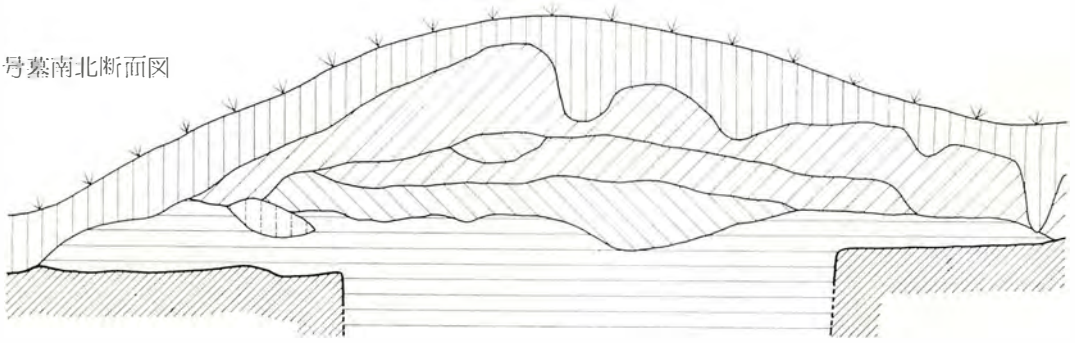
第4号墓　東西断面図



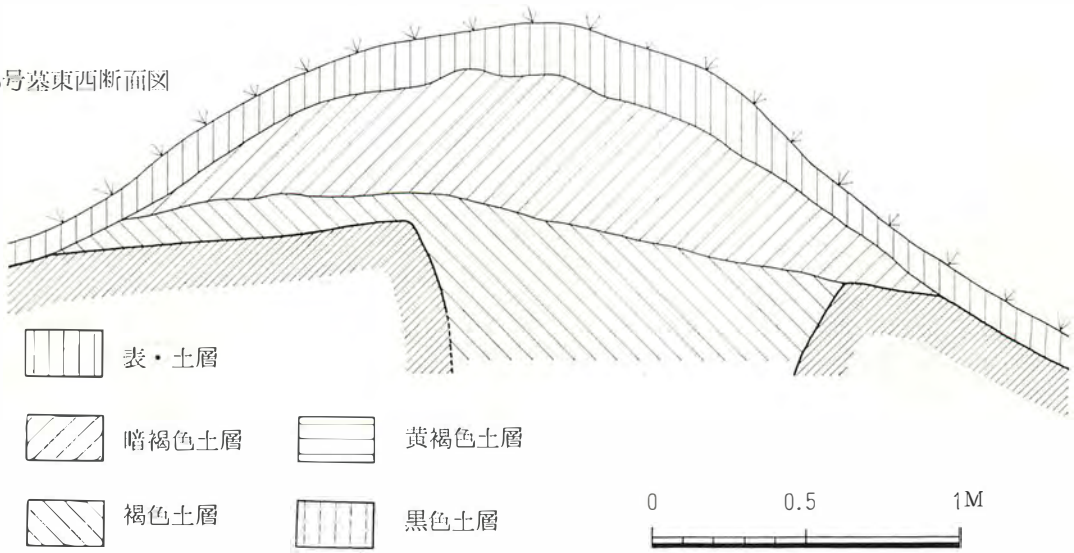
第5A号墓東西断面図



第8号墓南北断面図



第76号墓東西断面図



図版9　封土断面図

図　版　目　次

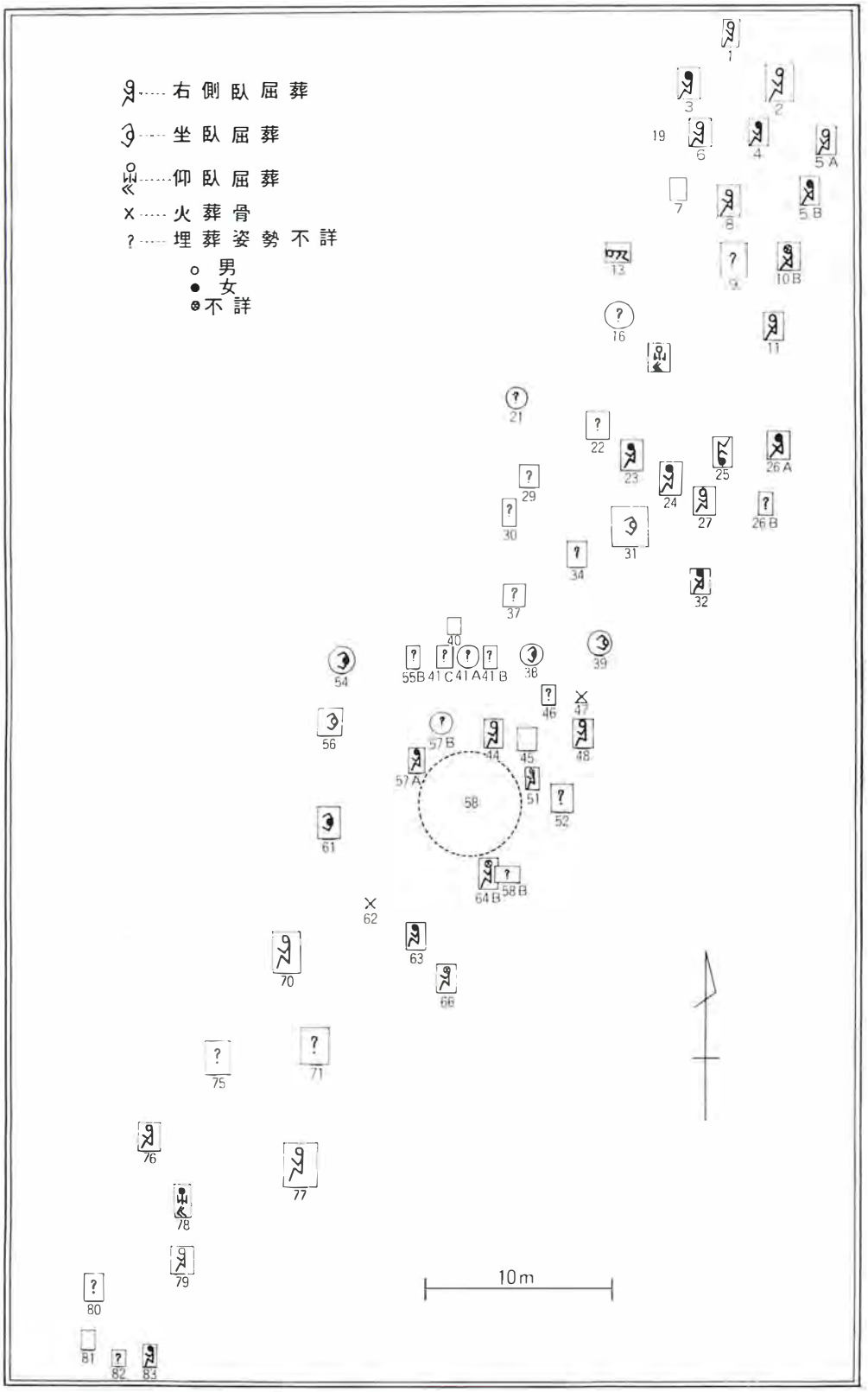
（第四章・埋葬）

図版１　尾窪墳墓群平面図
図版２　人骨出土状況の平面図 1/20
図版３　人骨出土状況の平面図 1/20
図版４　火葬人骨（上）および土壙内の空洞（下）
図版５　遺跡近景と人骨出土状況（右側臥屈葬）
図版６　人骨出土状況（右側臥屈葬）
図版７　人骨出土状況（右側臥屈葬）
図版８　人骨出土状況（右側臥屈葬・仰臥屈葬・坐臥屈葬）
図版９　人骨出土状況（坐臥屈葬・埋葬姿勢不詳）
図版10　人骨出土状況（埋葬姿勢不詳）

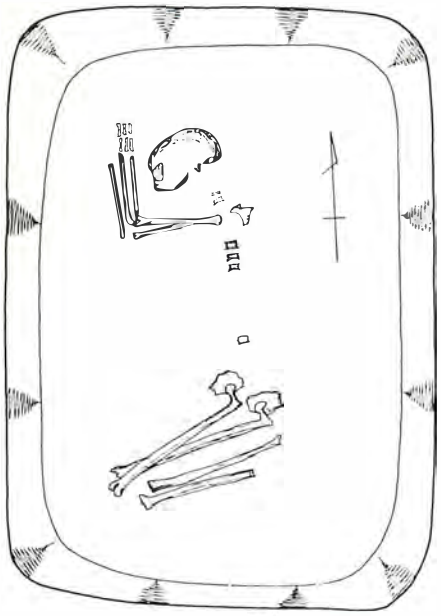
表　目　次

（第四章・埋葬）

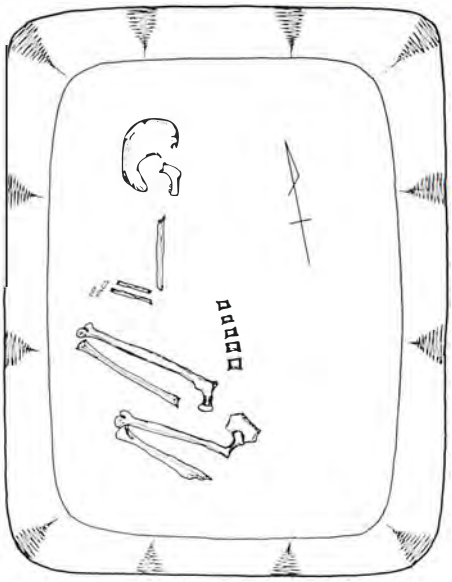
表１　尾窪墳墓群一覧表・本表は、第一章末の尾窪中世墳墓群一覧表Ⅰ～Ⅴに相当する。埋葬姿勢を確実に決定できなかった人骨には疑問符をつけたが、埋葬姿勢の分類ではそれぞれの姿勢に一括することにした。成人骨のうち年令推定ができない人骨は不詳と記した。
表２　土壙の形
表３　円形土壙墓の大きさ
表４　方形土壙墓の大きさ
表５　成人骨を出土した方形土壙墓の大きさの平均値
表６　方形土壙の大きさの平均値・成人骨を出土した土壙と幼・小児骨を出土した土壙とに分けて平均値を求めた。
表７　成人骨を出土した円形土壙における相関度
表８　方形土壙における相関度
表９　埋葬姿勢と性別および年令
表10　埋葬姿勢と土壙の形
表11　土壙の形と性別および年令
表12　成人骨を出土した方形土壙の方向の一覧表
表13　埋葬姿勢と方向



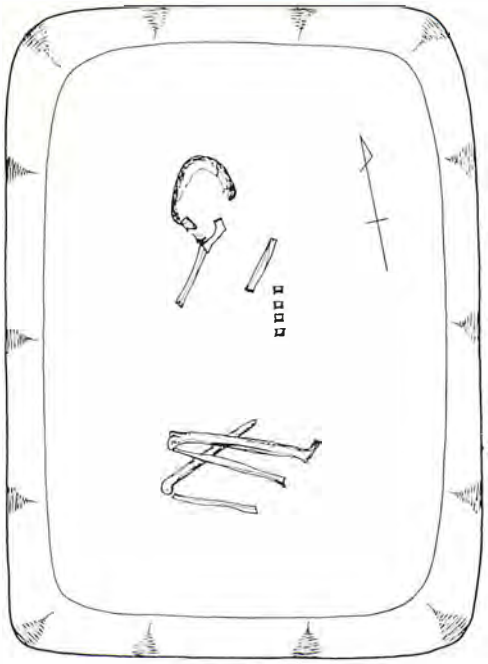
図版1　尾窪墓墳群平面図



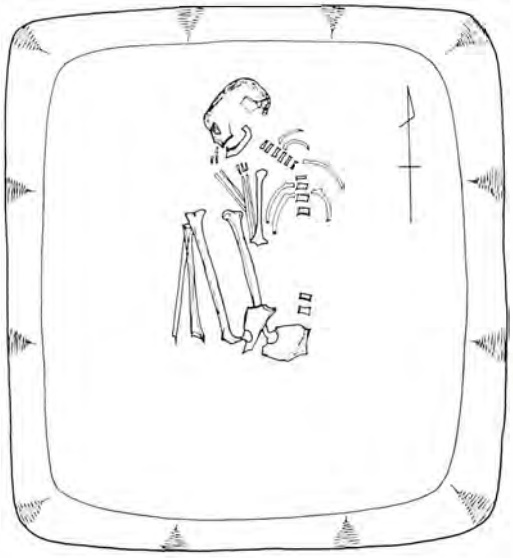
右側臥屈葬（１号人骨）



右側臥屈葬（83号人骨）

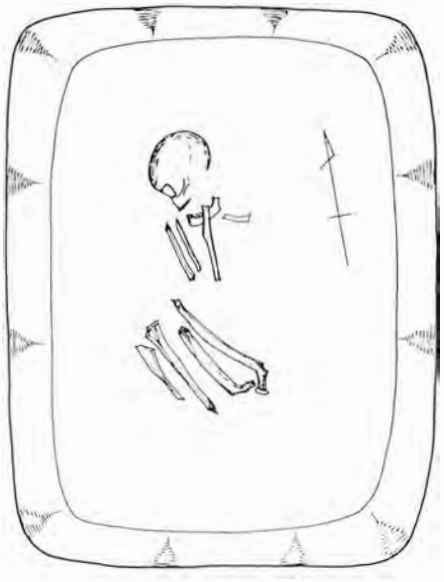


右側臥屈葬（11号人骨）

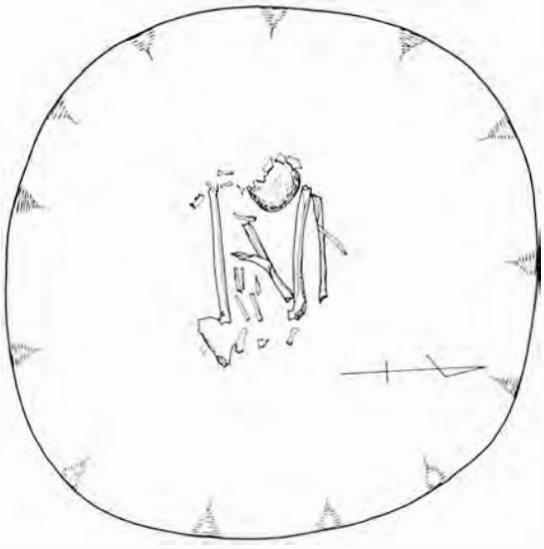


右側臥屈葬（６号人骨）

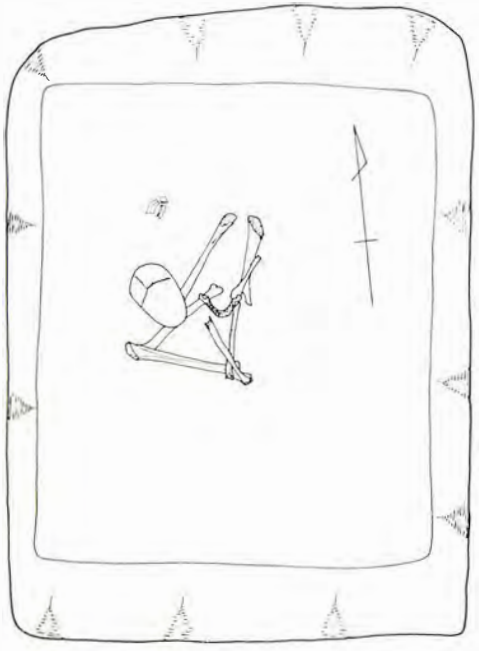
図版２　人骨出土状況の平面図



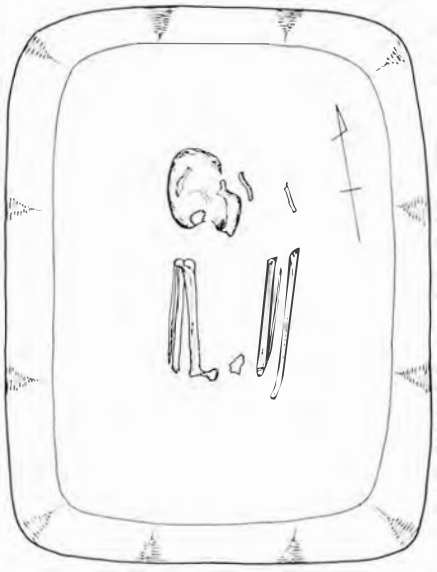
右側臥屈葬（66号人骨）



座臥屈葬（39号人骨）



座臥屈葬（61号人骨）



仰臥屈葬（19号人骨）

図版 3　人骨出土状況の平面図

47号人骨

62号人骨

土壙内の空洞（25号）

土壙内の空洞（4号）

図版4　火葬人骨（上）　および土壙内の空洞（下）

封　土

土　壙

1号人骨

2号人骨

3号人骨

4号人骨

6号人骨

8号人骨

32号人骨

図版5　遺跡近景と人骨出土状況（右側臥屈葬）

51号人骨

79号人骨

83号人骨

5 A号人骨

5 B号人骨

10B号人骨

11号人骨

13号人骨

23号人骨

図版 6　人骨出土状況（右側臥屈葬）

24号人骨

25号人骨

26A号人骨

27号人骨

48号人骨

57A号人骨

63号人骨

64B号人骨

66号人骨

図版 7　人骨出土状況（右側臥屈葬）

70号人骨

76号人骨

77号人骨

19号人骨

78号人骨

31号人骨

39号人骨

54号人骨

61号人骨

図版 8　人骨出土状況（右側臥屈葬・仰臥屈葬・座臥屈葬）

38号人骨

56号人骨

9 号人骨

82号人骨

21号人骨

21号人骨

26B号人骨

29号人骨

30号人骨

図版 9　人骨出土状況（座臥屈葬・埋葬姿勢不詳）

34号人骨

37号人骨

41B号人骨

46号人骨

52号人骨

55B号人骨

71号人骨

75号人骨

80号人骨

図版10　人骨出土状況（埋葬姿勢不詳）

図　版　目　次

（第五章・人骨）

図版１　１号人骨（男性）
図版２　６号人骨（男性）
図版３　11号人骨（男性）
図版４　19号人骨（男性）
図版５　27号人骨（男性）
図版６　77号人骨（男性）
図版７　79号人骨（男性）
図版８　３号人骨（女性）
図版９　４号人骨（女性）
図版10　５Ｂ号人骨（女性）
図版11　25号人骨（女性）
図版12　26Ａ号人骨（女性）
図版13　32号人骨（女性）
図版14　54号人骨（女性）
図版15　83号人骨（女性）
図版16　１号人骨（男性）
図版17　２号人骨（男性）
図版18　６号人骨（男性）
図版19　31号人骨（男性）
図版20　39号人骨（男性）
図版21　３号人骨（女性）
図版22　４号人骨（女性）
図版23　25号人骨（女性）
図版24　26Ａ号人骨（女性）
図版25　83号人骨（女性）
図版26　火葬人骨（上47号、下62号）
図版27　大腿骨の異常例（19号人骨、男性、成年）上：前面、後面、外側面下：後面、外側面
図版28　顔面角

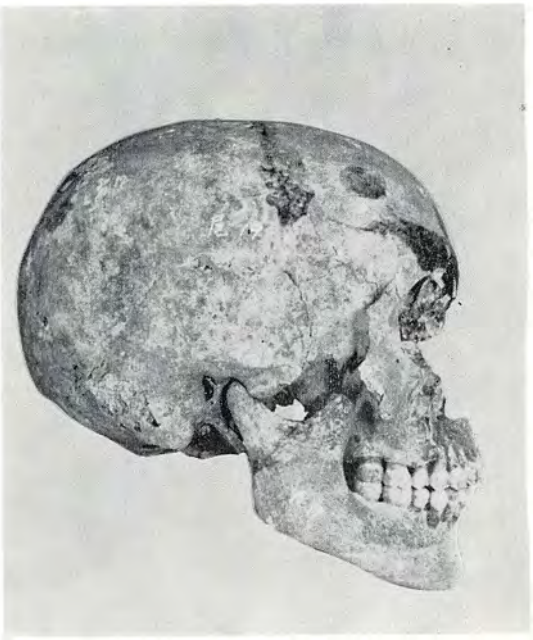
表　目　次

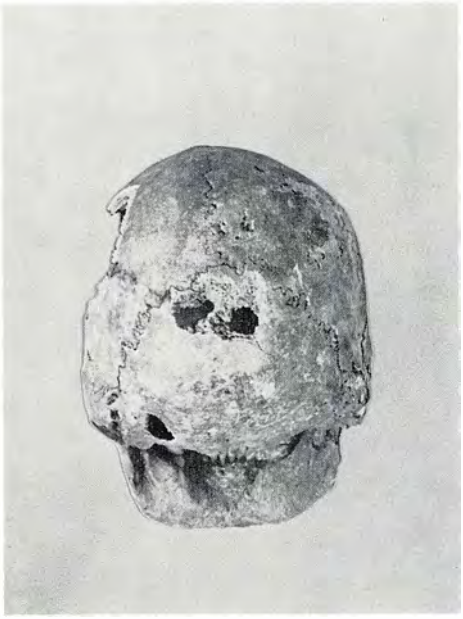
表１　脳頭蓋の比較（男性）
表２　脳頭蓋の比較（女性）
表３　顔面頭蓋の比較（男性）
表４　顔面頭蓋の比較（女性）
表５　推定身長値
附表１　中世尾窪人の計測値（男性）
附表２　中世尾窪人の計測値（女性）

図版1　1号人骨（男性）

図版 2　6 号人骨（男性）

図版 3　11号人骨（男性）



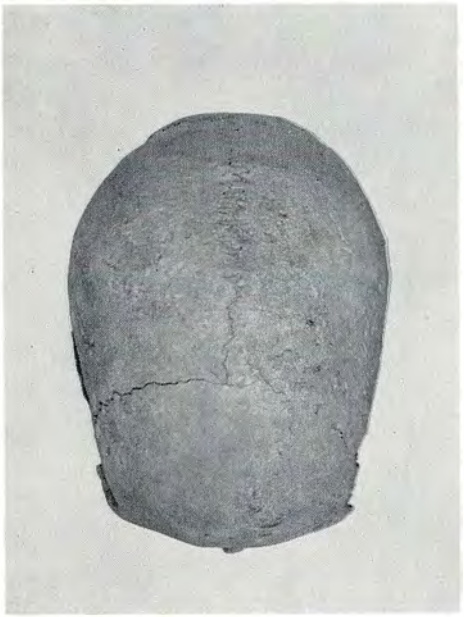


図版 4　19号人骨（男性）

図版５　27号人骨（男性）

図版６　77号人骨（男性）

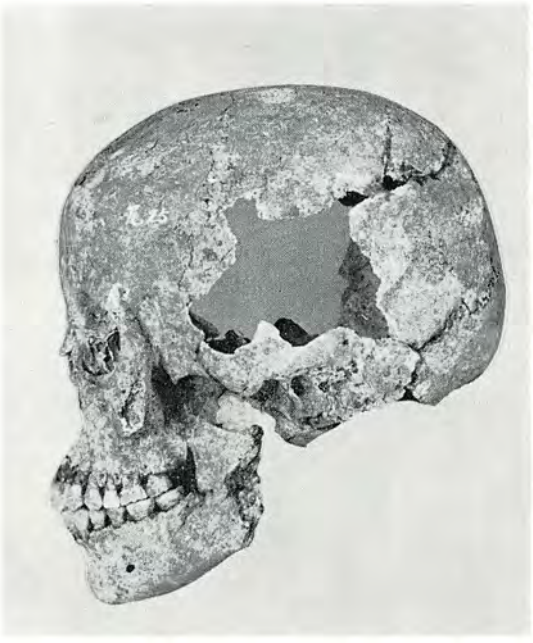
図版 7　79号人骨（男性）



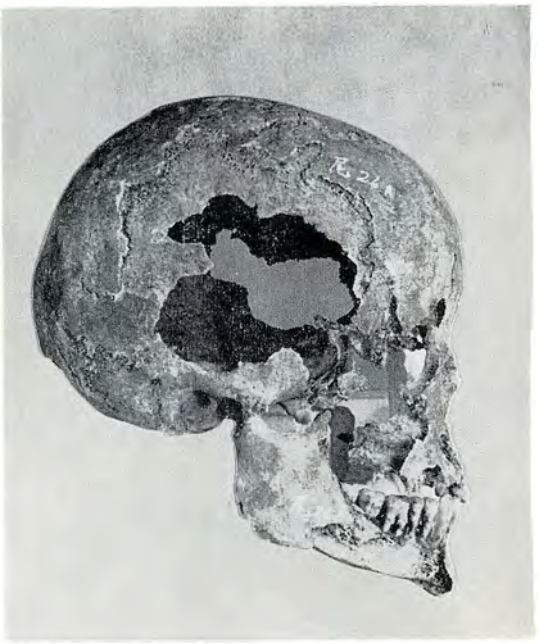
図版 8　3 号人骨（女性）

図版 9　4 号人骨（女性）

図版10　５Ｂ号人骨（女性）



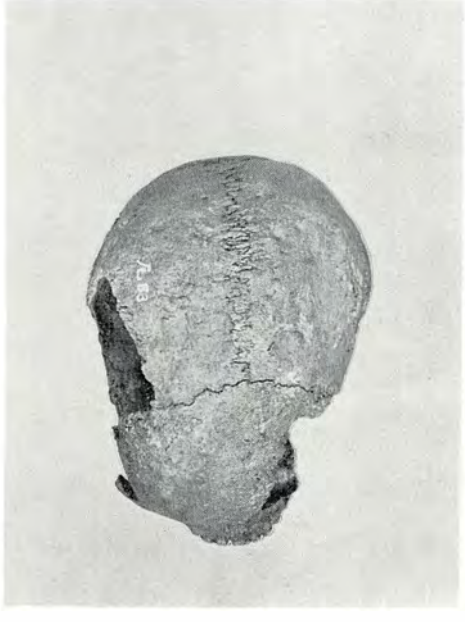
図版11　25号人骨（女性）



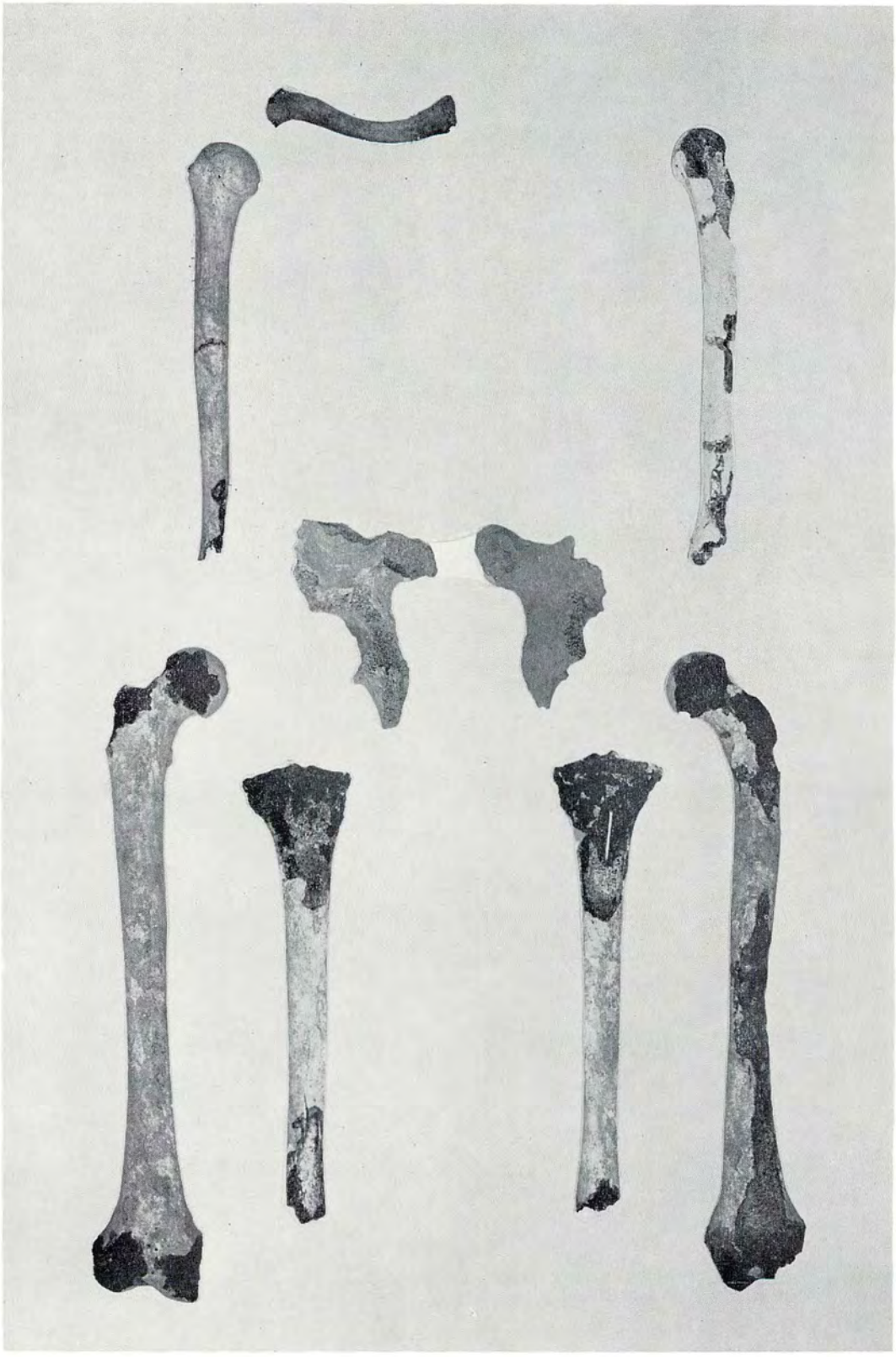
図版12　26A号人骨（女性）

図版13　32号人骨（女性）

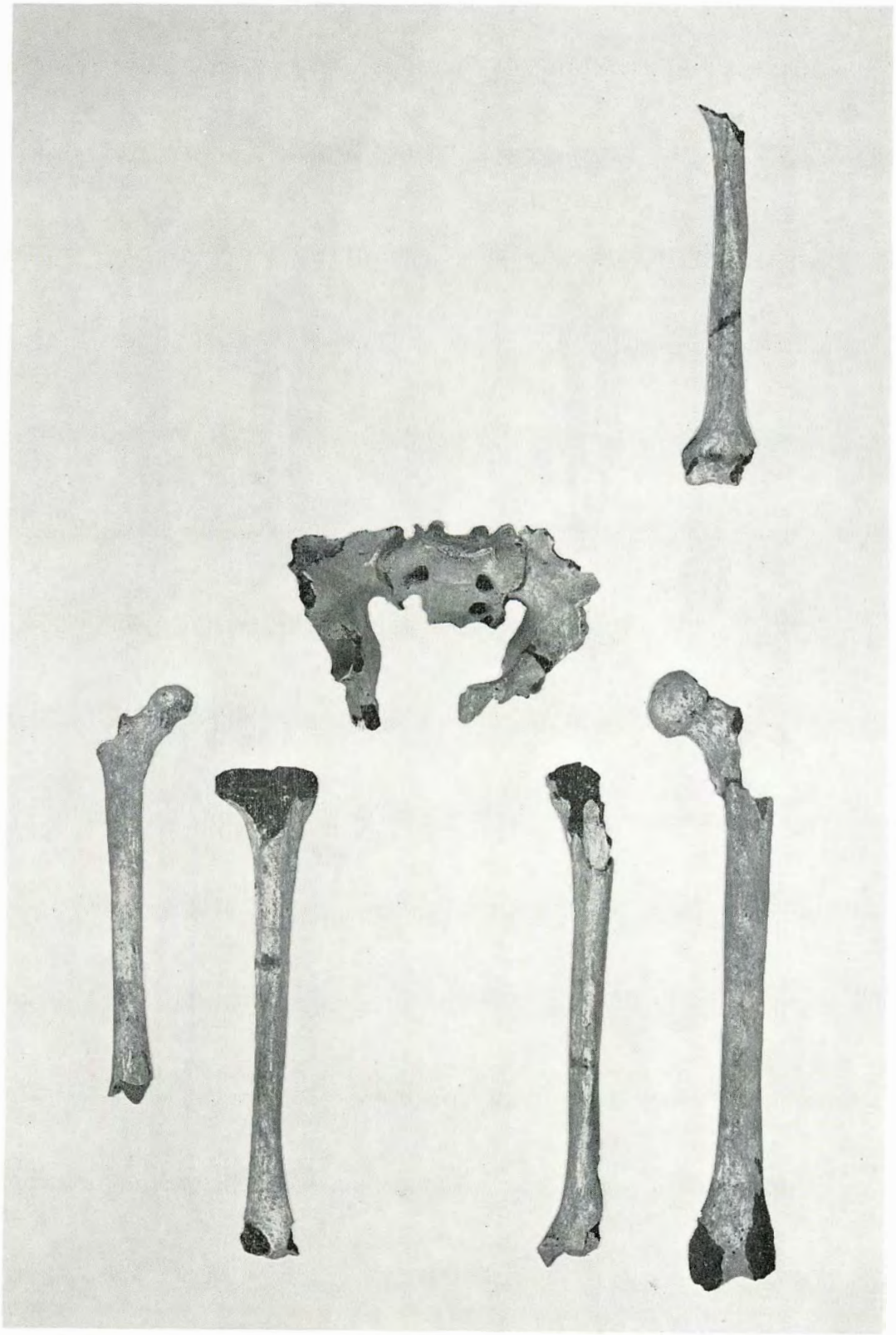
図版14　54号人骨（女性）



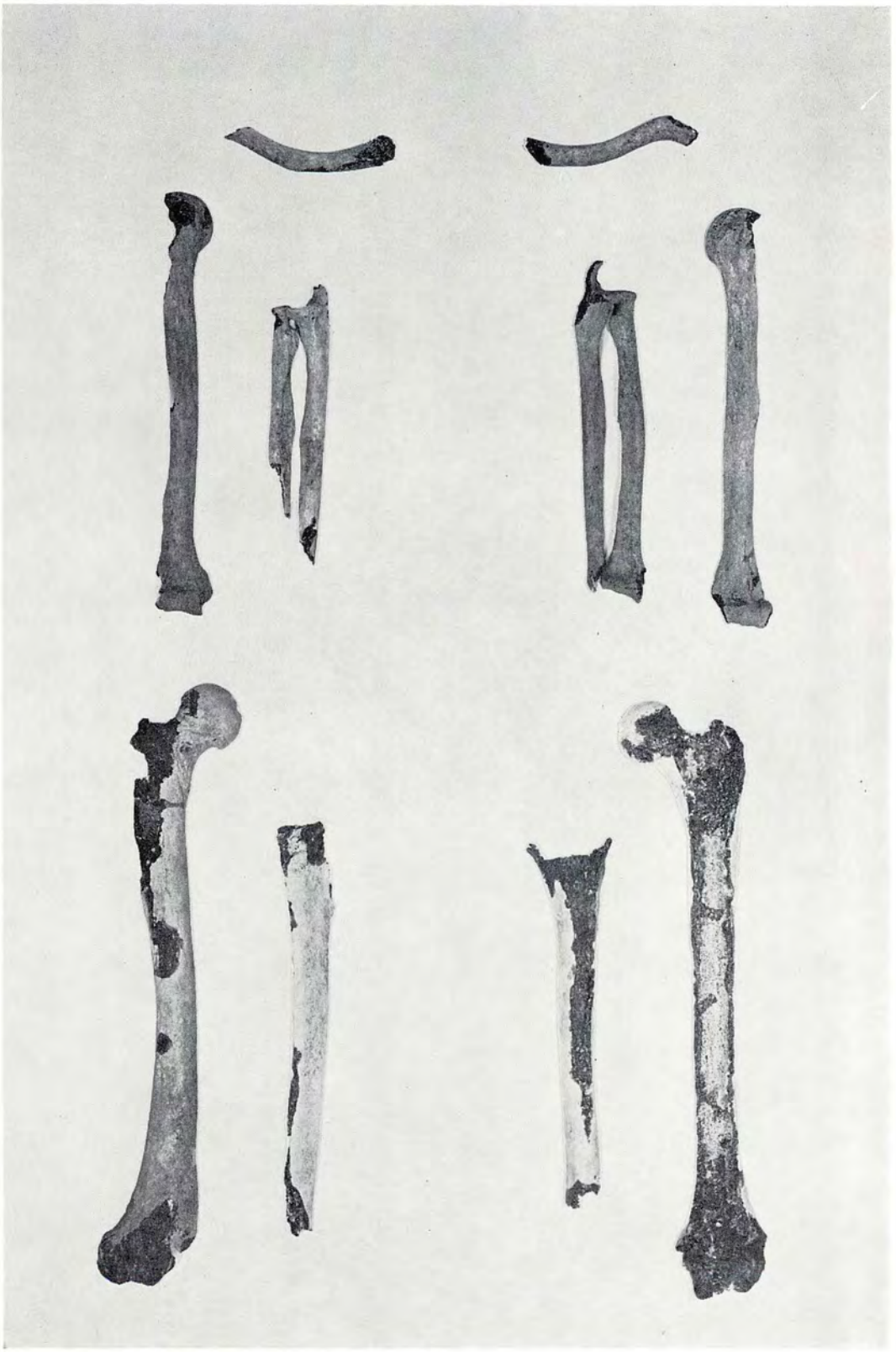
図版15　83号人骨（女性）



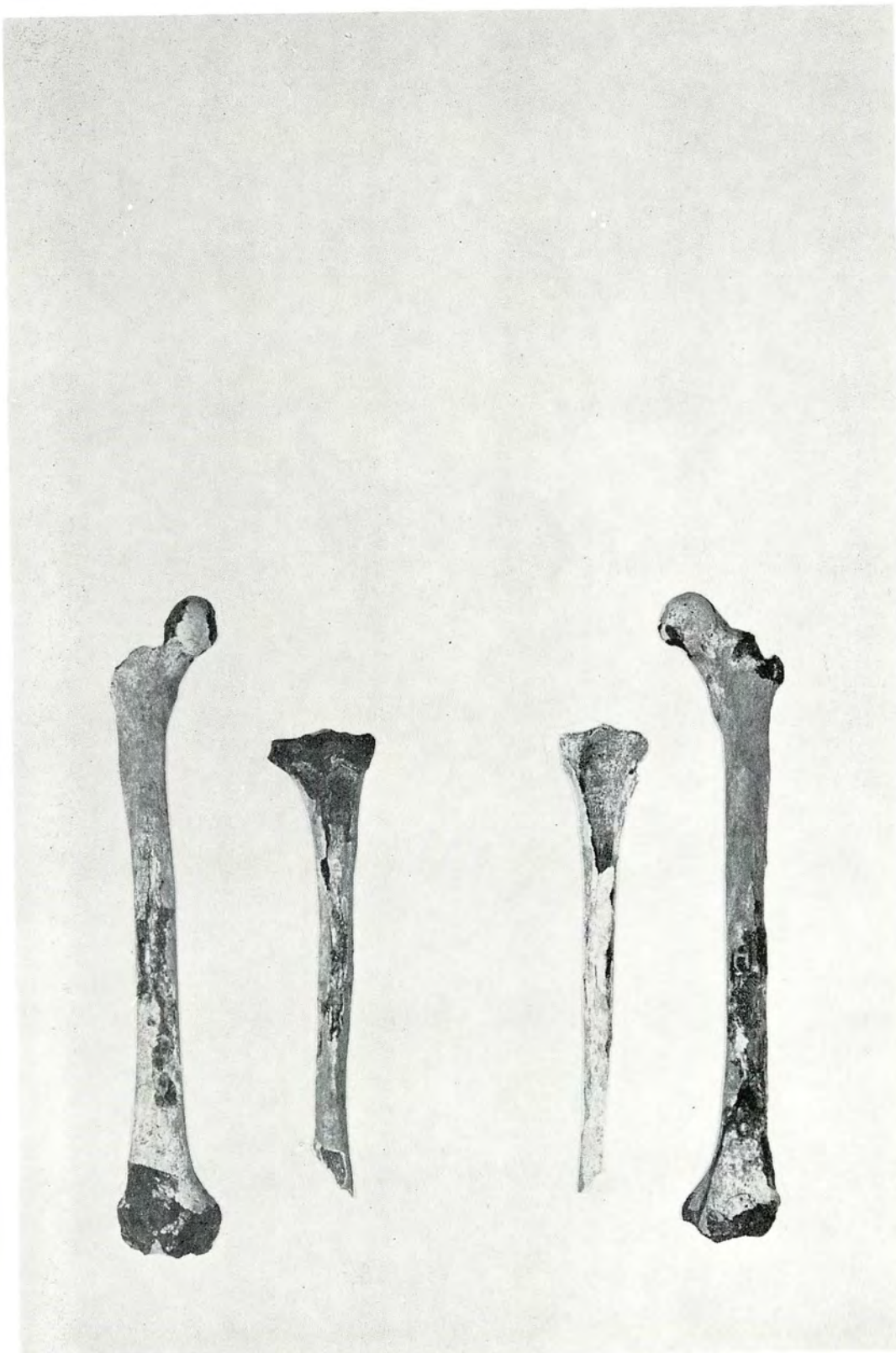
図版16　1号人骨（男性）



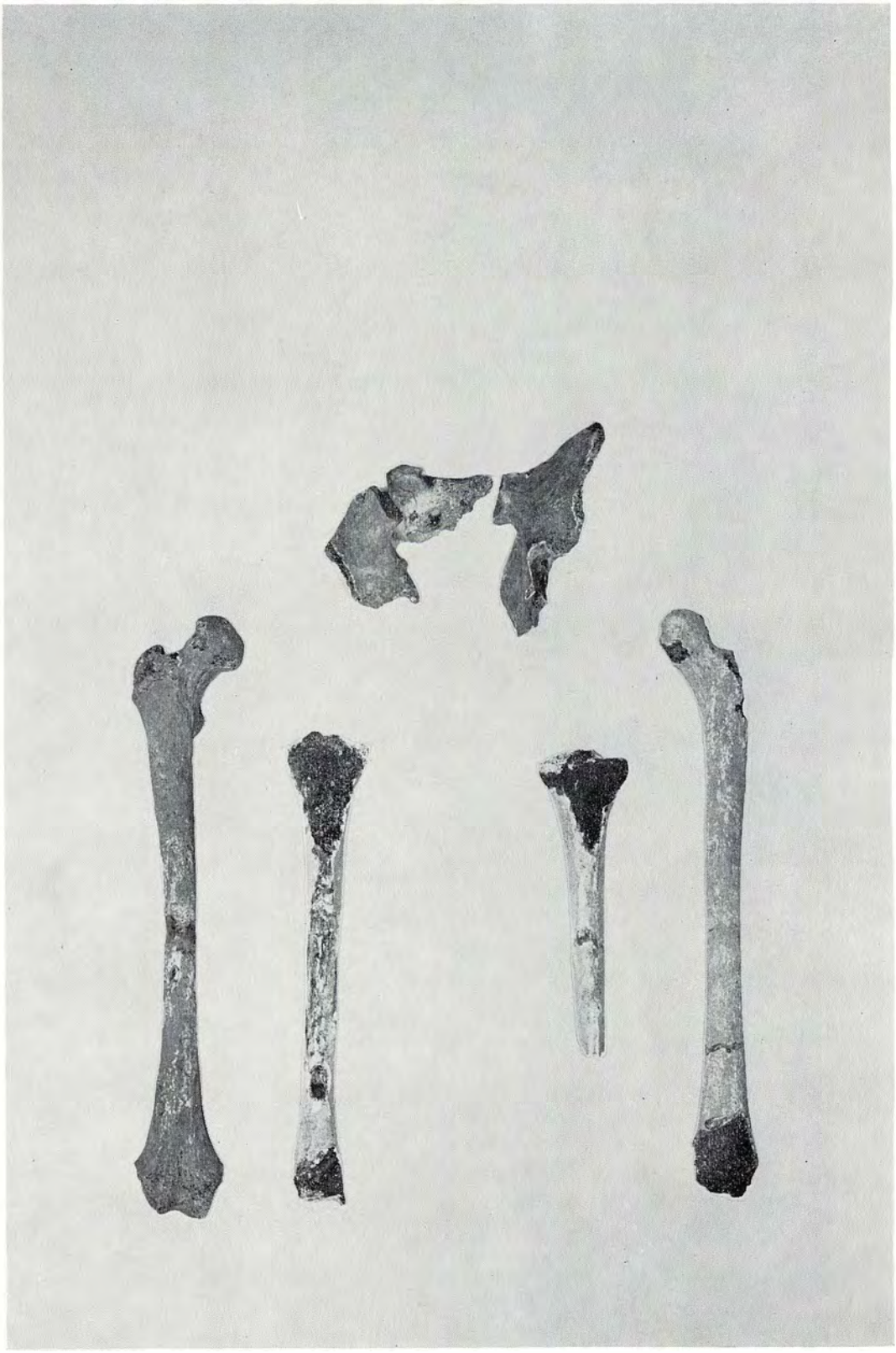
図版17　2号人骨（男性）



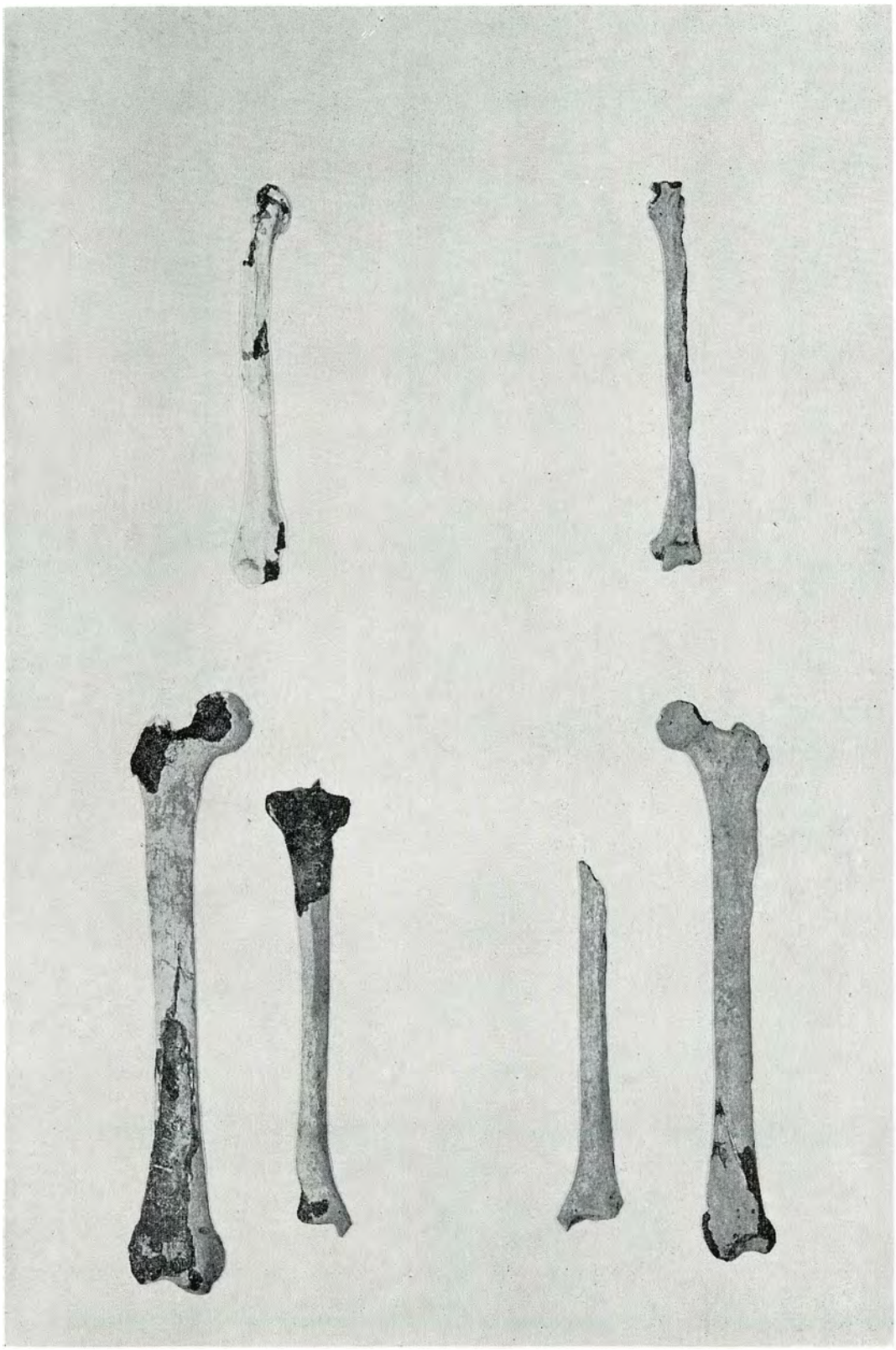
図版18　6号人骨（男性）



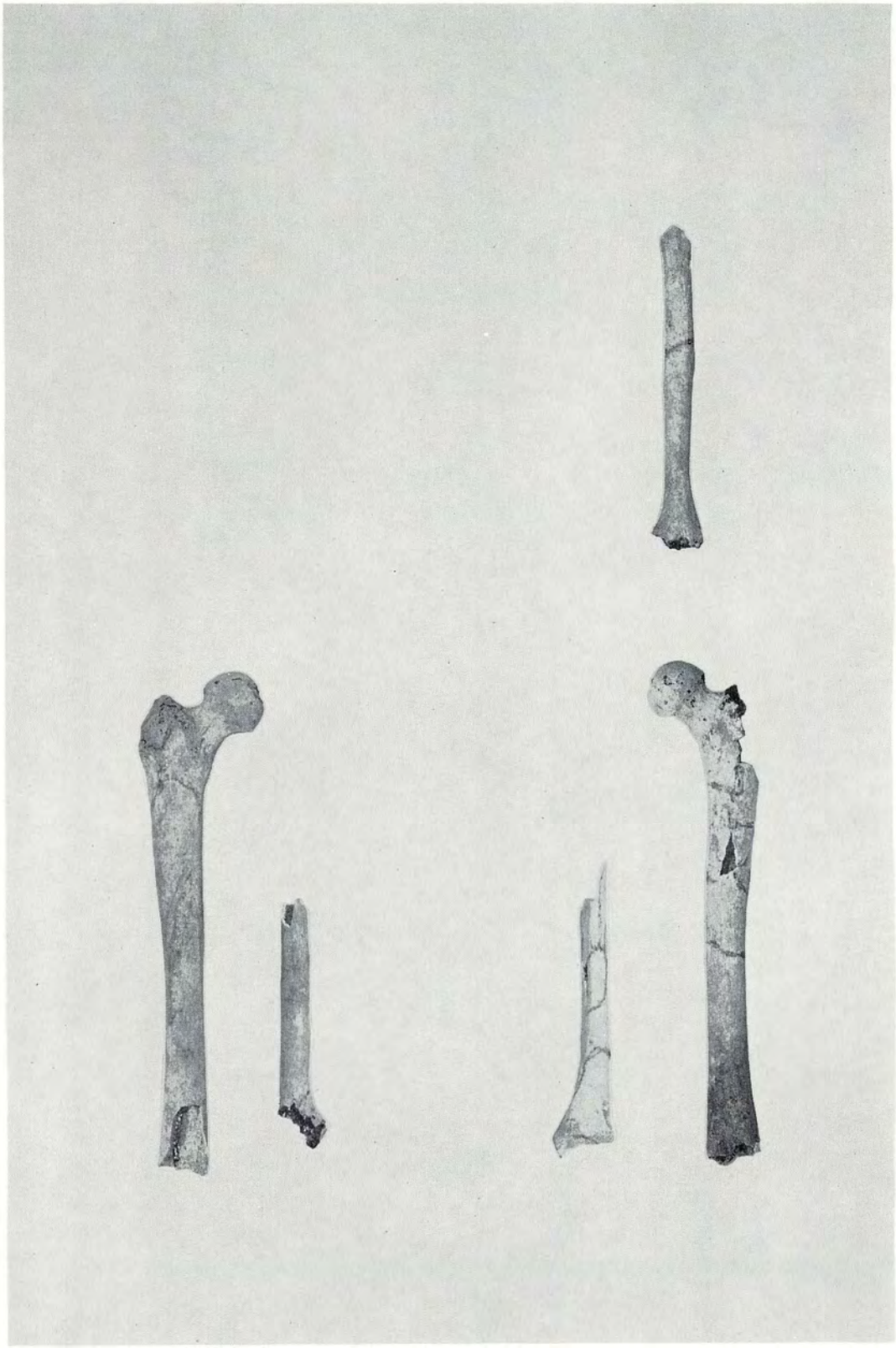
図版19　31号人骨（男性）



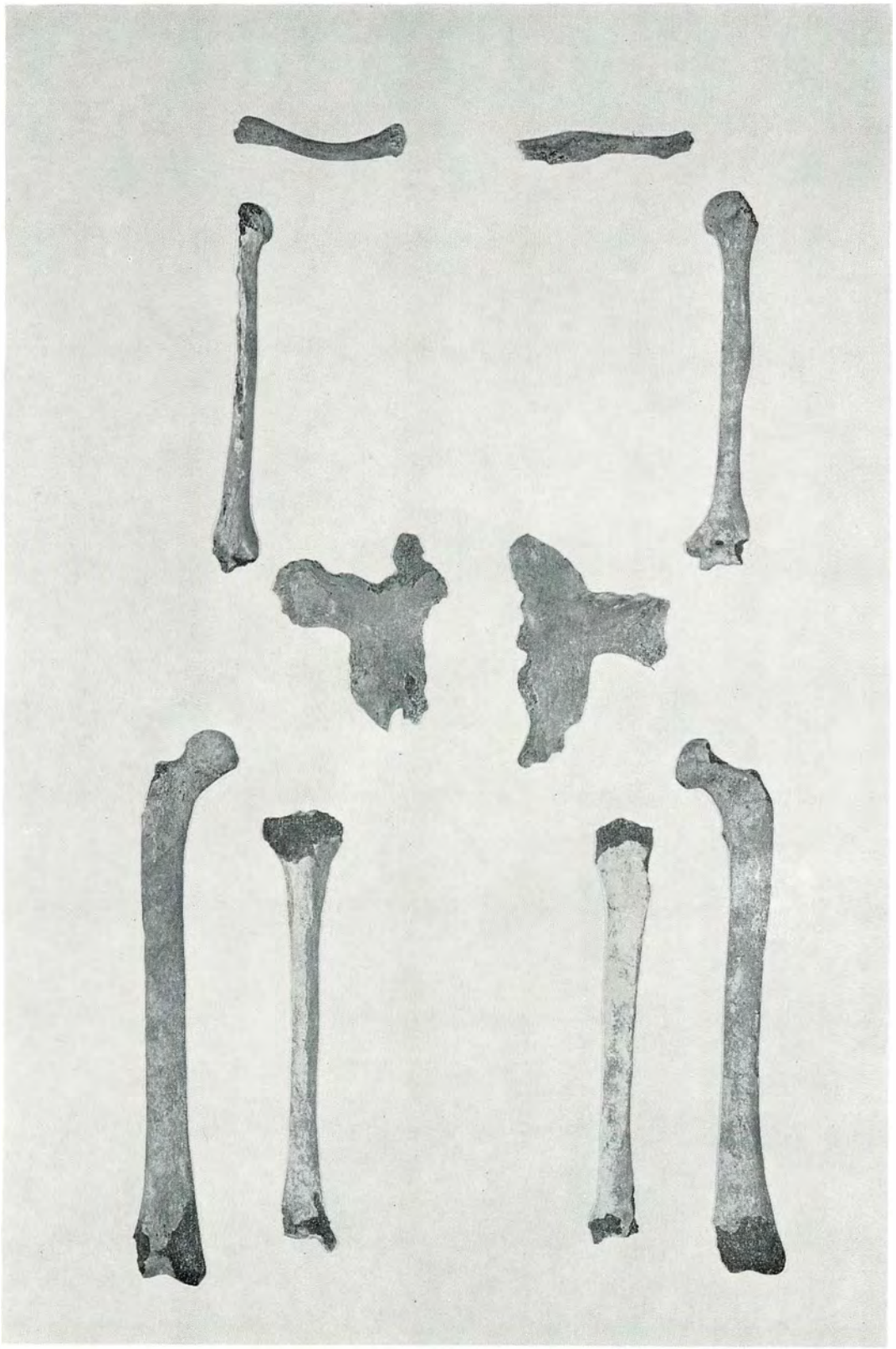
図版20　39号人骨（男性）



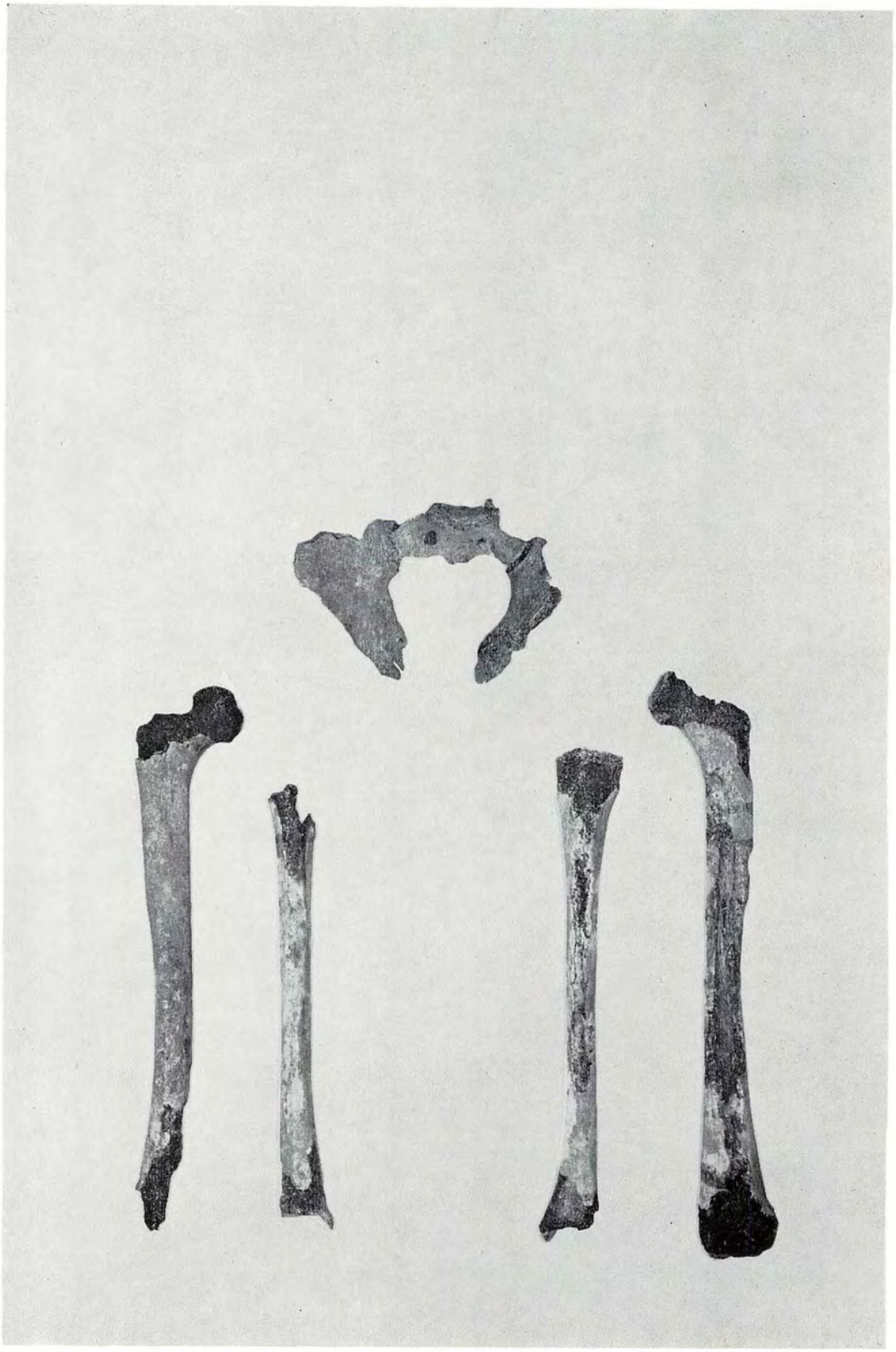
図版21　3号人骨（女性）



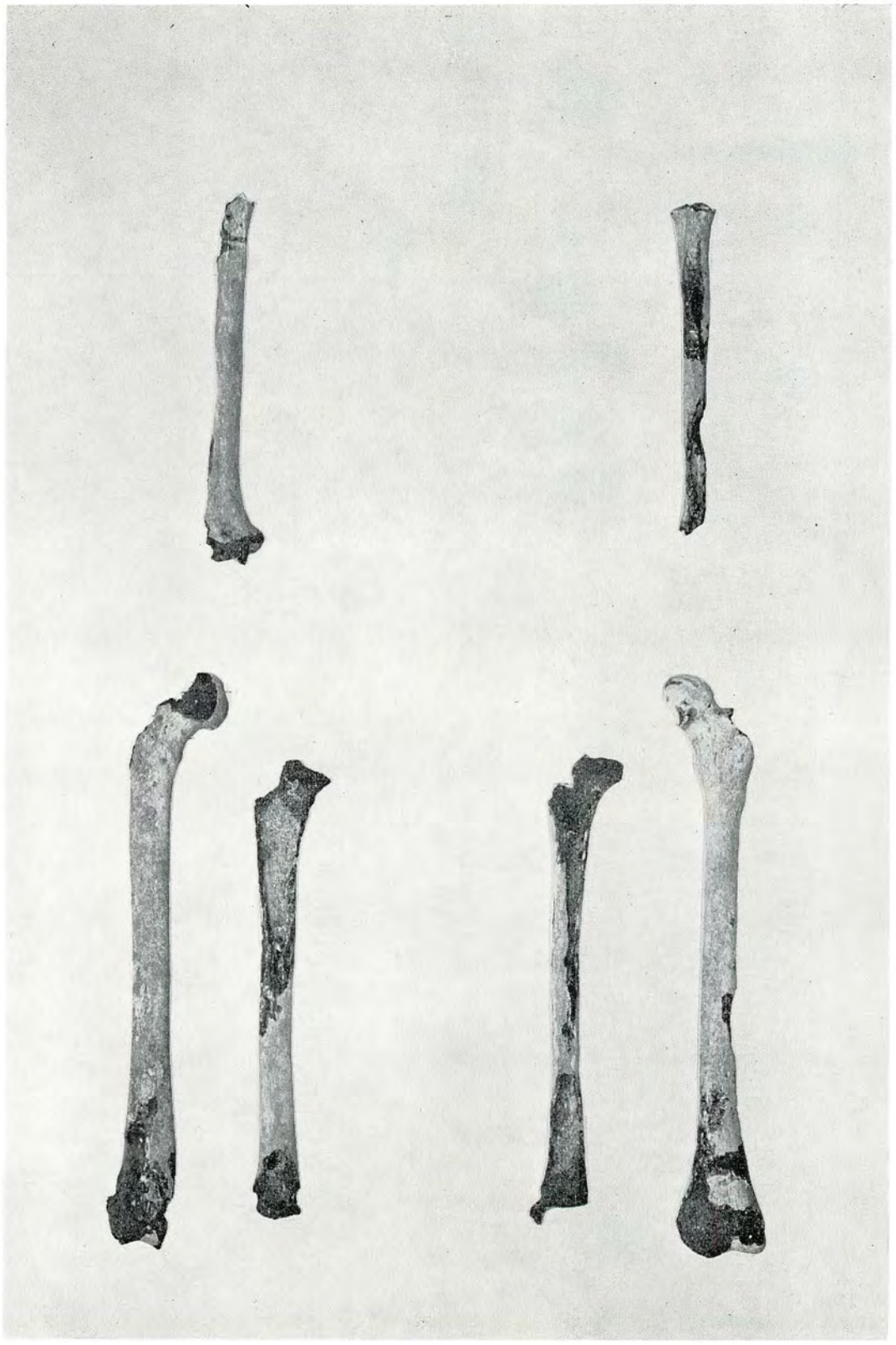
図版22　4号人骨（女性）



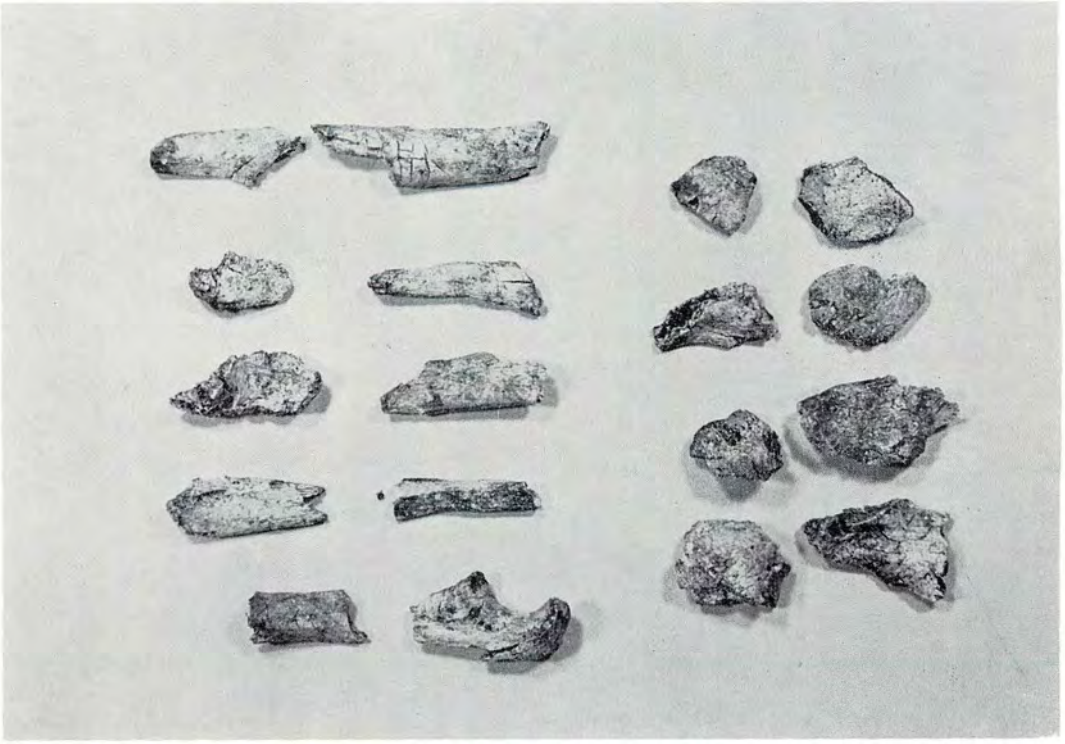
図版23　25号人骨（女性）



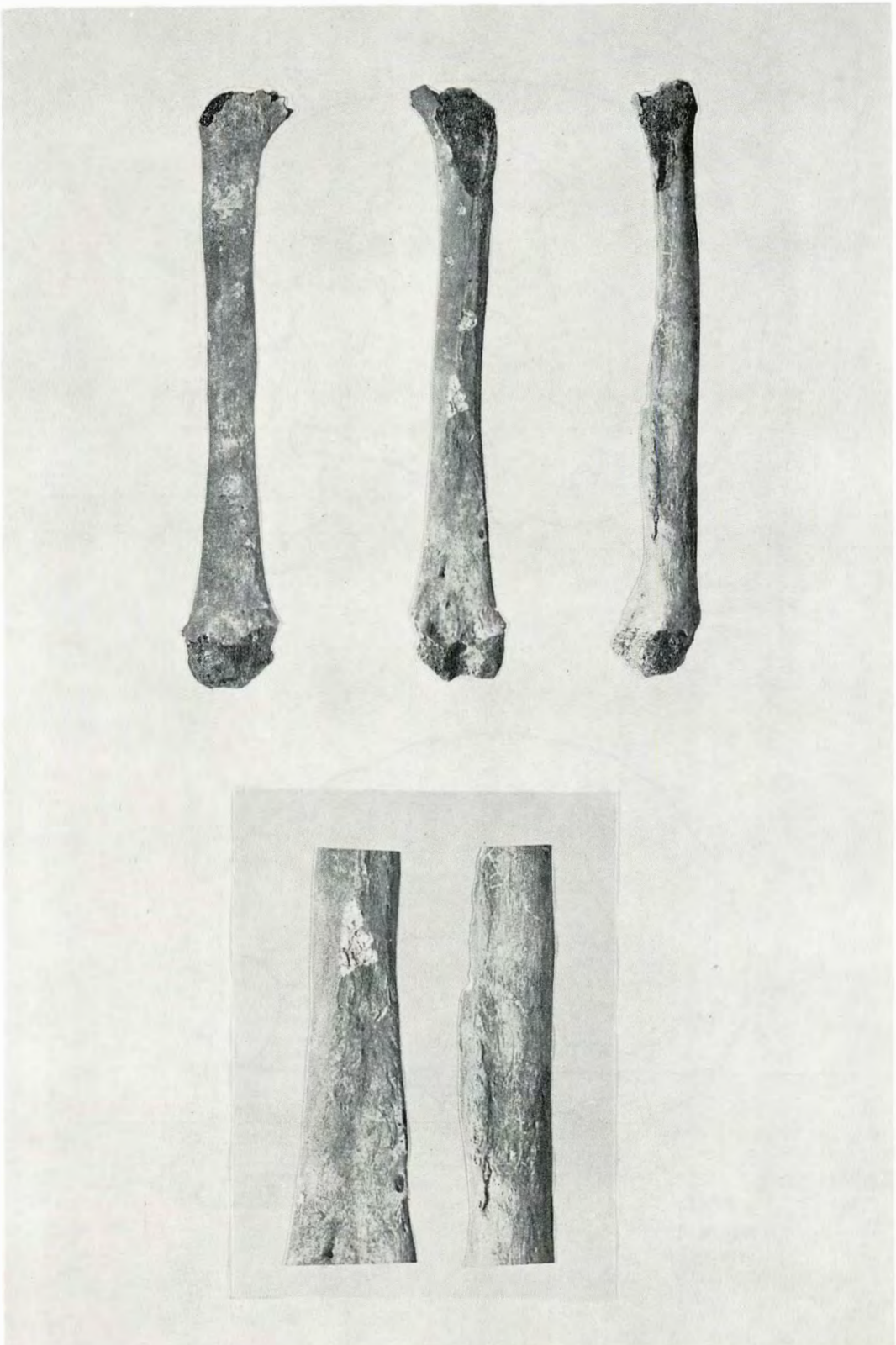
図版24　26A号人骨（女性）



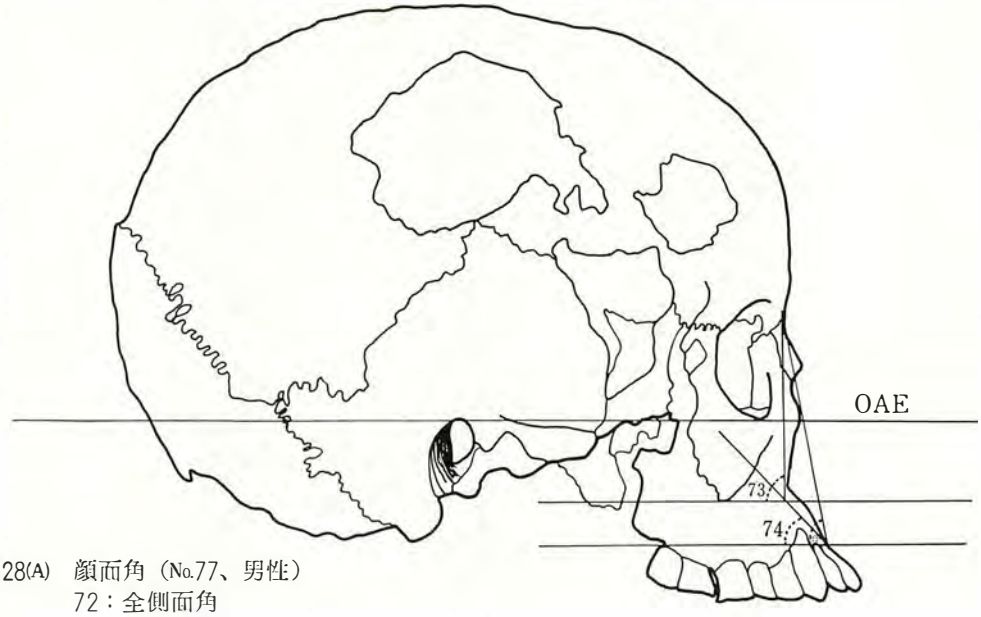
図版25　83号人骨（女性）



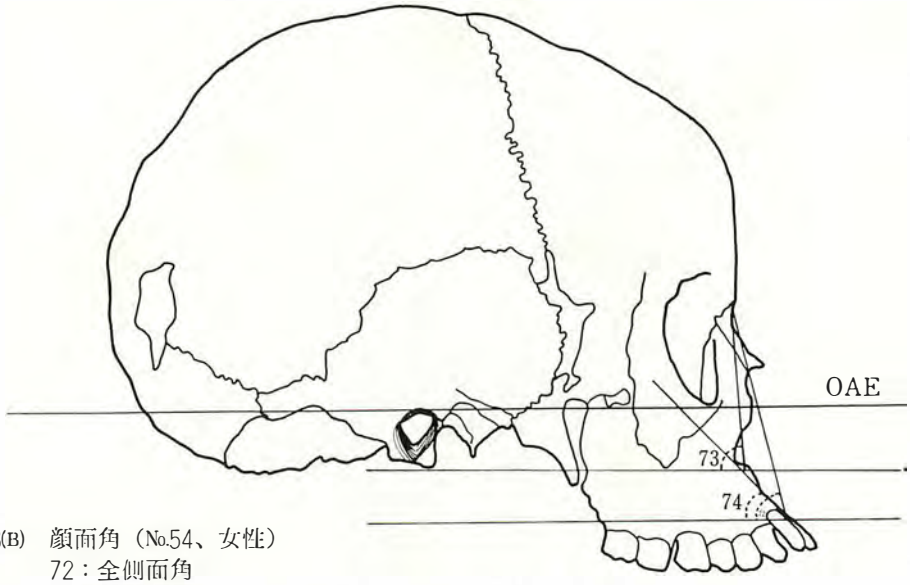
図版26　火葬人骨（上、47号・下、62号）



図版27　大腿骨の異常例（19号人骨・男性・成年）
上：前面、後面、外側面　下：後面、外側面



図版28(A)　顔面角（No.77、男性）
72：全側面角
73：鼻側面角
74：歯槽側面角



図版28(B)　顔面角（No.54、女性）
72：全側面角
73：鼻側面角
74：歯槽側面角

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 12 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：尾窪
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日